「さうです。經を封じたのは成佛した私の祖です。私ではありません。」
點石は云ふ。
「祖だつて、子孫だつて區別はない。剝いでもらはう。」
半偈は遮つた。
「御待ち下さい。この弟子のした事ではありません。佛の御命令に從つたばかりです。あなたも佛門の方です。佛の封じられたものを開けろとは御無理ではありませんか。」
「佛が經を作られて天下に流布されて、また封じられる譯はない。これは全く妖僧が幻術でした事に相違ない。」
半偈は怒つた。
「佛の三藏眞經は此上もなく尊い寶で、妖僧が幻術で封じられる譯のものではない。佛を指して妖と云ふのは、佛門の妖と云ふものだ。」
點石は眞紅になつて、
「わしがもし妖ならば、天下の佛は皆妖だ。」
と云ふ。と、大勢の僧は一齊にわめき立てゝ、
「經を開ける開けんは別として、妖か妖でないかを明らかにしろ。」

と湧き立つ樣に騷ぎ出す。半偈は心は動かないが、人は多い、語は多い。ざわ〳〵、わい〳〵とわめくので、何ともしやうがない。
小行者は、半偈の困つて居るのを見て手を出さうと思つたが、相手が相手なので、躊躇つて居ると、荷物の中で、木棒が躍り出す樣子で、かち〳〵と音を立てゝ居る。「はゝあ、これが何かしようと思つて居るな。」と思つたので、兩手で取り出して半偈に渡して、
「邪魔外道奴が大騷ぎです。ちよつと使つて御覽なさい。」
と云ふと、半偈は悟つて、手に持つて、點石や僧たちに向つて、
「野狐ども、無禮すな。佛法に靈があるかないか見ろ。」
と云つたが、この聲はさう高くはなかつたが、雷の落ちる樣に響き渡る。木棒も、手を離れないのに、點石や僧たちの頭に打ち下した樣。みんな驚き入つて、一言も云へなくなり、床に伏さつてしまつた。それとともに、邪念は一時に消えて、
「どうぞ御教へ下さい。」
と口々に云ふ。
半偈は喜んで、先づ點石を起して、
「一念が惡いと邪道に這入るが、すこしでも後悔すれば高僧となれる。私は何も御教へする事は

ない。たゞ皆さんが、けば〳〵しい事を止めて、清淨を保たれる樣に努められんことを望みます。」

點石は氣を取り直して、

「それでは、祈禱もいけないでせうか。」

と云ふと半偈は、

「そんな事はありません。したつて差支ありません。朝廷のため、天下のため、大衆のために、と考へて行へば、自然清淨になるのです。さうでないと、佛の敎は世を救ふのではなく、人を禍することになるばかりです。」

と云ふと、點石は問ふ。

「祭や、祈禱が、して差支なければ、經の講說も差支ないではありませんか。」

「さうは行きません。講說はいゝですが、間違つた講說はいけません。本當の解釋を得ない講說は全くいけないのです。」

と半偈が云ふと、點石は默つてしまつた。と他の僧たちが、

「あなたの御論は結構に承はりましたが、私ども大勢は、經の講說で暮して居るのです。これを止めれば、どうしてやつて行けませう。」

半偈は答へて、

「施を受けて、十分食べるとなると、自然澤山寄進させる事になる。罪はこゝにあるのです。佛の御力は大きい。きつとその中何がある。心配することはありません。」

と云ふ。點石は問ふ。

「あなたのこの木の棒は、どうしてさう力があるのです?」

「いや、何の力もないのです。佛の御力で邪と正とを區別するだけのものです。」

「邪と正とを區別すれば、妖怪退治も出來るでせう。」

と云ふが、半偈はその方に使つたことがないので、何とも答へない。すると小行者が横から、

「どうして、妖怪を退治することが出來ないものですか。」

「妖怪には神通力があるから、この木棒では駄目でせう。」

「いや、もし木棒でいけなければ、鐵棒ならいゝでせう。」

點石が云ふ。

「鐵棒と云はれるが、こゝに見えないではありませんか。」

小行者が云ふ。

「御覽になりたいのですか。」

「どうか御見せ下さい。」
小行者はいゝ氣持で、堂の外に走り出して、
「鐵棒の御覽になりたい方は、こちらへ、こちらへ。」
と云ふと點石も僧たちも潮の湧く樣に階段の下に出て集まる。小行者は、手で耳の中から繡花針を取り出し、大聲を上げて、「變れ。」と云ふと、忽ち碗ほどの太さ、二丈あまりの一條の金箍棒となつた。それを手に持つて振りながら、
「どうです。これでも妖怪は退治られんか。」
と云ふと、點石たちは靜まりかへつて、敬々しく半偈に禮をして、
「あなた方御二人は活佛であつたのです。私どもの眼ではそれが分らないものですから、飛んだ失禮を致しました。どうぞ御許しを。……。」
と云ふ。半偈は、小行者にこんな手並があるとは知らなかつたが、俄かに分つたので喜んで、
「私は旅行中こゝを御借りしたために、かう云ふ、法を護る力を得ました。」
と云ふと、點石は、
「いや、私はその力が無いものですから、三頃大きな寺を取られました。」
と云ふので、半偈は問ふ。

「それはどうしたと云ふのです?」
點石は云ふ。
「それはかう云ふ次第です。こゝから西方三百里に、五行餘氣山と云ふのがあります。これは雨界山の脉なのですが、こゝに佛化寺といふ盛なのがあります。私はこゝで祈禱をして居ました處、近ごろ妖怪が來ました。長い口で猪の樣、全く醜い形をして居ます。それが佛法に這入つて、何とか師父の來られるのを待つて居る、とか云ひましたが、私はそれを泊めませんでした。と大力を出して、門前の鐵の幡竿を拔いて、振り立てゝ寺の中に這入つて來ました。千人あまり僧たちが居ましたが、それに打たれてとてもかなはず、散り散り、ばら〳〵になつてしまひました。それで、今はそのものが、貯へて居た食糧を一人占めにして居るので、誰も手を出すことは出來ません。ですから、立派な寺も、今は妖怪の棲家になつてしまつて居ます。この御弟子の方の御力で、それを退治ることは出來ますまいか。」
小行者はから〳〵と笑つた。
「何んです。その奴。妖怪とも云はれまい。西の方は通路ですから、案内をして下さい。私はそれを逐ひ出して、寺をあなたに御還ししませう。」
「逐うて下されば、至極辱ない事です。さうすれば、別に僧を招んで、佛地を汚さぬ樣にします。

これが私の情願です。」

「よろしい。すぐ行きませう。」

と云つて、鐵棒をしまつて、また荷物や、木棒を取つて出ようとすると、點石たちは「まあ〳〵。」と留めて一夜を過ごさせ、翌日「丈夫な僧に案内させよう。」と云ふが、半偈は、

「急ぎますから、參ります。後からついて來て下さい。」

と云つて前に立つたので、點石はしかたがなく、僧たちと門まで送つて出る。小行者は、半偈を援けて馬に乘らせて立つて行つた。

一一

半偈と小行者とは、點石たちを一喝してから、清々しい氣持で、西に向つて進んだ。と、後から點石が選んだ、二十人の猛勇な僧たちが逐ひかけて護衛して、佛化寺の妖怪を退治してくれる樣に賴んだ。

三四日經つと、一行は五行餘氣山の麓に著いた。僧たちが、

「あの山の鼻を通つて、二三里上ると佛化寺が見えます。」

と云ふので、小行者は「師匠が驚いてはいけない。」と思つて、山の下の農家の前で馬から下りさせて、

「どうぞ、此處で御待ち下さい。山に上つて、どんな妖怪か、見た上で退治して參ります。それからすぐまた西へ行きませう。」

と云ふ。

「用心して行け。」

「大事ありません。」

小行者は金箍棒を握つて山に上つて行くと、その中に寺の前に著いた。

小行者は寺の中を伺ふと、ひつそりとして何も居ない。庭には草が一尺も暢びて居る。それを分けて、大殿に上つて見る。鐘も太鼓もあるのに、香の烟は立つて居ない。禪堂から、僧房から尋ね廻るが、何の影も見えない。「こりや、妖怪は何處かに行つて、こゝに住まないのだらう。」と思ひつゝ、臺所に廻つて見ると、どこかで、くん〳〵うん〳〵と云ふ鼾聲が聞こえる。何の姿も見えないが、その鼾の聲は高く響いて居る。小行者は尋ね當てないので焦立つて、鐵棒で、大水瓶をなぐりつけた。と、水瓶はがらつと高い音を立てゝ碎け散つた。それと同時に、

「妖怪奴、何處に居る。早く出て來い。」

と大聲に叫ぶと、それの止まない間に、竈の下の柴の中から、俄かに、口の長い耳の大きな妖怪が飛び出した。小行者はびつくりして避けて居ると、大殿の前に行つて、一本の鐵の幡竿を引き拔いて打つて來た。元來、この妖怪は柴の中でよく眠つて居たのを、急に小行者に醒まされたので、怒り立つて、道具を取つて打つてかゝつたのであつた。

小行者は、その時はやく妖怪の眼の前に居たので、鐵棒で支へた。で、二人は物をも云はず打ち合つたが、幡竿も鐵棒も共に長いのに、佛殿の前は狹いので、十分に使へない。で、妖怪は急に中天に飛び上つた。小行者はそれを見て笑ひつゝ、

「この妖怪は雲に乘れるのだな。相手に取つて不足はない。」

と、一飛びして、天に上つて眞向から打つ。妖怪は幡竿で受け留める。金箍棒は忽ち上り、忽ち下つて、龍の樣に動き、鐵の幡竿は右になり左になつて、蟒の如くにうねる。戰ふこと二十餘合になると、幡竿は世間普通の鐵であるのに、金箍棒は天河の鐵で作つたので、打ち合ふ中に竿は中途から折れた。妖怪はびつくりして、半分の竿を持ちながら、風に連れて西の方に逃げようとする。小行者は大聲を上げて、

「妖怪奴。何處に行く?」

と云つて逐うて行く。小行者の雲は速いので、だん〳〵追ひ著きさうになると、妖怪はふりかへつて、半分の幡竿で支へながら、

「外道奴、貴樣とは遺恨もないのに、何處まで追ひ駈けて來るのだ?」

と問ふ。

「この妖怪奴、佛化寺を取つて、僧たちをみんな追ひ出したではないか。それに、おれが、追つ駈けるのを不思議がるとは何の事だ。」

「追ひ出したのではないぞ。自分から出て行つたのだぞ。おれは出家人だ。何日か居たら出て行くのだ。寺を取るものか。」

小行者は笑つた。
「貴様が出家人か。面を見ろ。どこの山から出て來た野猪か。それが修行と云ふのは、佛門を汚すと云ふものだ。」
「貴様だつて同じだ。和向の様な拵へをして居るが、ちつとも佛徒らしくないではないか。貴様は知らないだらうが、『狗子も佛性あり。』と云ふぞ。おれは佛祖の後だぞ。野猪に見えても、修行はするぞ。」
小行者はまた笑つた。
「妖怪奴。佛家のきまり話を云ふな。そんな事で、初めて入門した愚僧どもは哄されようが、おれたちの前では通用しないぞ。貴様は『佛祖の後だ。』と云つたが、一體誰の事だ。ちやんと云つて見ろ。本當なら許して遣るが、少しでも虚言を云ふなら、此の棒でくたばらしてやるぞ。」
と云ふと妖怪は、
「おれは虚言は云はない。が、貴様の様な佛門に這入らない奴は、本當だと思ふまい。」
「這入らない事があるものか。三十三天神でも、西方の諸菩薩でも、名山の仙人でも、幽界の鬼でも、おれは皆知つて居るぞ。快く云へ。虚言を云つたら、捕へて對決させてやるから。」
「餘計な事を云ふな。ぢや、おれが貴様を試驗してやらう。貴様は、淨壇使者と云ふのを知つて

居るか。」
小行者は笑ひを止めず。
「貴様が『佛祖の後だ。』と云ふから、どんなものかと云つたが、よく聞け。佛祖と云ふのは、佛如來、釋迦如來、燃燈佛、定光佛、彌勒佛、藥師佛を外にして、澤山の數で一々は擧げられないが、その中で、淨壇使者などと云ふのは聞いた事がない。それを佛祖と云ふのは、何と云ふ事だ。馬鹿馬鹿しい。」
と云ふと、妖怪もまた笑つた。
「貴様は知らないのだ。云ふではないか。『人には幾通りの人がある。佛には幾通りの佛がある。』過去佛もあり、現在佛もあり、未來佛もある。この淨壇使者と云ふのは近頃出來た佛だ。貴様はまだ、知らないのだ。」
「新たに出來た佛なら、何々佛と云ふだらう。どうして使者と云ふのだ?」
妖怪はまた笑つた。
「貴様は物を知らないな。佛と云ふのは總名だぞ。貴様は佛號は知つて居る様だが、旃檀功德佛と鬪戰勝佛と云ふのを知つて居るか。」
「何、何だつて。貴様に問はれるのか。この二人はおれの一家の様なものだ。知らんことがある

ものか。」

妖怪は笑つてまた笑つた。

「貴様は虚言を云ふが、すこし本當らしい處もある。二人の佛が一家同様と云へば、貴様はその名を知つて居るだらう。」

「知らんことがあるものか。聞かせてやらうか。旃檀功德佛とは、唐の太宗から『御弟』の名を賜はつた陳玄奘法師だ。鬪戰勝佛とは、法師の一の弟子の孫悟空。孫行者とも云ふのだ。眞經を取つて來たから、皆、成佛したのだ。」

と云ふと、妖怪は驚いてまた喜んだ。

「貴様知つて居るのか、孫行者が旃檀功德佛の一の弟子と云ふ事を。それを知つて居れば、二の弟子の猪八戒も知つて居さうなものだ。それが、淨壇使者なのだぞ。」

「猪八戒を知らんことがあるものか。ちやんと知つて居る。が、貴様は一體それと何の關係があるのか。」

「また虚言だと云ふかも知れんが、實は猪八戒はおれの父親だ。」

小行者は笑つた。

「出たらめを云ふな。あれは佛だ。貴様は妖怪だ。佛と妖怪と親子なものか。」

「では云つて聞かせよう。父の猪八戒は經を取りに行く前に、高家庄で、娘の婿となつて居たのだ。ところが經を取りに行つた後で、娘乃ちおれの母の高翠蘭はおれを孕んで居た。父が行つてから十四年、父が經を取つて來て成佛した時、おれはまさに生れ出たのだ。佛の御蔭で神通力を持つて居るが、父が猪だから、おれも見る通り猪の形だ。だから皆『妖怪だ。』と云つて、打ち殺さうとしたが、おれに手並があるものだから、殺されもしなくつて、今も居るのだ。どうだ、これでも佛祖の後と云はれないか。」

小行者は聞いて、

「さうか。さう云ふ譯か。では佛祖の後であらうが、それで、どうして、こんな無茶な事をする？」

と詰ると、妖怪は云ふ。

「いや、少しは殺生もしたが、それは以前の事だ。佛祖の教を受けて和尚となつてからは、無茶な事はしない。佛化寺を借りて居るのも、師匠の來るのを待つからだ。」

「なに、『教を受けた。』と云ふが、誰から受けたのだ？　また誰の來るのを待つて居るのだ？」

妖怪は云ふ。

「それはかうだ。以前、黑風河で、腹が減つたので、人を殺して食つたが、料らず旃檀佛の玄奘

法師が見られて、由來を聞かれたので、『猪八戒の子です。』と申し上げると、『墮落してはいけない。佛の道に這入れ。』と云はれ、また、『今、唐の朝廷から、半偈が西天に行つて眞解を求めに行く。その弟子になつてついて行け。それで成道しろ。』と諭された。で、おれはこゝでその人を待つて居るのだ。一體貴樣は何處から來た外道だ？　おれを追ひ立てゝ、おれの成道の邪魔をするとは何事だ。」

小行者は喜んだ。

「あゝ、さうだつたのか。おれはその眞解を求める人の弟子だ。快くおれについて來い。師匠に逢はせてやる。その師匠は、今ちやんと寺の山の下に居られる。」

「騙すな。そんな誂へ通りに行くものか。」

「いや、騙さない。本當の事だ。」

「本當かどうか。おれが貴樣より先に行つて見て來るぞ。」

と云つて妖怪は雲の向を變へて、寺の方にやつて來る。

半偈を護衛する僧たちは山の下で見て居ると、小行者が妖怪を逐うて西の方に行つたので、半偈に願つて、山に上つて寺の大殿の上に座つて貰つて居る。と、風がさつと吹くと一處に、變な妖怪が半分の幡竿を持つて、眼の前に現はれた。びつくりして僧たちはあちらに逃げ、こちらに

隱れた。が、逃げ了せないのが捕へられた。

「慌てんでもいゝ。尋ねるが、今おれと打ち合つた和尙は何と云ふのだ。」

僧はふるへながら、

「あれは旅の和尙です。あなたと打ち合つたのは、私どもと關係のない人です。どうぞ御免下さい。」

と云ふと、妖怪は聞く。

「では、あれが『唐の朝廷から遣はされて、西天に行つて眞解を求める方の弟子だ。』と云つたが、本當か。」

「本當です。本當です。これで御免下さい。」

「その師匠は何處に居られる。」

「大殿の上に座つて居られます。」

と聞くと、妖怪は眞直に駈けて行つて見ると、一人の半老和尙が眉を垂れ、目を閉ぢてきちんと座つて居る。

妖怪は幡竿を捨てゝ、急いで座つて禮をして、

「御師匠樣、私、猪守拙が、こゝで御出を御待ち致して居りました。」

と云ふ。半偈は頭を上げて見ると、長い口、大きな耳、異様な形なので、びつくりして、
「お前は何處の妖怪だ？　自分を迷はさうとしても駄目だぞ。自分は佛力を恃んで居るから、決して昇れないぞ。」
と云ふと、妖怪は、
「いえ、さうではありません。あなたの御弟子になりたいものです。」
と云ひも終らぬ處へ、小行者が駈け著けた。その有様を見て、今までの事譯をすつかり話すと、半偈は大滿悦で、立つて佛前に行つて二度禮をして、
「御蔭を持ちまして、また徒弟が出來ました。辱ない事でございます。どんな苦勞があつても、西天に參つて、眞解を求めまして、御恩報じを致します。」
と云つて、ふりかへつて猪守拙に、
「御前は前因があるのだ。自分を師匠と頼んで成道をしろ。こゝから靈山までは千山萬水がある。お前は猛勇心で精進しろ。骨折を厭がつてはいかん。眞解を手に入れて來れば、自然に成佛が出來る。」
と勵ますと、守拙は、
「有難うございます。私は、御覽の通り、外は醜い形をして居りますが、内は眞面目で、たゞ一

心があるばかりで、二心はありません。御心配には及びません。」
半偈はそのさつぱりした云ひ方を喜んで、
「よし、よし、よろしい。確かに成佛が出來る人だ。が、御前の名は？」
「守拙と申します。」
「守拙か。兄弟子の名は履眞、これはな皆都合のいゝ名前だ。が、少し云ひにくい様だ。どうだ、一つ名をつけてやらうか。」
「どうぞ、いゝ様に御つけ下さい。」
半偈は云ふ。
「兄弟子は祖の名が孫行者と云つたから、小行者とつけた。御前の父の名が猪八戒と云つたのは、五葉、三原の八つを戒めると云ふのだらう。」
「さやうでございませうか。私は愚かで、むづかしい事は分かりません。」
半偈は云ふ。
「さう云へば、貪、嗔、色、相、一切を戒めると云ふ意味で、『猪一戒』としようか。」
守拙は喜んだ。
「結構、結構。面倒くさくなくつて結構でございます。」

この時、僧たちは立ち聞きをして、事情が分つたので、安心して追ひ〳〵あらはれて來た。小行者は、

「もう一家の人となつたのだ。恐がらなくつてもよろしい。早く大法師に知らせて、山門を舊の様にしたらいゝ。また、香や燭を持つて來て、この人の剃髪の用意をして貰はう。」

僧たちは二人のものを遣つて、點石に知らせ、外のものは、急いで掃除をして、佛前の香や、燭や、鐘や、太鼓を、もとのようにちやんとした。で、半偈は猪一戒の髪を剃り、戒を授ける。

一戒は佛に禮をして、

「私は、師父に弟子の數に入れて戴きましたが、性來しやうのない、がさつものでございますから、どうか特別の御守り、御授けのほどを願ひ上げます。」

と云つて、また半偈に禮をして、

「私は御蔭で和尚になりましたが、實は名前だけ、口下手で說經も出來ず、寄進の募集も出來ず、修行をすれば睡くなります。その上に大食ひで、何も取り處はありませんが、鞭を執つたり、荷物を挑いだりすることは出來ます。これから人夫になつて、西天への御伴をして眞解を取る御手傳を致します。」

半偈が云ふ。

「それでよろしい。自分について西天に行つて眞解を取れば、それで十分。說經だの、修行だのと、いろ〳〵の事をするには及ばん。」

「辱うございます。これが本當の師匠、私の本當の御師匠樣でございます。」

と一戒は云つて、今度は小行者に向き直つて、禮をして、

「もう兄弟となつたのですから、途中で不都合があつても、どうか、勘辨して、一緒に行つて下さい。」

と云ふと、小行者は、

「そんな事は、云ふまでもない。一處に行かう。」

と答へる。半偈は僧たちに湯を湧かさせて、一戒の身を淸めさせ、また舊い衣を出させて、著換へさせた。それから、齋を出させて、三人で食べた。

齋が濟むと、半偈は行かうとすると、僧たちは留めて、

「今日はもう遲うございますから、どうか御泊り下さい。」

と云つて、禪堂を掃除した。

「それならば、明日早く行くことにしよう。」

と話して、みんなそこに這入つた。で、半偈は小行者に、

「御前が使つたあの鐵棒は長いものだが、何處にしまつたのだ。荷物には這入るまいが。」
と問ふと、小行者は笑つた。
「私の鐵棒は、實は祖の寶なのです。大禹が治水の時の道具なのですが、祖が龍王から取つて來て、それで天宮を鬧がせました。が、佛となつては不用ですから、花果山に鎭めとして置きました。それを私が自分のものとして居るのです。本當に寶で、大きくしようとすれば大きくなり、小さくしようと思へば小さくなり、平素は繡花針として、耳の中に藏つて居ますから、御覽になれんのです。」
「はゝあ、さう云ふものか。珍らしい寶だな。」
と半偈が感嘆すると、一戒が、
「さう云へば、私の父親も寶を持つて居ました。」
と云ふ。
「どんな寶だ。」
「一本で九つ齒のある釘鈀です。父親がそれで路々妖怪どもを退治しました。成佛した時、私は生れたのですが、高家も一門死に果てましたので、この釘鈀は何處に行つたか分からなくなつてしまつて居ます。で、先頃は何もないものですから、寺の門前の幡竿を使ひましたが、それも今は二つになりましたから、役に立ちません。あの釘鈀がもしあれば、路々妖怪退治の手助も出來るのですのに。」

と云ふと、小行者は笑つた。
「大丈夫だ。本當にそんなものがあるのなら、自分は探がして來て上げる。お前の父親は今は佛になつて天に居るのだから、何でもない事だ。其處に尋ねて行つて、ちやんと聞いて來られる。」
「さう云はれゝば、それでいゝが、天は廣いし、佛は多いし、それに、顏は知らないし、探し樣もないではないか。」
「そんな事は何でもない。今日はまだ日も暮れない。今の中二人で尋ねに行かうではないか。きつと逢へるぞ。」
半偈が云ふ。
「さうなれば至極よろしい。自分は此處で待つて居る。二人で快く行つて、快く歸つて來い。」
二人は寺から出た。
猪一戒は天を仰いだ。
「一體、何處から、探がしたらいゝだらう。」
「心配するな。尋ねて見れば、あたりがつく。」

「出たらめを云つてはいかん。天には人が歩いては居らん。どこでどう尋ねるのか？」
「いや、きつと人が來る。」
と小行者は云つて、耳の中から金箍棒を取り出して、東の方から、西の方へ打つて行き、また西の方から東の方へ打つて行つて、口の中で、
「自分たちは、唐の天子の勅命で、西天に行つて佛を拜んで、眞解を求めて來るために、こゝを通るのだ。神たちはみんな護つて居られるのだ。それにこの五行餘氣山の神は、何と云ふ事だ？迎へにも出んとは不屆至極だぞ。」
と云ひも終らぬ中に、山の陰から、二人の老人がふるへふるへ出て來て地に跪いた。
「どうも濟みません。御出迎へが遲れまして。」
と云ふと、小行者は鐵棒をしまつた。
「御前たちは何處の神だ？」
「私は山の神でございます。」
「私は土地の神で。」
小行者は詰つた。
「山の神、土地の神ならば、事毎に氣をつけるべきではないか。」

「氣をつけんことはありません。」
「氣をつけるならば、どうして出迎へをせん。」
山の神、土地の神が答へて、
「私どもは、佛化寺の前に住まつて居ましたので、御通りになる佛菩薩はみな存じじて居ます。ところが、近頃、猪小天蓬に横取りされたものですから、止むを得ず、山から離れて遠方に居るのです。やつと今譯が知れたので知つた譯で遲れて參りましたのです。」
と辯解して、なほ、
「今小天蓬が、あなたの御導きで唐長老の御弟子になつて、西天に行かれるさうですから、御祝に出ようとして居たのです。それをあなたに叱りつけられたのです。どうか御許し下さい。」
と云ふと、小行者は、
「さう云ふ事なら咎めもしない。が今、弟弟子の、この猪一戒を猪小天蓬と云つた樣だが、それはどういふ事だ？」
と問ふと、二人は、
「御存じありませんか。あの方は、天河水神猪天蓬元帥の遺腹です。」
と云ふと、小行者は不審がる。

「あれは『淨壇使者の子だ。』と云つて居るが、また天蓬元帥と云ふのがあるのか。」
二人が笑つた。
「淨壇使者と云ふのが、天蓬元帥です。成佛したから淨壇使者と云ふのです。二人ではありません。全く一人です。」
小行者は喜んだ。が、猪一戒は云ふ。
「やくざ神ども、御前は人の事をさらけ出す。猪家は代々の修行者だ。虚言を云ふと承知しないぞ。」
「そんな事を云ふな。人の名と木の影とは隱されないものだ。」
と云つて、神に、
「淨壇使者の來歴を知つて居るなら、きつと住處を知つて居るだらう。尋ねようとして居る處だ。」
と云ふと、二人の神が答へる。
「住處に行つたつて駄目です。」
「どうして駄目だ?」
二人が云ふ。

「猪天蓬は經を取つた手柄で、佛となつたのですが、胃袋が大きいので、淨壇使者とされたのです。近ごろ神佛を信ずる人が多いので、供物は朝晩斷えません。ですから、毎日外に出ては食べるのに、そりや急がしい。どうして、どうして、住處にじつとして居られるものですか。」
小行者は心配した。
「それでは逢ふ事はむづかしいだらう。」
「心配なさるな。むづかしいと云へばむづかしい。むづかしくないと云へば、むづかしくない。私が云ふ通りになされば、尋ね當てられませう。」
小行者は喜んで、
「さう云ふ事があれば、早く敎へろ。佛に御目にかゝれば、それを第一の手柄とするぞ。」
と云つた。

一二

五行餘氣山の山の神と土地の神とが、小行者と猪一戒とが、淨壇使者を尋ねるので、

「こゝから西北千里行くと、哈泌國。そこの國王が、無量寺で大法會を催して居ます。淨壇使者はきつと其處に居られます。そこに行つて御逢ひなさい。」

と敎へる。二人は喜んで、

「有難う。さう分かれば、其處に行く。二人は歸つてよろしい。」

と云ふと、神たちは退いた。

小行者は、それで猪一戒と一處に西北に向つて進む。暫くすると、向うに城が見える。それが哈泌國だ。雲から下りて尋ねて無量寺に著くと、聞いた通り、大勢の僧が、式をし、讀經をして、法會を開いて居る。香や、燭も澤山で、極めて盛大である。が、不思議な事には、諸々の佛、菩薩の姿が一つもない。小行者は云ふ。

「お前の父親の來られんと云ふのはどう云ふものか。よその淨壇に行つて居られるのではなからうか。」

猪一戒は答へる。

「そんな事はあるまい。こんなに盛んな儀式で、供物も澤山あるのに、來ないことはあるまい。時間が早過ぎたのではないか。門前に行つて、暫く待つことゝしよう。」

「さうかも知れん。」

と、小行者は云つて、雲を踏んで、中天に居つて四方を見廻すと、時も經たず、西北の方から亂れた雲がぐん〳〵押して來る。小行者はそれと見て、猪一戒に、

「どうも、來られたらしい。」

「どうして分かる。外の佛菩薩かも知れん。」

「いや、さうではない。佛菩薩ならば、結構な光が雲にちやんとある。この雲は光はあるが、もやもやとして穩かな樣子がない。」

と云つて居る中に雲は近づいて來る。小行者は迎へて見ると、雲の中に、佛の形はして居るが、まだ長い口、大きな耳で、もとの姿をまだ持つて居る奇異なものが居る。で、大聲で、

「入らつしやるのは、淨壇の叔父さんではありませんか。」

と云ふと、

「おれはさうだが、御前は何處の役人か。法會があつておれを呼ぶのか。……。親類でもないの

に、『叔父さん』とはをかしいな。」

小行者は云ふ、

「いや、役人ではありません。法會に御招きするのでもありません。『叔父さん』と云ふのは、祖の闘戰勝佛とあなたと御同列であつたからで。……その關係で御目にかゝりに參つたのです。」

「さうか。孫兄弟子の後か。先頃兄弟子がおれに、『以前求めた經が、愚僧たちに間違つて講說されて、世間を誤つて居るから、一人の高僧が西天に行つて眞解を求める事になつた。で、自分等三人が、めい〳〵身替りを出して、前の仕事を完全にしよう。』と云つたが、御前がその代りとは嬉しいな。おれには遺腹が一人あるが、おれが西の方で成佛したから、緣が切れてあとは分らなくなつてしまつて尋ねようもない。で、毎日心配して居るが、もしかしたら、今日御前の來たのは、一處に行く人が要るからではないか。」

小行者が云ふ。

「さう心配なさるな。御子さんは尋ねあてゝ、ちやんとこゝに來て居られます。」

急いで猪一戒を招んで、

「快く來て、御父さんに逢へ。」

と云ふと猪一戒は急いで、淨壇使者の衣を引つ張つて、雲の中に伏さつた。

「御父さん。守拙が御初に御目にかゝります。」

使者は驚き且つ喜んで、

「お前がおれの子なら、本國は何處、母親は誰か知つて居るだらう。云つて御覽。」

と聞くと、猪一戒は、

「どうして知らんことがあるものですか。もとの處は雲棧洞、御母さんは高翠蘭です。」

と答へると、使者は心から喜んだ、

「本當のおれの子だ。一體何處に居て、またこの方と一處になつたのだ？」

一戒は以前の事を細かに述べる。と、使者は一層喜んで、

「よし、よし。よろしい。御前が仙道に這入つて、いゝ師匠に逢ひ、また、この兄弟子の方の輔けを得て居るのは至極よろしい。骨を折つて師匠を扶けて西天に行つて、眞解を求めて、おれたちの仕事の仕上げをしろ。」

小行者は云ふ。

「實は、私どもがこゝに參つたのは、外の事ではありません。西天の路は妖物が多いので、武器を持たないでは行かれません。承りますれば、あなたは九つの齒の釘鈀を持つて、西方で手柄を御立てになつたさうですが、今は成佛されて御不用でございませう。それをこの人に御讓り

になつて、師弟をともに護らせるばかりでなく、あなたの御一代の遺風を傳へたり、殘りの仕事を仕上げたりなさつたら如何でせう？」

使者が答へる。

「そりやさうだが、飛んだ事をした。釘鈀はちやんとあつた。が、御前たちの來ようが遲いものだから、もうこゝにはないのだ。」

「大事な道具が、どうしてないのです？」

「毎日壇の淨めに急がしいものだから、用ひることも出來ない。今は自利和尚と云ふのに、『佛田をつくるから。』と云つて借りられて居る。」

「貸したのは暫くの事でせう。取りかへしたらどうでせう。」

「暇がないものだから、催促にも行けない。」

「その和尚は何處に居ます？。何處の佛田をつくつて居ます？　あなたは保證だけして下されればいゝ。私は一戒さんと取りかへしに參ります。」

使者は云ふ。

「そりやあいゝ。佛田は廣いとは云ふが、實は極く狹い。釘鈀などは入りもしない。が、自利和尚は貪慾だから佛田を廣く開いて、澤山の利益を得ようとするから、釘鈀が入用で持つて行つ

たのだ。で、土地が廣いから中々尋ね當らないし、また尋ね當てゝも、彼奴はかへしなどする奴ではない。」

小行者は云ふ。

「意外な御話です。物には主があります。それを横取りするとは怪しかりません。『和尚の佛田は廣い。』と仰しやいますが、探したら分からない事はありますまい。」

使者は聞いて、

「御前は手並があるから、おれの云ふ處を探がして御覽。和尚は一時、西方淨土の近邊に居たのだが、この頃聞くと、南にあたる萬緣山の麓に衆濟寺と云ふのを建てゝ、繁昌して居ると云ふ事だ。この男は這入るのが好きで、出るのが嫌だ。行つてよく樣子を見てから取りかへして來い。」

「はい／＼さう致します。」

と云つて別れて行かうとする。猪一戒はしつかり引き留めて、

「御目にかゝつたばかりなのに、そんなに早く御歸りにならなくても。」

と云ふと、使者は、

「御前は佛道に這入つて居るのだ。また逢ふ時がきつとある。おれは佛になつて居るのだ。凡人とは違ふぞ。名殘は惜しまないぞ。」

と叱るが、一戒は云ふ。
「むりに御引き留めは致しませんが、何か爲めになる御語を御殘し下さい。」
使者は、
「おれは手柄で佛になつたのだ。佛法は知らん。だから何の語もない。たゞ御前は骨を折つて西天に行け。おれのやうに怠惰て、ぐず〳〵したり、ぼんやりしてはいかんぞ。」
と云つて、雲に乘つて祭壇に向つて行つた。
小行者は猪一戒にすゝめた。
「では、自利和尚を尋ねて見よう。しかし、今夜はもう遲い。師匠の處に歸つて、明日になつて行つて見よう。」
「さうしようよ。」
と猪一戒は答へて、一處に雲に乘つて佛化寺に歸つた。
唐半偈は座つたまゝ、まだ睡らずに居た。二人はその面前に來た。
「今歸りました。」
「遲かつたな。父親に逢へたか。」
「逢ふには逢ひましたが、釘鈀はまだ手に入りません。」

「それはどうしたのだ。惜しんで貸してくれないのか?」
「さうではありません。用がないので、自利和尚と云ふのが『佛田をつくるために貸してくれ。』と云ふので、貸して居るのださうです。」
「それならかへして貰へるな。」
「それで行つて見ようと思ひましたが、『御心配になつては。』と思つて一應歸りました。どうか、もう一日御泊り下さい。明日は行つてかへして貰つて來ます。」
「では、さうするがよからう。一日留まつても構はない。」
で、みんな睡つた。
夜が明けかゝると、小行者は半偈に話して、猪一戒と雲に乘つて眞南に向つて行くと、高い山が路を欄つて居る。「これが萬緣山だな。」と思つてよく見ると、この山はさ程高くはないが、周圍は千里あまりもあらうか。あたりは仲々賑やかで、人家が並んで居る。その山中に大きな寺が見える。「これだな。」と二人は山門まで行つて見上げると、「萬緣山衆濟寺」と六字の額がかゝつて居る。二人は喜んで這入つて行くと、香火を賣る坊主に出逢つた。その者が、
「御二人は何の用で?」
と聞く。

「自利和尚さんに御目にかゝりに來ました。」
と云ふと、坊主は慾張だ。
「和尚さんに逢はうと云はれるのは、布施を持つて來られたのか。が、和尚は今御留守だ。わしに御渡しなさい。」
「いや、布施は持つて居ますが、自分で和尚さんに御渡しします。外にも御話ししたい事がありますから。が、隨分早く出られたものですな。」
「そりやあ、早くから布施を取りに出られるのだ。和尚樣に御逢ひしたいのなら、あちこち遊んで來なさい。和尚樣は歸つて御座つて、朝飯を食べられるから。」
二人はさう聞いて、大殿まで來て見ると、そこには、中に三尊の大佛が祭つてあるが、爐に香がない。臺に燭がない。禪堂に廻つて見る。そこには禪床はあるが、人は一人も居ない。後に行つて見ると、方々に倉がある。中をのぞくと、米や麥が一ぱい積んである。
「えらい盛んな事だな。どうしてかうなのだらう。」
「佛田がよく出來るからだらう。」
「さうだとすると、釘鈀は大變役に立つだらう。が、その佛田は何處にあるのか見たいものだ。」
と云ひ合ひつゝ、前の坊主に聞くと、

「それか。それは此山の眞中だ。」
と云ふので、二人は廻り廻つて行つて見ると、佛田はちやんとある。あまり廣くはないが、平坦ですこしの曲りもない。
「いゝ畠地だ。よく肥えて居る。が、耕作人が居ないのは、どういふ事なのだらう。」
二人は近よつて見る。
「人が居ないばかりか、稻も何も無いではないか。どうしたのだらう。」
「こんなになつて居て、あの米麥は何處から出るのだらう。」
大殿に歸つて來て、誰かに聞かうとする處へ、自利和尚は大勢連れて、無數の穀物を車で曳かせたり、擔がせたり、驢馬にも駱駝にも載せて歸つて來た。自分で指揮して、監督の僧たちに一々倉に入れ、物置にしまはせ、すつかり濟ましてから、みんなを歸らせた。そこへ小行者と猪一戒が出て、
「御師匠さん。」
と云ふ。自利和尚は、布施を持つて來たものとばかり思つたので、一禮を返して笑ひつゝ、
「二人の方はどうして御出か。寄進帳に御附けになるのか、または布施を御出しになるのか？」
小行者も笑つた。

「いや、私どもは、寄進帳や、布施のために參つたのではありません。却つて舊い物を一つ、御返しを願ひたいので參りましたのです。」

と云ふと、和尚は顏色を變へた。

「そりやあ、何の事だ?。この萬緣山衆濟寺の草一株も、木一本も、わしが植ゑたり作つたりしたのだ。新しいものばかりだ。舊い物を借りて居る覺えはない。何を取り返すと云ふのだ?」

小行者は、

「さう御急きなさいますな。無ければ參りません。有りますから、御返しを願ふのです」

和尚は云ふ。

「わしは一向御前二人を知らんのだ。が、何と云ふのだ?」

「私どもは御存じないでせうが、猪八戒は御存じでせう。」

と小行者と猪一戒とが云ふ。

「知らんことはない。猪八戒は知つて居る。あれは淨壇使者となつたので、毎日口を張つて人の物を食つて居る。何もわしの處へ借りて居るものは無い。」

小行者は云ふ。

「淨壇使者の別の事は知りませんが。たゞ九つの齒の釘鈀、あの西天の路々で妖怪を降參させた

釘鈀は御貸ししてあります。無いことはありますまい。」

和尚は、

「それは知つて居る。が、わしとは何の關係もないのだ。」

「それが無いとは?」

「そんな事を一體誰が云ふ?」

「猪八戒が云ふのです。」

「自分でさう云ふならば、自分で取りに來たらよささうなものだ。御前二人に賴まんでも。」

小行者は猪一戒を指した、

「この人は他人ではありません。猪八戒の嫡子で、猪一戒と云ふのです。西天に行つて佛に御目にかゝつて、經の眞解を求めようとしますから、その武器にするので、御返しを願いに來たのです。」

「わしはまだ猪八戒に子があるとは聞いて居ない。贋物だらう。」

猪一戒は怒つた。急に自利和尚を捕へて、

「この和尚不屆だ。釘鈀を返さないばかりではない。おれを贋物だと云ふ。釘鈀の方は小事、假冒は大事だ。贋物であるか、無いか、對決しよう。」

と詰ると、和尚は、
「何だ。わしは御前が贋物であつても、なくつても構はん。が、釘鈀なんか知るものか。」
と云ふ。猪一戒は急いて、
「おれの父親が、ちやんと云つた。『御前が佛田を作るから貸してくれと云ふから貸した。』と云つた。何で知らんと云ふのだ。」
和尚は云ふ。
「『佛田を作るのに貸した。』とは出たらめだ。わしのところの田畠はたゞ名前だけだ。布施を貰ふ種にするばかりだ。ちつとも耕しもしないし、植ゑもしないのだ。また、よしそれをするとしても、あの釘鈀は五千四百斤もあるのだ。そんな重いものが使へるか、使へないか。考へて見ろ。」
小行者は、和尚がとても返しさうにもないのを見て取つて、
「御話で分かりました。私たちは人の話を聞いて來たばかりです。本當にあなたの御手許にないと分かりましたから、これで歸りませう。」
猪一戒は承知しない。猶、爭はうとするのを小行者は制して、
「馬鹿。こんな大きな御寺に、釘鈀一本位隱されろ事はない。聞き間違ひ、聞き間違ひ。歸らう

よ。」
和尚は歡んだ。
「あなたは譯が分つて居る。まあ茶でも呑んで……。」
「御構ひ下さいますな。」
と云つて、小行者は猪一戒を引つ張つて寺から出た。猪一戒は恨んだ。
「あの和尚奴が隱して居るのはちやんと分かつた。それをどうして取り返さないのだ?」
小行者は說明して、
「そりやあ分つて居る。が、あの和尚奴、證據もないのに返すものか。全體、何處に隱して居るか。一つ變化して探がして見ようと思つて出て來たのだ。ちやんと見て置いて、詰問すれば、彼奴も仕方がなくなつて、返してよこすだらう。」
と云ふと一戒は喜んだ。
「さうだ、さうだ。さうすればいゝ。」
と云つて、こつそり松林に這入つた。そこで、小行者が見ると、澤山の米倉から、澤山の米蟲が出て來たり這入つたりして居る。
「こりやあいゝ。」

と思つて、體を一搖り搖すると、その蟲になれた。で、飛び立つて寺に這へつた。
自利和尚はうまく二人を歸らせたので、安心した。
「釘鈀をしつかり隱して置け。」
が、弟子、
「隱すことは何でもありません。が、淨壇使者が自身で取りに來たら、どうしませう?。」
と訝かると、答へる。
「大丈夫だ。自身取りに來たら、わしが隱れて會はんことにする。あれは壇の淨めで忙がしいから、そのまゝ歸つてしまふ。」
弟子は重ねて、
「さやうでもございませう。が、こゝの佛田は作りもしません。それに釘鈀は重くつて使ひ手もありません。御返しなすつたら如何でせう。」
とすゝめると。
「御前たちは分らんか。わし等和尚は、佛田の二字で、天下を響かして居るのだ。作らんことはない。が、今はしかたがないのだ。」
弟子はまた訝かつた。

「變ですな。つくらうと思へば作れます。どうして仕方がないのです?」
と詰る。
「佛田を作るのは、人間の田を作るのとは違ふ。」
「どうして違ふのです?」
和尚は云ふ。
「こゝの田は狹いのだ。が、作るとなると廣くなる。が、土は非常に堅いし、雜草が一杯生えて居る。これは御前方も知つて居る通りだ。だから、あの釘鈀でなくては、とてもどうもならないのだ。」
「さうですか。釘鈀があれば、すぐ御作りになれさうなものです。どうして、いつまでも、さうなされないのです?」
「さうは行かない。あの釘鈀は大變重いから、大力でなくては、とても使はれないのだ。だから、さう云ふ人をと心がけて居るのだ。ところがいゝ具合に、廣募山に苦禪和尚と云ふのが居る。これがえらい力持だ。これならば、釘鈀が使へさうだから、一度來る樣に賴んで遣つたが、その中鷄化道人と二人で來ると云つて來た。來れば、この田はすつかり作られて、收穫も大變多くなる。寺はいよ〳〵繁昌と云ふ事になるのだ。」

「だつて、一人でさうは出來ますまい。」
自利和尚は笑つた。
「御前たちは、和尚の癖に物が分らないな。佛田は作つて居ればいゝのだ。田に人が居つて働いて居れば草が生えない。生えなければ、ちやんと收穫た事になるのだ。この氣持が分らんか。」
と云ふのを聞いて、小行者は寺から飛び出した。猪一戒にその話をして、
「どうだ。二人で化けてやらうではないか。」
「よろしい。さうしよう。」
と小行者は苦禪師となり、猪一戒はその伴で來る鶚化道人となつた。
二人は大股に歩きながら、改めて寺の門を這入ると、門番が見つけた。
「御二人は何で見えた？」
苦禪師は云ふ。
「快く通じて貰ひたい。おれは苦禪師、これは鶚化道人だ。一所に來たのだ。」
門番が通じると、自利和尚は喜んで、急いで出て來て、禪室に招じ入れた。
「どちらが苦老師で？」
苦禪師は云ふ。

「私がそれです、こちらが鶚化道人です。」
と云ふと、和尚は、
「御名前はとくから承つて居ますが、今日初めて御目にかゝります。毎度手紙で御願ひしましたが、御聞入れ下さつて御出下さいましたのは、喜ばしい次第です。また鶚化道人さんも御同行下さいまして、一層辱なうございます。」
と感謝すると、苦禪師は、
「いや、私は外へ出ませんのですが、毎度御懇命があつたものですから、御邪魔に參りました。一體どんな御用なのでせうか。」
と問ふと和尚が云ふ。
「別な事ではありません。私の山に田地があります。よく肥えて居まして、有名になつて居ますが、作らないものですから、すつかり荒れて居ます……。」
「どうして荒れて居ます？。」
と、苦禪師が問ふと、和尚は答へる。
「それはかうです。この田は堅い土地で、普通の農人では作られません。大力の人が起したら、起しも出來ませう。それで方々の方に頼みましたが、『やらう』と云ふのは一人もありません。

ところへ、あなたが御噂で、えらい力で入らつしやると承りましたので、失禮ですが御願ひした次第です。もし、やつて戴ければ、功德になる事ですが……如何でございませう。」

苦禪師は、

「はゝ、さやうですか。承りました。佛田をつくるのは、私どものすべき仕事です。またわざ〳〵御招きを蒙つたのですから、しつかりやりませう。が、それは何處にありますか。一應拜見致しませう。」

と云ふ。和尚は大喜び。

「どうも有難うございます。しかし遠方からの御出ですから、まあ、齋を召し上つて。」

と云つて、立派な齋を出す。みんな濟ましてから、案内して田を見させる。と、苦禪師は云ふ。

「これはいゝ土地です。私たちが一處懸命にやれば、大變な收穫があります。しかし、こんな堅い土地ですから、手にあふ道具がなくつてはつくれません。どうです。何かありますか。」

「それはあります。」

と云つて和尚は鋤鍬の類を澤山持つて來させる。と二人は笑つた。

「こんな弱いものではどうもならん。」

と云つて、片端から取つては、折つたり、割つたりする。

和尚は喜んだ。

「御二人の御力は大變御強い。本當に田をつくる羅漢だ。噂は虛言ではなかつた。いや丁度いゝ。私は田をつくる寶物を持つて居ます。」

苦禪師はとぼけて、

「それはどんなものです？」

と問ふと、和尚は、

「いや、すぐ持つて來て御覽に入れた方が早い。」

と云つて、弟子どもに云ひつけて、七八十人の土方をやつた。

「わつしよい、わつしよい。」と繩で引つ張りつゝ、土方は釘鉈を持ち出して前に置いた。と、それから出る光であたりも明るいばかりだ。鸚化道人は大喜びで、いきなり傍によつて、兩手で持ち上げて、ひつくりかへして、

「こりや。いゝわい。」

と云つて左に五遍、右に六遍、振り廻はし、振り廻はすと、見る人々は覺えず聲をあげて褒めつけた。

鸚化道人は、急に猪一戒の本相を現はした。和尚に向つて、

「この釘鈀は何處から來た?。」
和尚は鶚化道人が猪一戒であつたのでびつくりした。羞ぢたが、また怒つた。が、奪ひ取りも出來ないので、苦禪師に取り著いて、
「御前は何で、鶚化道人に化けさせて、わしを欺した?」
苦禪師は大いに笑つて、小行者の本相を現はした。
「おい、よく眼を開けて見ろ。これが苦禪師か。」
和尚は驚き入つて一語も發しない。小行者はそれを後方に押し倒して、猪一戒と一處に雲に乘つて、
「御馳走樣だつた。釘鈀は持つて行く。用が濟んだらまた貸すぞ。」
と云ふ。和尚がやつと這ひ起きた時、もはや二人は、だん〳〵雲を驅つて遠ざかつて居た。

一三

小行者と猪一戒とは、自利和尚からうまく釘鈀を取り返して、和尚には振り向きもせず、雲に乘つて佛化寺に歸つて來た。
半偈はちやうど晝の齋を食べて居る處であつたが、猪一戒が釘鈀を擔いで居るのを見て喜んで、
「あゝ歸つて來たか。自利和尚が素直に返してくれたと見える。」
と云ふと、猪一戒は、
「どうして、どうして、素直に返すものですか。釘鈀と云ひ出しますと、何とかごまかして出しませんから、兄弟子の御蔭で這入り込んで、やつと取り返して來たのです。」
と云つて、今までの始末をくはしく話すと、半偈は歎息した。
「そんな氣持では、佛田なんて入らないものだ。」
と云ふと、小行者が、
「さうです。佛田はあつても、彼奴らは本當につくるのではなく、たゞ名前だけで、人を釣つて布施を取る手段とするばかりです。」

と嘲ると　牛偈はまた歎息した。

「佛道は慈悲が本だ。そんな惡僧どもに敗られて、人を陷れる敎となつてしまつたとは、歎かはしい。どうしても速く眞解を持つて來なければならぬ。仕事が濟んだから、すぐ出立しよう。」

と云つて出ようとすると、僧たちは小行者に神通力があつて、猪一戒を降服させたのを見たのですつかり感服し、またこれらを弟子として居る牛偈を活佛と尊敬して、

「まあ、もう少し御留まり下さい。」

と留めて、一夜過ごさせた。

次の朝になると、三人は仕度して出かけると、僧たちは「師匠が來て御禮を云ふまで御待ち下さい。」と云つたが、牛偈は聞き入れない。小行者は荷物を猪一戒に挑はせ、自分は牛偈を扶けて馬に乘らせた。牛偈は僧たちに挨拶をして、二人の弟子を連れて機嫌よく西に向つた。

途中路もよい。三人は西へ西へと進んで一月あまりも經つた。山の上の雲を見たり、嶺の頭の月を仰いだりして、何の苦勞もない。牛偈は小行者に、

「聞いた處では、觀世音菩薩は長安から靈鷲山まで、十萬八千里あると勘定されたが、もし一日に百里行くとすると、三四ヶ月で濟むことになる。それをどうして玄奘法師は十四年もかゝられたらう。」

と問ふと、小行者は答へる。

「そりやあ違ひます。玄奘法師は路々いろ〳〵の妖怪どもに惱まされつゞけて、それも八十一難と云ふのですから、非常に遲れた譯です。」

牛偈は笑つた。

「さうは云ふが、第一、天下に妖怪などゝ云ふものがあるものか。中に邪念があるから自然に現はれるのだ。自分も御前も邪念がないから、何も現はれないのだ。いつまでもこの心持で行きたいものだ。」

と云ふと、小行者は、

「全く仰せの通りで……。」

と云ひ終はらぬ中に、平らかな道に大きな割目が出來たと思ふと、馬の脚が落ち込んだ。牛偈はもんどり打つて半分落ちたので、小行者は慌てゝ抱き止めた。

「あゝ大變。どうしてこんな割目が出來たのだ？」

猪一戒も、荷物を放り出して馬の脚を曳き上げた。

「こんな割目があるのに、どうして御目に這入らなかつた？」

「割目が見えれば氣をつける。が、見えないものだから落ちかゝつたのだ。」

と云つて、半偈が起きて衣服をふるひつゝ見ると、割目はすつかりなくなつて、舊の通り平らになつて居る。三人は驚いた。

「これは不思議だ。」

と云つたが、何の事だか分らない。又半偈を扶けて二人が行くが、「何か異變は起りはしないか。」と、小行者は半偈の側にすつかりくつついて居る。半里ばかり進むと、俄に眼の前に大穴が開いた。人も馬も一處に落ち込みさうになつた。小行者がすばやく、半偈を曳き留めた。留めなかつたら、死なないとしても大變な傷を受ける處だつた。馬はまた元來龍馬だから、一跳して飛び出した。で、何の傷も受けなかつた。と見ると、その大穴は、もう無くなつてたゞ平坦なばかりだ。

三人はすつかり驚いた。これから半偈は馬に乘らず、二人を引き連れて歩いて行く。日はもう暮近くなつた。小行者は跳ねて空中に上つて見ると、路の左に一帶の林があり、そこに人家がある。で、下りて來て半偈に、

「この路は不思議な路です。それに、暮れかゝりましたし、あそこに家が見えますから、行つて留めて貰つて、よく聞いて見ませう。」

と云ふと、半偈は、

「さうだ、さうしよう。」

と答へて、曲り曲りして林の裡に來ると、一群の人家がある。水の側のもあり、山の傍のもある。水の側には楊柳が靡き、山の方には松竹が茂つて居る。漁家もあり、農家もあり、酒屋もあつて、到つて穏やかな有様だ。三人はそこに這入ると、寺はないが大きな屋敷が見える。門前で小行者は馬を牽き止め、猪一戒は荷物を下す、半偈は馬から下りる。と、側の松の下に老人が二人象棋をさして遊んで居る、その一人が見つけた。起ち上つて、

「あなた方はどうして入らつしやつた?」

と問ふので、半偈は、

「御挨拶を致します。」

と云つて禮をすると、老人は急いで答禮した。

「あなたは、この邊の方ではないでせう。」

「私は東方のもので、唐の天子の勅命で、西天に行つて佛に御逢ひ致して、經の眞解を戴いて來るためにこゝまで參りました。日が暮れかゝりましたから、御宿を御願ひ致したいのですが、如何でせうか。」

と頼むが、老人は返事をせず、三人をよく〳〵見たり、馬をつく〳〵見たりする。

「御三人は遠方から入らつしやつたのではないでせう。どうして、人も馬も傷がついてない……。」

半偈が云ふ。
「こゝの路で足を二度も踏み外しましたが、弟子が扶けてくれましたので、傷もしませんでした。
私がこゝへ來ましたのも、宿の事もありますが、實は踏み外した譯を御尋ね致したいのです。」
老人はにこ〳〵笑つた。
「あゝさうですか。それならば御這入り下さい。そこで御話し致します。」
と云つて、外の老人に、
「この三人の方は、唐朝から遙々來られた方だ。」
と云ふと、その老人は歡んで、一處に内へ這入つた。
五人は座敷に來て、主と客と分れて座つた。茶が出たので飲むと、主人の老人が、
「失禮ですが、あなた方の御名前は？」
と聞く。半偈は、
「私は法名『大顛』と申します。これは唐の天子の賜はつた號で、又『半偈』とも申します。」
と答へて、
「この弟子の、これは『孫行者』、あれは『猪一戒』と申します。」
と云つて、

「して、あなは方は何と仰せられます？」
と聞くと、主の老人は、
「私は姓は葛。名は葛根と申します。」
と云つて、も一人を指して、
「これは私の親族で、姓は藤、藤本と申します。御存じありますまいが、こゝの東は葛村と云ひ、
西へ二十里のを藤村と云ひます。兩村で一萬軒もありますが、みんな葛と藤とで、外の姓はあ
りません。ですから、婚姻も葛家から藤家、藤家から葛家と云ふ具合で、昔から、くる〳〵か
らまりあつて居るのです。」
と云ふので、半偈は、
「さう仰つしやれば、御二人とも御家柄ですな。それはそれとして、來る路で、平らな處に大穴
が出來て跌(まつ)きましたが、一體あれはどう云ふ譯なのでせう。」
と問ふと、葛根は默つて返事をしない。と藤本が、
「あなたは西に行かうとして入らつしやる。きつと大王に御逢ひになる。だから御話ししてもい
いだらう。」
と云つて、葛根をふりかへる。と葛根は云ふ。

「では、御話しませう。前申した通り、葛家の一族は大勢ですから、中には、悪い奴も出て來ました。耕作もしないので遊んで居るのもあり、夫の無い女があり、妻のない男があり、衣食がなくて暮らせないものがあり、さま〳〵ですが、これらは、自分の惡い事を棚に上げて、夫婦が仲善く、衣食に困らないのを見ると、『そんなに幸を與へるのは、天道の不公平、神の偏頗だ。』と云つて、怨んだり、怒つたりする。良い家で、災難にかゝると喜んで、『いゝ氣持だ。』と云ふ樣なものが、だん〳〵增えて、葛家の半分以上にもなりました。この惡氣が凝つたためか、俄に一人の妖怪が出て來ました。このものは神通力があつて、こゝから眞西の不滿山に住んで、自分で『缺陷大王』と申して居ります。初の中は、誰もそんなものとは知りませんでしたから、神通力を見せようとして、村中を無茶苦茶にしました。

「と云ふのは？……」

「ちやんとした家で、孫子の代まで暮らしには困らないのがあると、その子孫のない樣にするか、惡い病氣にかゝらせるかして苦しませたり、貧乏で衣食も出來ないのがあると、却つて澤山の兒どもを產ませて、困窮して死んでしまはせる樣にしたり、夫婦仲の善いのは、別れねばならぬ樣にしたり、兄弟仲の惡いのは、いつまでも和解の出來ない樣にしたりする。みんな弱つて『これは、皆大王のなさる事だ。何かして、御機嫌を取らなければならぬ。』と云ふので、兩

村連合して山に行つて、『猪や羊や差上げますから。』と云つて御詫びをして、間違はずに獻上する事にしました。それで大體濟んだのですが、もし時が違つたり、猪や羊が足りなかつたりすると、今度は、その代りに人を連れて行つて、どし〳〵喫つてしまふ事になつたので、兩村のものはすつかり恐がり、誰も背く事はしなくなりました。で、もし遠方の旅人が、大王の神通力を知らず、供物もせずに通らうとすると、路に、七つも八つも大穴をあけて落ち込ませ、方々に大傷をさせて、どうしても供物をさせずには置かせません。ところが中には、『そんな邪道があるものか。』と云ふ氣の强い人があつて、供物も何もせずに通らうとすると、俄に萬丈も深さのある大穴を特別に作つて、それに落ちさせると同時に道を平らにして、土から永久に出ることが出來ない樣にします。どうです。えらい事ではありませんか。あなたが今、西へ行かうとせられゝば、供物はきつとしなければなりませんよ。」

と葛根が語ると、半偈は默つて何にも云はない。小行者が、

「供物と云ふのは、どんなものがいゝのでせう。」

と問ふと、葛根は、

「猪や羊は云ふまでもないが、また外のものもあります。が、こゝでは一寸云ひ兼ねます。」

「そりやあ、何でせうか、仰しやつて戴きたい。」

「それなら申しませうが、大王の極く嫌ひなのは和尚さんです。ですから、こゝには寺は一軒もありません。」

「どうして、さうなのですか。」

葛根が云ふ。

「あなた方の御前ですが、和尚さんは自分は何もしない。佛菩薩の名を借りて人を騙すことばかりする……。」

小行者は笑つた。

「そりやあ本當ですか。虚言を云つてはいけません。明日大王を連れて來て對決させますぞ。」

葛根は驚いて眼を見張つた。

「この方は冗談を云はれる。私老人がどうして虚言を云ふものですか。大王はあそこに居て、あなたを待つて居りますぞ。なるほど、大王が和尚を嫌ふ譯が分りました。こんな出たらめを云はれるから……。」

小行者は又笑つた。

「あなたは、私があれを捕へて來られんと思つて居られる?」

と云つて、半偈に、

「あなたはこゝに入らつしやつて下さい。私はどんな奴だか、見て參りますから。場合によつては打ち殺して、明日氣樂に西へ行きませう。もう穴が出來もしますまいから。」

と云ふと、半偈は戒めた。

「行つて見るのはいゝが、氣を著けて行け。」

「よろしうございます。」

と小行者は云ふ。猪一戒は、

「私も參りませう。」

と云ふと、小行者は、

「御前は御師匠さんの御傍に居ろ。行くには及ばん。」

と云ふので、葛根は聞いて、堪らず口を挿んで、

「この孫さんは馬鹿ではないですか。こゝから不滿山まで七八百里あります。どうして行かれるものですか。明日になさい。」

と云ふと小行者は笑つて、

「御二人とも氣の小さい方だ。何がおわかりになる? 行きますぞ。」

と一聲云つて、もう中天に居る。と思ふと、すぐ姿が見えない。葛、藤の二老人はびつくりして

顔を見合せて、

「さては、あの方は空を飛ぶ羅漢様だつたのか。自分どもの凡眼ではどうしても分らなかつた。」

と云つて、半偈に二度も三度も謝つて、立派な齋を出して大切にもてなした。

小行者は空を飛んで行くと、前面に大きな山が見える。さほど高くはないが、何處も凸凹で、缺けて居る處、開いて居る處が澤山見える。「はゝあ、これが不滿山だな。」と思つて雲から下りて山の上に行つて見ると、廟が一つあつて、隨分立派だ。円に金文字で、「缺陷大王威靈廟」と書いた額がかゝつて居る。

中に這入ると、兩方の廊下に澤山の羊や猪が縛つたまゝ併べてある。が、殿上はひつそりとして誰も居ない。元來これらの供物を持つて來る人は、朝早く百人以上も一處になつて廟に來て、拜むや否や、羊や猪を放り出して、大王の顔を見ずに飛んで村に歸るのであつた。今は晩方だから誰も居ないのは當然である。

小行者は見廻したが、誰にも逢はないので、廟から出て後ろの山に上つて來る。その頂上に大きな石がある。その上に一人の妖怪が、四五十人の小妖怪と猪や羊を生で食つて居る。で、その あたりは血が川のやうに流れて居る。その妖怪は、虎の様な頭、豺の様な口をして、ひどく凄い様態だ。小行者は、急いで、耳の中から棒を取り出して大聲を上げた。

「妖怪奴、この棒を受けろ。貴様は人を穴に陷れようとしたが、今は自分が落ち入る番だぞ。」

と云つて、兩手で鐵棒を擧げていきなり打つてかゝる。妖怪は頭を上げて見ると、小行者が勢强く來るので、急いで手を下に向けて指すと、忽ち小行者の足の下に、千萬丈もあらうと云ふ大穴があらはれた。小行者は殆んど落ち入らうとしたが、すばやく身を交して空中に立つた。

「妖怪奴、おれを落さうと思つても、駄目だぞ。貴様は穴を作るのがうまいが、おれは打つのが上手だ。おれの打つのを受けて見ろ。」

と云つてまた打ちかゝる。妖怪は穴で失敗たし、棒が來ても支へる武器もなし、慌てゝ身をかゞめると、土の中にするゝ〳〵ともぐり込んだ。大勢の妖怪も、大王が這入つたのを見ると、また一齊にもぐり込んでしまつた。

小行者は尋ねる處もなし、路もないので、妖怪の座つて居た大石を棒で叩きつぶして大聲で、

「妖怪奴、貴様は大王となつて、威張つて騙し取つた供物を食つて居るから、頭も堅いだらう。おれの一棒を受けて見ろ。さうすれば、えらい奴とも云へるだらう。手も交さず、恐れ入つて隱れてしまつては、大王とは云はれまい。出て來い。來ないと、貴様の廟を打ち毀すぞ。さうだと、明日から人に會はす顔があるまい。」

と罵ると、妖怪は堪へ兼ねて、牛の筋、藤の蔓でこしらへ上げた二條の鞭を持つて、山の後から

廻つて出て來て、大聲で、
「貴樣は何處から來た糞坊主だ。大王のおれの前で云ひたい放題なことを云ふ……。」
と罵ると、小行者は、
「貴樣は知るまい。おれは以前、天宮を闇がした孫大聖の後の孫小行者だぞ。師匠が勅命で西天に行つて、經の眞解を求める伴に來たのだ。糞坊主ではないぞ。」
と云ひ返す。
「旅の坊主なら急いで通つたらよからう。何で、おれの處に來て殺されようとするのだ?」
「何だつて。おれの佛門では慈悲が本だ。物を圓く治めようとするのだ。貴樣は何で缺ける事を本にするのだ? 夫婦を別れさせたり、親子を離したりするのは何の事だ。」
妖怪は笑つた。
「それは、貴樣たちの佛敎が邪道である證據だ。そうれ。天は東西に缺け、地は西北に缺けて居る。これが天道だ。おれ樣は天に代つて道を行つて居るのだぞ。なんでおれに恨みがある?」
「つべこべ云ふな。が、貴樣は何だつて、穴を作つておれの師匠を跌かせた?」
「跌かせるばかりか。おれは、貴樣の師匠を食つてしまはうと思つて居るのだぞ。」
と妖怪は云ふので、小行者はすつかり怒つた。鐵棒を擧げて强く打つ。妖怪は二つの鞭で受け流

す。棒が正面から打ち込むと、鞭は左右から遮る。棒は重くつて小行者の力を現はし、鞭は早くて魔王の手並を示す。が、一二十合になると鞭は棒を支へ兼ねて、妖怪はまた地にもぐり込んでしまつた。
小行者は尋ねやうがないので、妖怪を罵るが、今度は出て來ないし、また日も暮れかゝつたので、また雲に乘つて葛家に歸つた。
葛、藤の二人は、半偈の相手をして話して居た。ところへ小行者たちが空から下りて來たので、起ち上つて、
「御歸りでございますか。」
小行者は笑つて、
「二人たちは、前とは違つて、大層御叮嚀ですな。」
と云ふと、
「私たち田舍者は生れが惡いので、空を飛ばれる羅漢樣とは知らないものですから、飛んだ失禮をしました。どうぞ御許しを……。」
と、わびるのを聞いて、
「決して、決して。」

と小行者は答へる。
半偈は問ふ。
「どんな様子だつた？」
「ちやんと山の上に妖怪が居ましたよ。私が行くと、指で地をさすと大きな穴が出來ましたが、うまく飛び上つたものですから、落ちませんでした。鐵棒で打ちますと、急いで土にもぐり込みましたが、私が散々惡口を云つたので、怒つて出て來て二本の藤の鞭を使つて支へました。が、私の棒が重いものですから、敵はないので、また土にもぐり込みました。今度は何と云つても出て來ませんし、また日暮になつたので、御心配かと思つて、歸つて參りました。また明日行つて見ませう。」
葛、藤の二人は驚いて舌を伸ばした。
「彼奴は至極强いのです。が、あなたに打たれて逃げて出て來られないとは……あなたは本當の羅漢樣です。」
「いや、强いたつて何でもない。明日は擒にして皆に見せてやりませう。」
半偈が云ふ。
「しかし、地にもぐり込んでは、しやうがあるまい。」

「彼奴の腕前は知れたものです。が、もぐり込まれては、一寸面倒ですな。」
と小行者が答へる。と猪一戒は、
「もぐり込む妖怪は、そんなにえらくはありません。多分狐や兎の仲間でせう。何處かに巣があろでせう。明日はそれを探がし當てて、釘鈀で打ち殺してやりませう。」
と云ふと、小行者は、
「さうだ。もし、狐や兎の仲間でないと、木の妖怪だらう。木は土に刻つのだからな。『金は木に刻つ』と云ふから、太白金星の處へ行つて相談したら何とかなるだらう。」
「太白金星は天のものですが、どうして御相談になれますか。」
と、葛藤の二人が不審がると、小行者は笑つた。
「天宮ですか。行くのは譯はありません。」
二人はます〳〵感服した。
その中に日暮になつたので、二人は晩の齋を三人に出した。喫べてしまつて、小行者は外に出て見ると、日は全く落ちて、太白金星が、西の空に輝いて居る。で、半偈に云ふ。
「どうか御安寢下さい。いゝ夜ですから、一寸行つて金星と相談して來ます。」
「行け、行け。寢たり起きたりして待つて居る。二人の相手があるから心配すな。」

と半偈が云ふので、小行者は雲に乗つて、西天門の外まで行つた。見ると、金星と水星と燦々光つて居る。聲をかけて、

「天白さん、いゝ御光ですな。」

と云ふと、金星は、小行者であると見て、

「あゝ、あなたですか。あなたは祖の教へで、佛門に這入り、唐半偈の弟子になつて西天に行つて、經の眞解を求められると聞いて居ましたが、こゝに入らつしやるのを見ると、何か御閑が出來たと見えますな。」

「仰じやる通り、唐長老の弟子となつて、西天に行きますから中々忙がしい。ですから、夜分こゝへ御願ひに參つたのです。」

「それはどういふ事で？」

「いろいろ御世話になつて、佛門に這入つて、西へ進んでは居ますが、思ひがけなく種々の邪魔があるので、御教を願ひに來たのです。」

「そりや、どんなものです？」

「では、くはしく申しませう。」

と小行者は云つた。

一四

孫小行者は、西天門外で金星に逢つて相談しようとすると、金星が「何か」と聞くので、小行者は不滿山の妖怪の話をした。

「土に刻つのは木だから木の妖怪と思はれる。木に刻つのは金だから、御面倒でも、何とかしてあれをやつけて下さい。」

と頼むと、金星は答へて、

「御話はよく分つた。木が土に刻つのは事實だ。が、土は木には負けるが、害は受けない。それは多分土に金があるから、却つて又木に刻つ譯になるのです。が、御話の葛藤村の妖怪が土にもぐり込むのは、その邊の土が厚くないからでせう。私は出向いて退治したいのですが、公務があるし、また玉帝の仰もないから、こゝを離れることが出來ません。が、このまゝで御歸しする譯には行きません。困つたな……。や、いゝ事があります。こゝに金の本の金母と云ふのが一粒ある。これを御貸ししませう。これを西北乾の方の土に埋めると、暫くして金の氣が充ち滿ちて溢れる樣になります。さうすると、どんな神通力があつても、缺陥の奴が逃げ出して

來るに相違ありません。」
と云ふ。
「そりやあ有難い。しかし試みた事がありますか。
と行者が念を押すと、金星は、
「いや、きつといゝに相違ありません。さうでないとすると、佛が黄金を地に布かれた事はどうなるでせう？」
と云ふので、小行者はしきりに點頭いて、
「御道理、御道理。快く貸して戴きたい。」
と願ふと、金星は笑つた。
「人の物を借りるのに、そんなに性急に云はなくとも……。」
「いや、さう云ふ譯ではありませんが、早く妖怪を捕へたいので……捕へればすぐ御還しします。快く下さい。」
金星はゆる〳〵袖の中から、一粒取り出した。
「これは金をつくる寶です。大事なものだが、貸して上げます。疎末にしてはいけません。」
小行者は手に受けて見ると、たゞ豆粒ほどの粒で、しかも金の色はして居ない。黄土とも云ふべ

きものだ。思はず笑つた。
「寶だと思つたが、こんなものですか。土ではありませんか。」
金星も笑つた。
「土は金をつくるのではないですか。これがその寶です。御存じないのですか。」
小行者は悟つた。
「辱ない、辱ない。」
と、禮を云ふと金星は、
「斷つて置きますが、仙道の奴の眞似をして、金丹などを造つてはいけません。」
と一本さす。
「そんな金を貪る樣な事はしません。御安心下さい。」
と、小行者は金母を藏つて、金星に分れ、雲を飛ばして、葛家に歸つた。
半偈は二人の老人と話して、まだ寢ては居なかつた。小行者は前に行つて、
「歸つて參りました。」
と云ふと、半偈は見た。
「快かつたな。金星は何と云はれた。」

「此方の事柄を述べますと、金星は『妖怪が穴を作つたり、もぐつたりするのは、土地が薄いからだ。』と云つて、一粒の金母を貸しました。これを地に埋めれば、汁となつて土を厚くするから、妖怪は動けなくなる。と、穴は自然に埋まつて、平らになります。」

と小行者が云ふと、半偈は、

「そりやあ、理屈に合つて居る。が、本當に効驗があるだらうか。」

と疑ふ。と、猪一戒が云ふ。

「ありますとも。」

「どうして分る。」

猪一戒が云ふ。

「今、世界に金銀があれば圓滿です。どうして缺陷があるものですか。」

半偈は點頭いて、

「正しい理屈ではない。が、さうも云へる。」

と云ふ。葛、藤兩人は喜んで聞いて居た。小行者が、

「もう御寢みなさい。明朝早くからやりませう。」

と云ふので、半偈は兩老人に挨拶をして寢室に這入つた。小行者は氣にかゝるので寢られない。

四時頃になると猪一戒を呼んだ。

「どうだ。早く行つて、仕懸をして、妖怪を捕へよう。」

猪一戒は急いでころりと起きた。

「何處に行く?」

「何でもいゝ。釘鈀を持つてついて來い。そつと行くのだ。」

一戒は音のしない樣に釘鈀を取つて、小行者について雲に乘ると、二人は不滿山に來た。

そこで方角を考へて、西北、乾の方の奇麗な土を選んで、猪一戒に、

「はやく手を働かせろ。」

と小行者が云ふと、猪一戒はあたり構はず、釘鈀を衝き立てると、一衝きで大きな穴が出來た。

「なる程土地はいろ〳〵だわい。」

と云ふ。小行者は金母を取り出して、その中に置いて、猪一戒に土を被させて、平らにして、

「この寶は暫く經つと、効驗があると云ふから、一先づ歸つて、御師匠さんを起して、それから來よう。」

と云つて雲を踏んで、葛家に歸つて一休みした。その中に天が明るくなつて來た。半偈は起きて衣を著つゝ、小行者と猪一戒とが傍に居るのを見て、

『早く仕懸をしに行く。』と云つて居たが、まだ行かないのか。」
と咎めると、小行者は、
「もうやつて來ました。御起きになつたら、その御話をして、一戒を御側に置いて、私は妖怪を捕へて來ようと思ひます。」
「さうか。そりや早い事だ。が、妖怪は出たり、もぐつたり、穴をあけたり、手並のある奴だ。御前一人では手に餘るだらう。一戒と一處に行け。」
「でも、御師匠さんに何事かあると困ります。」
「大丈夫だ。」
小行者は猪一戒とまた不滿山にやつて來た。もはや時が經つたので、金母の氣が大地に滿ち渡つて居る。妖怪はその氣に迫られて、皮に傷が出來、肉にも痛みが起る。とても堪へ切れないので、止むを得ず土の上にもぐり出して來る。手下の妖怪も同じ樣に困つたので、あちからも、こちからも、もぐり出して、山中此處も彼處も妖怪だらけになつた。
小行者は、
「どうだ。いゝ時だぞ。やつつけよう。」
と云ふと、猪一戒は釘耙を振り上げて、にこ〳〵して、

「あゝ有難い。今日初めて釘耙が使へる。」
と叫んで、妖怪の大勢居る處を目懸けて衝き立てる。小妖怪はとてもかなはないので、またもぐり込まうとするが、土の皮が鐵の樣に堅くなつて居て、頭の皮が破れてももぐり込まれない。仕方がないので、四方へ走り出すが、逃げ後れた大勢は、大抵猪一戒に衝き殺されるとすぐに、本の形を現はした。みんな獾と云ふ獸だ。小行者は見て笑つた。
「こんな奴だつたのか。穴をあけたり、土にもぐつたり……。」
と云つて、殘つた奴を打ち殺したが、どうした事か首が見えない。
「大探しに、探して見よう。」
と、二人は手を分けて探し廻つた。
缺陷大王は地下にもぐつて居た。で、小行者らが歸れば、頭を出さうと思つて居たのだが、俄に金の氣が起つて身に泌みて來だした。堪らないので東から西に逃げてみると、こゝも東と同じだ。それではと云つて北に逃げるが、また同じだ。南に行くと一層冷たくて、皮を傷り、骨に砭する寒さだ。
「どうも變だ。こゝは土が軟かだ。もぐり込んだり、出たりするのが樂だし、穴をあけて人を落すことも譯なく出來た。それがどうしてこんなに硬くなつたのだらう。ああ、きつとあの和尙

の仕業だ。彼奴、神通力があるから、昨日は棒で困らせたが、今日はまた金氣でおれを苦しめる。ひどい奴だ。が、戰つてはかなはない。どうしようか。あゝ思ひ附いた。彼奴は師匠について西天に行くのだ。その師匠と云ふのは以前の唐僧同樣の奴だらう。其奴を捕へて喫つてしまつたら、この仇が打てるだらう。が、一體其奴は何處に居るのか知ら。」

とは考へたが、金氣がひどく逼るので、居られなくなつて二本の鞭を持つて、土からもぐり出て來た。と、猪一戒が小妖怪を殺したところであつた。見ると、小妖怪の屍體が、地面一ぱいに横たはつて居る。すつかり怒つて、鞭を上げて、

「何處から來た、長口長耳の和尚だ？」

と打つてかゝると、猪一戒は笑つた。

「妖怪奴、もぐつて居れば大丈夫なのに、出て來て死なうと云ふのは、何と云ふ間抜けだ。」

と、釘鈀を擧げて衝く。妖怪は鞭で支へて、十合あまりも戰つたが、段々弱つて受け切れなくなつて居る處へ、小行者が、

「兄弟。逃がすな。」

と云つて駈けつけた。妖怪は氣が氣でなく、急に引つ外して逃げると、猪一戒は追つ駈ける。妖怪は、急いで土にもぐらうとするが、すつかり硬くなつて居るので、何遍頭で撞いても這入れな

い。仕方がなくつて、ふりかへつて戰はうとすると、小行者が追ひついた。いよ〳〵困つて、急に風に乘つて東南に逃げた。

妖怪は當てなしに逃げたのであつたが、ちやうど途が葛藤村の東南になつて居た。で、見下すと、半偈が、二人の弟子が歸らないので、二老人と一處に門に出て見廻して居る。妖怪は「變だ。こゝには和尚は居ないのだが、たつた一人居るのは、きつと彼奴らの師匠だらう。此奴を捕へてやれ。」と、通りついでに手を伸ばして、半偈を抓み上げて飛び去つた。

二人の老人は驚いて、地に仆れて氣絶した。そこへ、間もなく小行者と猪一戒とが駈け込んだ。

「一體どうしたのだ？」

老人は舌かついて、慌てながら、

「飛んだ事です。和尚さんが妖怪に持つて行かれた。」

と云ふ。小行者はせき込んで、

「云はない事じやない。『一戒に番をして居れ。』と云つたのに。」

と叫ぶ。

「彼奴は、猪や羊を生で食ふから、人間も食ふだらう。早く探さう。」

「金の氣で土にもぐれないから、何處かの巣に居るに相違ない。」

と二人は云ひ合つて、老人に、
「こゝの土地の社は何處です。」
問ふと、老人は、
「そんなものはありません。」
と云ふ。
「そりや妙だ。土があれば人が有る。人が有れば社がある。どうして社がないのです？」
「もとはありましたが、缺陥大王が來てからなくなつたのです。」
と老人が答へる時、白い鬚で、破れた帽子、ちぎれた著物を著た背の低い男が急ぎ足で現はれた。
小行者の前に跪いて、
「土地の神でございます。」
と云ふ。小行者は、
「今話して居た處だ。こゝは『土地の神がない。』と云ふ事だつたが、何處から來た？」
神は云ふ。
「土地があれば神があります。が、土地が靜かであれば神も居られ、靈驗も現しますが、この邊の土は薄くつて、妖怪の來ない時でも、葛藤に纏られて靜かな事はありませんでした。妖怪が

來てからは、毎日毎日大勢の子や孫を引き連れて、もぐり込みもぐり出して、土地をすつかり荒して物も出來ない樣にしてしまひました。ですから、私はこの村の祭を受けませんので、こゝでは『土地の神はない。』と云つて居るのです。今あなたの御蔭で、金の氣が土に滿ち渡つて、凸凹もない樣になりましたし、又あちらの方の御力で、小妖怪どもが居なくなりますし、大妖怪も棲めなくなりましたから、私は出かけて御目に掛りに參りました。たゞ俄の事ですから、冠も著物もめちやくちやなのは、御許し下さい。」
と云ふ。小行者は、
「さう云へば、自分はこの土地を平らにし、穴の出來ない樣にしたのではあるが、却つて師匠を取られたと云ふ大穴が出來た。お前は役に立ちさうだから聞くが、妖怪は何處を往來するのだ？　師匠を捕へて何處に行つたのだ？」
と聞くと、土の地神は答へる。
「詳しい事はわかりませんが、昔から、此處の葛と藤とは纏きついたり、からんだりして、分かれられなくなりました。今はその氣が一層凝り固まつて、もつれあひ亂れあつて、數十里も續いて、人も何も通れなくなつて居ります。この根の下に洞が一つありますが、奥深いこと、限がありません。こゝで妖怪は生長して、穴をあけては人を困らし、猪や羊の供へを受けて居た

のです。今あなたに破られましたから、御師匠さんを捕へて、きつとその洞に籠つて居るでせう。まあ、そこへ行つて尋ねて御覽なさい。」

小行者は詰る。

「そりやあ、何と云ふ事だ。こゝには澤山の人が居るではないか。そんな人が、そんな葛や藤は斬つてしまつたらいゝではないか。」

神は云ふ。

「いや、云ふ事は云ひあひますが、この邊の人々はいゝ刀も持たず、勇氣もありませんから、斬らうとしても斬れないのです。どうかあなた何とかして下さい。」

と賴むので、小行者は、

「よろしい。自分は葛や藤を斬り拂つて、妖怪を捕へて、御前の社も建てる樣にしよう。」

と云ふと、神は忽ち消えてしまつた。葛、藤の二老人はまた〳〵驚いて、手を合せて、

「あなたは德の高い方で、神さへも喜ばされる。」

と云ふ。小行者は、

「無駄は云はんでよろしい。馬と荷物の番を賴みます。私は一戒と師匠を救うたり、妖怪を捕へたりして來ます。」

と云ひつゝ、二人で雲に乘つて、東南に向つて飛んだ。間もなく下を見ると、無數の葛と藤とがからみ合ひ、つながりあつて一つになつたのがある。

妖怪は半偈を捕へて洞の中に來て、地に下した。

「どうだ和尙。御前の弟子がおれを捕へに來たが、却てお前はおれに捕へられた。どうだ。恐れ入つたか。」

と云ふ。半偈は地にきちんと坐つて、何とも云はない。妖怪は笑ひつゝ、

「おれはお前を喫はうとするのだ。御前を賴んで看經して貰ふのではない。何でお前はそんなに座つて居るのだ？　お前が佛菩薩の樣子をしても、おれは御前を許さんぞ。」

と云ふが、半偈は聲も立てない。元來妖怪は捕へて來ると、すぐ食はうと思つたのだが、半偈がちやんとして、心がすこしも亂れない樣子なので、「これではいかん。すこし佛法の問答をして、誤り入つた時、打ちのめして、氣持がめちや〳〵になつてから、喫ふのがいゝ。」と思つたので、藤の鞭を持つて、

「おい、御前は佛弟子だから、佛法は知つて居るだらう。一つ問いて見るが、佛は有るものか、無いものか。返答しろ。出來なければ一鞭くれるぞ。」

と聞くが、半偈は默つて居る。妖怪はまた問ふ。

「お前は行脚坊主だから知らないのだらう。一顆は許してやるが。どうだ。御前は『南無佛』と念じるが、南邊に佛が居ないとすると、どうして觀世音菩薩は南海に居るのか。」

牛偈はまだ默つて居る。妖怪はまた問ふ。

「佛はあつさりして居るのがいゝと云ふ。どうして華嚴經に飾り澤山なことを說いてある?」

牛偈はまだ默つて居る。

「針を呑んだり、肉を割いたり、いろ〳〵變な事をやる。その佛敎がどうしていゝ?」

牛偈はまだ默つて居る。妖怪はまた問ふ。

「はゝあ、御前は中途からなつた坊主だな。だから古い事は何にも知らんのだな。しかし、御前は西天に行つて、經の眞解を持つて歸らうと云ふのだらう。どうだ、以前唐三藏が經を取つた事は知つて居るだらう。が、もし眞經があれば、孫行者、猪八戒、沙和尙の三人に持つて來させていゝ事だ。また佛家では『慈悲、慈悲』と云ふ。三藏に經のために十萬八千里も步かせ、それのみならず、路々でいろ〳〵の妖怪に逢はせ、さん〴〵難儀をさせて、それでやつと經をとらせたと云ふ。が、一體何處に慈悲がある?」

牛偈は眼を閉ぢてまだ默つて居る。妖怪は口は乾き、舌が枯れてしやうがない處へ、表で、

「妖怪を捕へろ。」

と云ふ大聲が聞こえる。驚いて、妖怪は急いで穴の奥へ逃げ込んだ。それきり何の音も立てず、聲もしなくなつた。

小行者は猪一戒と葛と藤との塊を見て、妖怪はこゝの洞に居ると思つたので、小行者は鐵棒、猪一戒は釘鈀を持つて打つたり衝いたりする。が、二つとも軟かい。棒が當れば凹むが、棒が上ればもとにかへる。釘鈀が衝けば破れるが、手許へ引くと齒にからんで來る。猪一戒は怒つて、力にまかせて引きちぎつて、また衝くと、又からまれる。小行者が見て、

「待て、待て。さう衝いては駄目だ。まあ一つ相談しよう。」

猪一戒は手を停めて、

「相談とは何の相談だ?」

と云ふと、小行者は、

「外ではないが、『硬いものは柔かいものに敵はない。』と云ふ。鐵棒や釘鈀は硬いものだ。葛や藤は柔かいものだ。いくらやつたつて駄目ではないか。蔓は柔かくつても根は堅いだらう。根を探がして、それをやつつけてやらう。何とかあると、『葛藤を惹く』と云ふ。かれこれ云ふと煩くなる。默つて根を探がさう。根を切らう。」

と云ふ。猪一戒は默つたが、しかし面倒で堪らない。

「一體、根は何處にある。」
「枝の太いのを探がして、それを傳つて行けば分るだらう。」
と云ひあつて、太い枝、太い枝と探がして、それを頼つて行くと、半里ばかりで、果して大きな根のところに辿り著いた。これは一丈あまりもあつて、横になつた條、曲りくねつた幹、結びあひ、からまりあつて、大きな塊となつて居る。小行者が、
「あつた、あつた、根があつたぞ。」
と云つて、鐵棒で上の方の枝を掃つて、片方に寄せのけつゝ、猪一戒を見ると、猪一戒もその意を悟つて、物も言はず釘鈀を振つて、ぐさ〳〵と力まかせに衝き立てる。と、根はだん〳〵切られて、半分ばかり土から離れた。それに力を得て、また二衝き衝くと、めりめりと音を立てゝ、根はすつかり切られて、片方に倒れると、その下に大きな洞穴が現はれた。小行者は喜んだ。猪一戒に、
「御前はこゝで番をしろ。這入つて行くぞ。妖怪が逃げて出たら、捕へろ。」
と云つて洞へ飛び込んだ。と、半偈が眼をつぶつて座つて居るのが目に入つた。
「御師匠さん。」
と一聲云つて、

「妖怪はどうしました？」
と聞くので、小行者と知つて、半偈は喜んで、
「奥へ逃げた様だぞ。」
と云ふので、小行者は奥へ奥へと行く。
妖怪は、二人の聲を聞いてから、悸へ上つたが、葛や藤がからみあつて居るから、とても來られないと安心して居た。しかし、二人がそれらを斷ち切つた様子なので、いよ〳〵恐れて奥へ奥へと這入つて、獸の本形を出して、一生懸命に地にもぐり込まうとした。が、金の氣で堅くなつて居るので、中々もぐれない。力一ぱい衝き立てると、だん〳〵掘れて深い穴が出來上つた。その底へ身體を打つ伏せにして小さくなつて居る。ところへ小行者はやつて來た。が、一體に眞暗で、何が何だか分らない。しかたがないので、鐵棒で東西、上下、あたり構はず衝き廻すと、思はず妖怪の身體に當つた。痛いので、妖怪は、大聲を上げて穴から飛んで出た。が、行く處が無いので、却つて洞の入口の方に駈け出した。
小行者はそれと見て、後を追ひつゝ、逃がさじと迫る。妖怪は洞の口まで來ると、葛や藤がすつかり取られて、その邊がすつかり明るいので、隱れもならず、洞の外に逃げ出すと、そこに猪一戒が廻つて待つて居た。猪一戒は妖怪の身體が見えたので、

「さあ來た。」
と、待ち構へて居た釘鈀で、急いで衝いて見ると、急處に當つたと見えて、妖怪は血を流してばつたり仆れた。
小行者は追つ駈けて口まで來て、
「妖怪は捕へたか。」
「捕へ様としたら、仆れてしまつた。」
と猪一戒が答へる。
「御師匠さんはどうされた?」
「中に御出になる。」
「早く御出ししなければ。」
「いや、中でちやんと坐禪していらつしやる。御騒がせしてはいかん。」
と二人問答して居る處へ、半偈が出て來た。笑ひながら、
「坐禪したのではない。正で邪を降し、無言で有言を壓へつけたのだ。」
と云ふ。小行者は喜んで、それを扶けて洞から出した。で、猪一戒に、
「山の下の家から火種を貰うて來い。」

と云つて、火を取り寄せて、枯草枯葉につけると、一齊に燃え上つて、葛も藤も見る見る中にぱちぱちと燃えて暫くすると、灰になつてしまつた。で、小行者は、猪一戒に妖怪の屍體を曳かせ、一同葛藤村に歸り著いた。

一五

牛偶等三人は、妖怪の屍體を曳きながら葛家に歸つて來ると、葛根、藤本の二人の老人が、「弟子の二人が師匠を救つて來るか。どうか。」と心配して居るところであつた。

三人は座敷に這入ると、猪一戒は妖怪の屍體を階段の處に投げ棄てた。

二人の老人は驚いたり、喜んだりして、

「御師匠さんを救うて來られるのが、すでに御手柄であるのに、こんな妖怪を殺して、引つ張られるとは、大したものだ。まことに活佛、眞羅漢とはあなた方の事です。」

と褒め上げる。小行者は、

「私ども佛家では、人の苦難を脱れさせるのが務です。こんな奴等に害をさせて、うちやつて置く譯には行かない。打ち殺すのが當然です。」

と云ふと、二老人は、

「そりやあ、さうでせうが、この奴は非常に凶强ですから、大變です。よく探がし當てゝ、よく打殺して下さいました。一體どう云ふ具合でしたか。」

と聞くので、小行者は前の事を詳しく話した。

「妖怪は殺したし、凸凹はなくなるし、葛藤も燒き盡したから、きつと兩村とも穩かになつて、彼是云ふ事はありますまい。」

二老人は心から喜んで、方々の村に觸れ廻らせた。

知らせを受けた人々は、みんな來て、三人に禮を云つた。で、こゝでも「齋を食べに來てくれ。」こゝでも「供養をするから來てくれ。」と招びに來るので、牛偶は煩はしくて堪らない。一切斷つて早く行かうとして、土地の神の社を造らせるやうにし、猪一戒に荷物をつくらせ、金母を金星に返して、三人で出立した。

牛偶等は勇ましく西天に向つたが、此の邊は至極道がよいので、何の故障もないから、少しの心配もない。牛偶は、

「あの葛藤村でした功德は、全く御前たち二人の手柄だ。まことに佛の御衛りの現はれん處はないわい。」

と云ふ。で、三人かれこれ話をしつゝ、心持よく歩く中に、もう幾日か經つた。ふと、遠方から水の湧き上る音が聞こえ出した。

「何だ。あの音は、波の音ではないか。前に河があるのではないか。」

「見て参りませう。」
と云つて小行者が空に上つて見ると、行手に果ても知れない大河が流れて居る。「こりやあ大變だ。」と思ひながらよく〳〵見ると、一帶の大水で、洲もなければ、岸もない。大望千里とも云ふべき川幅だ。また此方の岸には村も無ければ家もない。仕方がないので、下りて來て半偈に云ふ。
「仰しやる通、前は大河で、路は盡きて居ます。」
「どの位の川幅だ？」
「そりやあ、廣いものです。七八百里から千里までもありませう。」
半偈は考へた。
「今まで何千里も來たのだが、大河と云ふのはなかつた。これが本に載せてある流沙河だらうか。」
小行者は云ふ。
「多分さうでせう。さうでなくてはこんな大河はありますまい。」
「この邊の人に聞いたら、分かるだらう。」
「ところが、この邊には人家と云ふものは一つもありません。尋ね樣もないのです。」
「尋ねる、尋ねんはまあよろしい。が、人が居なくとも、何處かに舟がありさうなものだ。あれば渡れるのだが。」

「さう御急迫なさいますな。『死ぬ法があれば、活きる法がある。』と申しますから、何とかなりませう。まあ私が何處か探がして脚を歇めて、それから考へませう。」
と小行者は云つて、また空に上つて、その邊一帶を見廻すが、人家がないばかりでなく、木さへ一本もない。
「困つたものだな。」と考へながら、東の方を見ると、土手のところに小さな廟が一つある。喜んで空から下りて來た。
「歇み處を見つけました。」
「何處にある。」
「あれあれ、あの小さな廟です。」
半偈は喜んで三人で忙いで行つて見る。この廟は全く土と石とで造つたもので、廻りに垣はあるが、中には佛も置いてない。厨もなく、門もない。が、香爐があるので、佛に供へた氣持だけはわかる。三人はすぐ中に這入ると、中から死んだ樣な眼附をした白く瘠せた和尙が一人出て來た。
「あなたは、東の唐から西天に行つて、佛に逢つて眞解を取ると云ふ方ではありませんか。」
と云ふ。半偈は驚いたり、喜んだりして、
「さうです、さうです。どうして御存じです？」

と問ふと和尚は、

「いやさうでありますれば、中に這入つて御歇下さい。ゆる〳〵御話し致します。」

と云ふ。半偈は内に這入ると、中はがらんとして、殆んど何もない。

和尚は石を持つて來て、半偈に腰をかけさせた。

「私は今の金身羅漢、もとの沙悟淨の弟子の沙彌でございます。羅漢が申されますのに、『自分が三藏法師の法旨を受けて、持つて歸つた眞經が、俗僧どもに間違へられて、世間の人々は災を被つて居る。だから、今老師を賴んで眞解を求められる。が、一人では行かれないから、徒弟の三人が身替りを出して御助けして、前の手柄を完くしようとする。聞く處では、孫悟戰勝佛には一人の小聖があり、猪淨壇使者には一人の小天蓬があると云ふ。が、自分には後が無いからしやうがない。だから、弟子の御前が行つて、御側について御用をしろ。』と云はれましたので、こゝで御待受けして居る次第でございます。」

と云ふ。半偈は感激して、

「金身羅漢が、この様に慈悲をかけて下る。辱ない事です。どう御禮を申してよいか分りません。たゞ骨を折つて西へ行くのが、御恩報じになるばかりです。」

と云つて、また、

「こゝで待つて居られたとすると、この前の大河の事は勿論御存じでせう。一體何と云ふ河でせう?」

と聞くと、沙彌は、

「これが師匠の出ました流沙河です。師匠は三藏法師について、後に金身羅漢になつたものですから、こゝに人々が廟を立てゝしるしとしました。しかし、もうずつと以前の事ですから、この様にすつかり荒れたのでございます。」

と、說明する。半偈は、

「さうですか。これが流沙河ですか。此の河は八百里も幅があると聞いて居るが、舟もなくつてどうして渡れますか。」

と問ふと、沙彌は答へて、

「それは御安心下さい。師匠が私にこゝで御出を待たせましたのも、自分が住み慣れて、水の様子をよく知つて居て、それを私に傳へてくれましたから、『私に御案内をして、御渡し申せ。さうすれば手柄の一つにもなるから。』と云ふ爲めなのでございます。」

と云ふが、半偈は、

「しかし、何も持たず、また舟も筏もなく、また渡場もないのに、どうして渡されますか。」

と詰ると、沙彌は答へる。

「いや、あなたは御存じない。この河は舊あつた碑に、『八百流沙界、三千弱水深。』と云つてあります。かう廣いのにどうして渡しが出來ませう。また『鵝毛飄不レ起。蘆花定レ底沈。』とも云つてあります。こんな弱い水に、どうして舟も筏も浮ばれませう？」

「では、どうして渡れる？」

沙彌が確かり云ふ。

「何でもありません。師匠が傳へてくれました風に乘り、水の上を歩く法があります。たゞ波の上を、それに從つて輕々と通つて行かれます。が、氣の持ち樣ではさうは參りませんが……。」

半偈は默つて考へて居る。と、沙彌が云ふ。

「御信じにならねば、河まで御出下さい。一つ御覽に入れますから……。」

半偈は早く西へ行きたいので、喜んで、小行者と、廟から出て來て河を見ると、全く廣くて見渡す限、波の外何もない。その波は風もないのに盛んに立つて、天まで續く樣である。

「この波の上をどうして行ける？」

「行けない事はありません。」

と云ひながら、沙彌は水の上に飛んで平地を歩く樣にと歩くと見ると、帆をかけた舟の樣に進んで

行く。半偈は、

「これならば渡れる。」

と喜ぶと、小行者は、

「さう御喜びなさいますな。私は考へることがあります。」

と戒める。

「そりやあ、どんな事だ？」

小行者は答へて、

「それはかう云ふ事です。全體、佛菩薩が御出になれば、きつと結構な光や、めでたい靄が立ちます。その次のものでも、穩やかな溫い氣が籠めて居ます。ところが、この和尙には、何だか、陰氣がつきまとつて居て、冷々として物凄いではありませんか。これはきつといゝ奴ではありますまいよ。」

と難じる。

「だつて、金身羅漢がよこしたのだ。惡い事はないだらう。」

「よこしたのか、よこさないのか、分りはしません。」

「よこさないのならば、どうして自分たちの事を知つて居る？」

半偈と小行者とは云ひあつて居たが、小行者は、
「どうも變です。今の魔物どもは、中々うまくやりますから、油斷は出來ませんぞ。」
と疑ふが、半偈は、
「さう人を信用しなくつては、一歩も歩けんではないか。とても西天まで行き著かれんぞ。」
と叱る。が、小行者はなほ、
「命さへあれば、自然に行き著けます。」
と云ふと、半偈は、
「命は天にある。」
と云ひも終らない處へ、沙彌は風車の樣に水の上を飛んで岸に歸つたが、靴も靴下もすこしも濡れて居ない。で、半偈に、
「伴りは申しません。快く參りませう。忽ちの中に向うの岸に著けますから。」
と誘ふ。半偈は、
「伴りとは思はないが、風に乘つたり、水を歩いたりする法は、まだ聞いた事がない。外道の法ではないかな。少々危い氣がする。」
と躊躇ふと、沙彌は、

「そんな事はありません。達摩大師は西から來られた時に、一本の蘆に乘つて河を渡られたではありませんか。あなたはそれを外道と仰しやいますか。さう御疑になつては……。」
と云ふので、半偈は度々點頭く。沙彌はまた、
「達摩大師が渡られた時には、岸に蘆があつたので、折つて使つて筏となされたのです。今は蘆は出來ませんから、私が水を踏んで歩いたのです。もし御不安心ならば、古蒲團が廟にありますから持つて參ります。それを脚で御踏みになれば、御安心でせう。」
と云ふ。
「そりやあ妙だ。それがいゝ。」
と云ふ中に、沙彌は蒲團を取つて來て水の上に投げた。半偈はまた、
「この蒲團に、自分一人は乘れるが、あとの二人と荷物と馬とはとても乘れまい。」
「二人の方々は雲に乘られますから、水の上を御出でにならなくても……。荷物や馬はあなたをあちらに御著けしてから、また乘せに參ります。」
と云ふと、小行者は强く、
「荷物や馬は自分が見て居る。心配しなくてもいゝ。たゞ師匠は大事だ。しばらく御預けするが、向うの岸に著けば、きつと返せ。間違があると承知出來ない。」

と云ふと、沙彌は笑つた。
「何の御話かと思つたら、そんな事ですか。師匠の云ひ付けを受けて來たのです。手柄こそ立てたいので、決して間違などするものですか。」
「云ひ合ひをすな。みんな骨を折ればそれでいゝ。」
と云つて、半偈は蒲團の上に座つた。
「佛の御力で向うの岸に著く、それまでむきもしないよ。」
小行者は、
「堅意地を仰つしやるな。」
と云つたが、半偈は聞かん振をした。沙彌は、急いで水の上に飛んで、片手で半偈を捉へて、
「老僧、早く往生しろ。ぐず〳〵云ふな。」
と脚をかけると、蒲團は飛ぶ樣に水の上を行く。小行者は樣子が變なので、猪一戒に、
「あの坊主、惡い奴らしい。荷物と馬とをよく見て居れ。追つ駈けて見て來る。」
と云ふ。猪一戒も、
「さうだ。どうも變だ。早く行つて見てくれ。こゝで待つて居る。」
と答へる。小行者は水の上を眞直に追ひかけて、河の中頃まで行つた。が、もう姿も見えない。

あわてゝ空に上つて四方を見るが、影も形も分らない。怒つて、岸に歸つた。
「何と云ふ事だ。眞晝間、みす〳〵化されるとは何たる事だ。」
「そりやあ、大變だ。が、怒つては駄目だ。快く探さう。」
「どこにも何もない。探し樣がない。」
猪一戒は考へて、
「あの坊主、波の上を走つて見えなくなると、水の中にもぐり込んだのだ。水の中の化物に相違ない。」
と極める。
「いゝ處に氣が著いた。が、この河は濁い。何處に隱れて居るだらう。」
「いくら濁くつても、何處かに巢をくつて居るだらう。水の中で働くことは何でもない。荷物や馬を見て居てくれ。一つもぐつて探がして見よう。」
「そりやあいゝ。御前が尋ね當てたら、西へ行く間の一等の手柄だ。」
「ともかくも探してみよう。手柄だの何だのは云はなくてもいゝ。」
と猪一戒は著物を脫ぎ棄て、釘鈀を提げて、河の中に飛び込んだ。
河の中はまことに濁い。深い處へと進んで、あちらこちらと尋ねて見るが、猪一戒の目には何

も這入らない。「水に這入ればすぐ分る。」と思つて居たのは大間違であつた。が、これで上つては、小行者に顔が合はされない。急り立つて、聲を擧げた。

「畜生奴。和尙に化けて、師匠を捕へるとはひどい奴だ。おれの手並を知つて居れば、早く返して來い。さうすれば許してやる。返さないとすると、この釘鈀で、貴樣ばかりではない。一類一族、みんな衝き殺してやるぞ。」

と叫びながら、東から西へ、西から南へ、南から北へと隈なく探がして歩く。元來この流沙河と云ふのは、舟の往來もないので、龜の類、龍の類がゆつくりと群がつて遊び廻つて居る。それが忽ち猪一戒に釘鈀で衝き廻されたので、逃げる間もなく、鱗を散らされ、殼を傷られて、大騒ぎに騒ぐ。巡河夜叉が巡つて來て、それを見た。

「こりやあ、大變だ。」と大急ぎで河の神に告げる。河の神はびつくりして、水兵を引き連れて出て來て、

「何處の何方です。何を怒つて河を騒がせられる。ちよつと待つて下さい。譯を聞かせて下さい。」

と云ふ。猪一戒は、何か云ふ者があるとは思つたが、「衝き立てなければ、彼奴は出て來まい。」と考へて猶暴れ廻る。河の神は急き込んだ。

「譯を聞きませう。亂暴は止めて下さい。」

猪一戒はやつと手を止めた。

「御前は何處の神だ。何をぐず〳〵云ふのだ?」

「私は、こゝの神です。あなたが水族を御打ちになるので、譯を御尋ねするのです。私の職分ですから……。ぐず〳〵云ふのではありません。」

「それならば、天河を掌つた天蓬元帥を知つて居るか。」

「知つて居りますとも。同じ河でも、元帥のは天の川、私のは地の河ですから、上下の別がありますが、同じ河の事です。知らん事はありません。」

「知つて居るならば、どうして變な畜生に、小天蓬元帥のおれを騙させる?」

「あ、あなたは、猪天蓬の後の方ですか。道理で、釘鈀がきついのですな。一體誰が、あなたを騙しました?」

「いや、何か知らんが、變な奴が和尙に化けて、『水が渡れる。』と云つて騙して、おれの師匠に河を渡らせて置いて、何處かへ連れて行つた。河の神ならばよく知つて居よう。快く、師匠を返してくれ。くれないと、この釘鈀で衝き殺すぞ。」

と猪一戒が叫ぶと、河の神は考へた。

「いや、私に關係はないが、何百年も前に、今の金身羅漢が佛敎に歸依して西天に行つて、佛に逢つて經を求めて成佛してから、こゝは、清淨の河となつてた。で、鮑の類も龍の族もみんな佛性を持つて、人の害はすこしもしません。どうして變な奴が居つて、あなたの師匠を騙すことがあるものですか。何かの間違ではないですか。」

猪一戒は怒つた。

「馬鹿を云ふな。和尙が師匠を騙して河の途中まで行つて、見えなくなつたのを、ちやんとこの眼で見たのだ。御前はそれの同類だらう。いやにかばひ立てをする。打たなければ白狀すまい。衝き殺すぞ。」

と云つて、釘鈀を取り直す。河の神はあわてた。

「まあ、まあ、御待ちなさい。その和尙は、白眼で、血色のない奴ではないですか。」

「さうだ。その通り、その通り。その奴は一體何だ?」

と、猪一戒が聞く。

「いや、あの和尙は水族ではありません。」

「では何だ。」

「あれは九つの骸髏です。」

「骸髏なんて死物ではないか。それがどうして祟る?」

河の神が云ふ。

「それはかうです。以前金身羅漢が、佛敎に歸依しない時分に、毎日人を食つては、骸骨を河に沈められました。が、その中で九つの骸髏だけは、どうしても水に沈まないので、羅漢は拾つて、數珠の樣にして、頸にかけられました。が觀世音菩薩の御言附けで、それに、葫蘆を一つ結びつけて筏にして、今の旃檀功德佛を載せて、西に行かれました。ところが羅漢は急がれたので、その骸髏を水の上に置き忘れてしまはれました。で、これらが佛の御蔭で、散つたり、聚つたり、河の中で修業して、たうとう人の形になつて、今は『媚陰和尙』と名乘つて居ます。あなたの御師匠さんを騙したのは、大方此奴ではないですか。」

猪一戒は、

「さう分つて居れば、河の神でありながら、そんな惡い奴を、どうして逐つ拂つてしまはない?」

「さうは行きません。あれは羅漢の遺物ですから……。しかし、あれは、あちこち河の中を歩いて居ますが、今まで少しも人に害をしませんでした。それがどうして、あなたの御師匠さんを捕へたのでせう。」

と河の神は云ふ。猪一戒は急いて、

「そんな事を云つて居ては仕様がない。快く師匠を返して貰ひたい。」
と責める。河の神は、
「ところが、さうは行かないのです。媚陰和尚は枯骨ですが、佛法の御蔭でなか〳〵腕が利きます。私の力ではとてもやつつけられません。」
と詫びるので、猪一戒は、
「それならしやうがない。どこに居るのか、そこまで連れて行つてくれ。」
と頼むと、河の神は、
「彼奴、先頃まで川の中を歩いて居ましたが、今は河の底に殘つた骸骨を集めて、庵を一つこしらへて、そこで祈禱などをやつて、鐘や太鼓の音をさせて居ます。ですから、私は近よれないのです。」
と澁る。
「何だ。庵があればそこに行かれるではないか。」
「ところが、和尚も骸骨ですから、陰氣が籠つて、暗くて、寒くて、冷たくつて、魚類も傍に行きません。私どもが近よりますと、鐵や石に觸はる樣、雪や氷に圍まれた樣に、冷たいこと、冷たいこと、どんな熱い血の人でも、すぐ死んだ樣になつてしまひます。ですから行かれない

のです。」
と河の神は云ふ。
「さうか。だが、この頃天氣が熱い。荷物が重いので身體が熱くて堪らない。そこへ行つてすこし涼んで來よう。案内してくれ。快く行かう。快く行かう。」
と猪一戒が云ふ。河の神は留められもせず。水兵に路を開かせて、北の端に連れて行つて、猪一戒に、
「あの白く茫として、また暗くつて分らない樣な處がそれです。こゝからは、私は氣力がありませんから參れません。待つて居ります。御自分で御出になつて……。」
猪一戒は返事もせず、釘鈀を提げてずん〳〵進んで行く。
河の神の云つた媚陰和尚は、佛法の修行をした御蔭で、人の形になつたが、永い間枯れて居たので、人間の血がない。何人か人を殺して、その熱い血を身體に塗つたが、凡夫俗人の血では何の役にも立たなかつた。この頃もとの沙悟淨、今の金身羅漢が、沙彌を河岸に立たせて、牛偈を待受けて居ることを知つた。この牛偈は高僧だ。その熱い血を、骨につけると肉が出來るだらうと思つた。で、沙彌を喫して、
「あなたは、すぐ骸骨だけで、高僧を渡せると思つて入らつしやるらしいが、さうは行かない。

以前、三藏法師が渡られた時には、自分どもの骸髏に、觀世音菩薩が葫蘆を一つつけられた。で、陰に陽が交つて、いゝ筏となつたので、人も馬も乘せられたのです。私どもの骸髏だけでは、とても出來ることではないのです。」

と云つたので、沙彌は、急いで羅漢に話して、觀世音菩薩の葫蘆を求めたのであつた。この沙彌が出かけて留守になつて居る處へ、牛偈が來たのであつた。で、和尙は沙彌の姿になつて、水を渡つて見せて、牛偈を捕へたのであつた。

媚陰和尙は牛偈を引つ張つて庵の中に入れて、白骨で作つた腰掛を出して座らせて、鋭い刀を出して顏に突きつけて、

「老師。自分は好んでこんな事をするのではない。自分は骸骨だ。高僧のいゝ血を貰はなければ、何時まで經つても肉の出來つこはない。方々探がしたが、そんな人がない。ところが、いい具合に老師に逢つた。佛は肉を割いて鬼に供へられた。老師も佛に效つて、血をくれられたい。萬々止むを得ない事だから、思ひ切つて、肉を割かして貰ひたい。」

と云ふ。牛偈は、「騙れた。」と知つたので、眼を閉ぢて、物も言はなかつたが、この語を聞いて、眼を開いて、

「骸骨が修行をすると云ふのは、善事であるから結構だ。自分の血で、『肉が出來るから、くれろ。』と云ふのも道理だ。自分は生きても死んでも一つだ、と覺悟して居るから、どうしてもいゝ。が、お前は肉が著かんばかりでなく、却つて、骨までも粉な粉なになつてしまふだらう。」

媚陰和尙は驚いた。

「どうして、さうなる?」

牛偈は云ふ。

「自分はもう陷穽に落ちて居る。釜の中の魚、俎の上の肉同樣だから、何も出來ないから、しかたがない。が、あの二人の弟子を考へろ。あれはえらい神通力を持つて居る。決して御前を許さないぞ。御前に勸告するが、御前はたゞよく修行しろ。さうすれば、佛の御力で、また何とかなるだらう。人を損つて、自分だけ德をしようたつて駄目だ。人を殺して自分が生きようと云ふ。そんな勝手な修行は佛法には無いぞ。」

と云ふと、媚陰和尙は考へて手を下し兼ねて居ると、表で、猪一戒が大聲を揚げて、

「妖怪奴、早く師匠を返してよこせ。」

と叫ぶのが聞こえた。

一六

媚陰和尚は、半偈を捕へて、それから血を取らうとしたが、半偈が說き出す語を聞いて、躊躇つて居るところへ、猪一戒の大聲が聞こえた。「もうやつて來た。が、かうなつてはしやうがない。陰風陰氣で彼奴をやつつけてやらう。それから此方の方を片づけよう。」と思つたので、庵の門を開けて見ると、猪一戒は丸裸で、釘鈀を握り、身にかゝる霧のさむさ、烟の冷たさも構はず、打ちかゝつて來る。「近く來られては、骨の墻などはすぐ打ち毀される。近寄せてはならん。」と思つたので、

「こりや、こゝの樣子を知らないのか。來れば死ぬぞ。」

と云ふが、猪一戒は、

「死ぬと云ふのか。御前、九つの骸骨は、おれの釘鈀のいゝ相手だ。早く頭を伸べて來い。一衝きにしてやる。」

と叫んで衝きかゝる。媚陰和尚は急いで、口を開けたと思ふと、一息、一息、陰氣を吐き出した。一陣一陣音を立てゝ、陰慘の風が吹き渡ると、膚は雪の刀を刺される樣。骨まで冷えて、水の中

に落ち込んだと同樣、體が慄へて、くしやみが頻りに出る。猪一戒はもう脚も立てられない。兩手もすつかりしびれて釘鈀も持てない。思はず退いて、二三里も逃げ出した。が、まだ身慄が止まらない。

「あゝひどい。ひどい。本當に寒氷地獄だ。」

と、また二三里逃げ出すと、河の神が居て、

「どうです、庵まで行かれましたか。早いではありませんか。」

と聞く。猪一戒は手を振つて、

「とても駄目だ。熱い方がまだいゝ。寒いのは堪らない。」

と云ひつゝ、水を分けて、飛ぶ樣に岸に上つた。小行者が待つて居て、

「師匠を探がし當てたか。」

と云ふが、一戒は返事も出來ず、やつと著物を著て、縮み上つてまだ慄へて居る。

「何と云ふ樣だ。」

と小行者は叱るが、猪一戒はまだ物も言へない。半時ばかり經つてから、やつと云ふ。

「あ、ほんとに凍え死なうとした。凍え死なうとしたよ。」

「何だ。このいゝ天氣に、凍え死ぬものか。」

「云つても分るまい。が、探がして水底まで行つた。始めおれは、水の中のたゞの妖怪とばかり思つたので、そこを探して居ると、水の神が出て來て、『九つの骸髏が化けて和尚となつて居るのだ。』と云ふ。で、行つて見ると、馬鹿に冷たくつて、陰氣なのだ。そこへ和尚が出て來て、いきなり陰氣を吹きかけた。その冷たいこと、冷たいこと、雪や氷をかけろよりも、冷たくつて、立つても居ても居られない。まあ早く駈け出したからいゝやうなものゝ、もしぐず〳〵したら凍え死んで、御前にももう逢へなかつただらう。」

小行者が云ふ。

「御前はさうだらうが、師匠はどうされた？」

「表に居てもさうだから、中に居る師匠はきつと凍え死んで居られる。」

「さうではあるまい。師匠の身體には、陽氣が滿ちて居るから大丈夫だらう。が、早速助けに行かなければならん。」

猪一戒は云ふ。

「自分は身體も弱いし、近頃精進物ばかり食つて居るから、冷たいのには敵はない。あんな處にはもう行かれない。兄貴は力が強いから、何とかして來い。」

「何だ、しつかりしろ。怖がつてはしやうがないぞ。荷物や馬の番をしろ。おれが行つて來る。

凍えるか凍えんか、よく見て居ろ。」

「さうは云はれんよ。まあ行つて見ろ。」

と云ひながら、二人は荷物を擔ひ、馬を牽いて廟まで來ると、そこから出て來た墨色の顏をした和尚がある。二人をつく〳〵見て、

「御二人は、大唐から來られたのではありませんか？」

と云ふ。猪一戒は大聲を上げて、

「何だ、妖怪奴、うまい事を云つて師匠を騙して連れて行きながら、また來ておれたち二人を騙さうとするのか。」

と云ふと和尚は、

「飛んだ事を云はれる。初めて逢つたばかりだのに、師匠を騙し、おれたちを騙すとは……。」

と訝かる。猪一戒は、

「貴樣は今、陰風を吹かせたではないか。早く逃げたからよかつた樣なもの、殆んど凍え死ぬ目に逢はせた。こんな奴は殺すが一番だ。」

と云つて釘鈀で打つてかゝる。和尚は、急いで禪杖を出して支へながら、

「無禮をすな。御前を怖がるのではないが、その釘鈀、その釘鈀には來歷があるだらう。」

と云ふ。小行者は鐵棒で双方を分けながら、
「一先づ手を引いたり、引いたり。……一體何と云ふ人だ。おれたちは東の唐から來たものだが……。」
和尚は云ふ。
「私は昔の沙悟淨、今の金身羅漢の弟子の沙彌です。師匠の云ひつけで、高僧の半偈の御伴をして西天に行つて解を求めるものです。師匠は、『半偈には二人の弟子がある。』と云はれましたが、今あなたたち二人がそれらしいから御尋ねしたのです。ところが、この御一人は構はず亂暴されるのですが、自分にはこの一本の禪杖がある。これではどんな妖怪たちをも退治する事が出來る、決して恐れはしません。」
小行者は問ふ。
「一體、金身羅漢には、御弟子が何人ある？」
「たゞ私一人、二人はありませんよ。」
と沙彌は笑つて云ふ。
「そりやあ變だ。二人ないのに、どうして死んだ眼付の白い顏の和尚が『沙彌だ。』と云つた。それが師匠を騙して、水の中に連れ込んだ。」

「どうも、外に一人あるとは思はれないが……。」
と沙彌は云ふ。猪一戒は横から、
「兄貴、此奴の云ふ事を聞いてはいかんぞ。前の白いのが黑いのに化けたのだ。人は騙されようが、おれはさうは行かんぞ。いろ〳〵に變つて來るが、あの九つの骸髏に相違ない。」
と云ふと、沙彌が驚いた。
「あゝ、あの媚陰和尚ではないか。彼奴、また惡い事をする。」
と云つて、
「九つの骸髏をどうして御存じで？」
と問ふと、猪一戒は、
「師匠を捕へて庵の中に入れた奴だ。どうして知らん事が……。」
「御二人で守つて入らつしやるのに、どうして彼奴の謀計にかゝられたのです？」
小行者は云ふ。
「彼奴も、今の御話のやうに『金身羅漢の弟子の沙彌だ。』と云つたし、また『水の上を歩くことが出來る。』と云つた。師匠は早く西へ行きたいので、本當と思つて水に行かれた。と彼奴は破れ淵圍を水に浮けて、筏にして師匠を乘らせて、河中まで行つた。何だか樣子が變なので、

急いで逐ひかけたが、もう河の中に取り込まれたのです。」
沙彌は怒つた。
「あの妖怪奴。おれの名を騙つて、高僧をだますとはひどい奴だ。」
と云ふが、猪一戒は、
「兄貴、あんな事を云つて居るが、聞き入れてはいかんぞ。一體、本當の沙彌が、羅漢の云ひつけで、師匠を守りに來たのならば、こゝにちやんと居て、おれ達らを待つべきだ。それに何處かへ行つてしまつて、却つて骸髏に名を騙らせるとは可笑しいではないか。」
沙彌が云ふ。
「御疑は道理です。九つの骸髏はもと羅漢の頸にかけて居られた數珠です。それが三藏法師を渡らせた手柄もあり、その後の修行にもよつて、二百年ばかりで人の形になつたのです。昨日私が羅漢の云ひつけで、あなた方の御師匠を守る爲めに來たのを知つて、私に、『以前唐佛師を渡したのは九つの骸髏ですが、觀世音菩薩が葫蘆を一つ貸して下さつたので、筏が出來たのです。今度も同じ事ですから、それを借りに入らつしやい。』と云ふものですから、一寸立ち去つて、師匠に聞いて、畫幅を持つて來たのです。その間に、あなた方が來られたので、彼奴、私に化けて、飛んでもない事をしたのです。」

と說明する。が、猪一戒は、
「それは後廻しだ。師匠は今ごろ凍え死なれたかも知れん。」
と云ふ。小行者は、
「もし本當の沙彌ならば、關係のない事だ。よく荷物と馬とを見てくれ。師匠を救ひにすぐ行く。」
と迫き込んで云ふ。と、沙彌は、
「いや、私が師匠の云ひつけで、河を渡らせ申す筈でありながら、それが外へ拘留されたのですから、私が彼奴を捕へてあなたの師匠を御返しします。あとはあなた方で御裁を……。」
と云ふ。猪一戒は云ふ。
「さうなれば、御前を本當の沙彌だと思はう。」
「それは何でもありません。何でもありません。」
と答へて、袖の中から、一幅の金身羅漢の小畫像を出して、岸に行つて、水を照らすと、一すぢの金色の光がぱつと立つ。それが火の樣に衝き進んで水の底まで達する。その光の强さに射られて、底の陰氣は日光に逢つた雪の樣に、見る〳〵薄れて、殆んどなくなつた。
媚陰和尙は半偈を守つて居たが、その光に射られて、しやうがなく半偈の膝の前に這ひ伏した。

で、しきりに頭を下げた。
「どうぞ、命だけは御助け下さい。」
と詫びる。牛偶は訝つた。
「御前は強い事を云つて、自分を殺さうとしたが、今またどうして救つてくれと云ふのか。」
媚陰和尚は、
「かうなつたら、虚言は云はれません。實は本當の沙彌が居らん間に、沙彌の顔をして、あなたを御騙し申したのです。今、本當の沙彌がやつて來て、眞火で燒き立てますから、枯れ骨の私は堪らなくなりました。どうぞ御助け下さいまし。」
と謝る。
「眞火が御前を燒きつけるのを、自分にどうして助けられる?」
「あなたの御身體には聖水が滿ちて居ます。眞火が來ても何ともありません。もし、私を許して、あなたの陰に置いて下されば、助かります。」
「よろしい。自分の陰にいくらでも隱れなさい。しかし自分は深い淵に落ちて居るのだ。送つて出して貰ひたいのだ。」
「それは何でもありません。御送りしませうが、二人の御弟子は許されますまい。私は元來、骨

ですから、それに返つてもよろしいのですが、しかし、二百年も修行したのが、無駄になるかと思ふと悲しいのです。」
と云ふ。牛偶は、
「快く佛道に歸依して、自分を送り出せ。きつと御前を助けてやる。心配すな。」
と諭すと、和尚は喜んだ。
「あなたの御慈悲の御語は、間違ひますまい。」
と云つて、牛偶を負うて、金の光の中を奔つて東の岸に送り出した。
岸では、小行者と猪一戒とが迎へた。
「まあ好かつた。師匠が、御歸りなされた。が、妖怪坊主もまたやつて來た。」
沙彌が小畫像をしまつて、進んで拜をした。
「私、沙彌がはじめて御目にかゝります。私は、師匠のもとの沙悟淨今の金身羅漢の云附けで、あなたの御傍に居るべきでしたが、彼奴に騙されて、師匠の處まで參ります間に、此奴があなたを河の中に陷してしまひました。疎忽の罪は申し譯がありません。今、佛の光で、此奴を燒き殺してしまひましよう。」
と云ふと、牛偶はなだめた。

「このものは修行して人の形になつたのだ。これからまた御慈悲によつて、自分の路を開かねばならんから許してやつてくれ。」

沙彌は、感心して、

「このやうに御慈悲深いのだ。早く御禮を申さないか。」

と云ふが、猪一戒は、

「おれは、この奴の冷氣で、凍え死をするところだつた。師匠は許してもおれは許さんぞ。」

と怒ると、半偈は留めた。

「まあ、さう云ふな。骨が修行して人の形になるのは容易ならん事だ。一遍凍えたからと云つて、未來の妨げをしては行かん。」

「未來と仰しやいますが、此奴はあなたの未來を毀さうとしたのです。」

、「さうは行かん。自分の事を思はなかつたのは、此の者の未來を思つたからだ、自分が此の者の未來を思つてやるのは、つまり自分の未來を思ふからだ。どうだ。御前は御前の未來をどうするか。よつく考へて見ろ。自分の事を捨てゝ、人を尤めるのはどうかと思ふ。」

猪一戒は默つてしまつた。媚陰和尚は半偈の前で、たゞ頭ばかり下げて居る。沙彌が、

「此奴、殊勝らしくすな、はやく原の身に歸つて、船をつくつて、御師匠さんを御渡し申せ。」

と云ふと、媚陰和尚は、すぐ水の上に飛んで、忽ち九つの骸髏となつて、ぐろりと圍んで一つの船を造つた。沙彌は禪杖を持つて眞中に立つて、金身羅漢の畫像の幅を廣げると、一枚の帆と同じ樣になつた。半偈をそれに載せた。小行者と猪一戒とは、廟の中から馬を牽き出し、荷物を擔ぎ出して一處に船に乘つた。ちやうどいゝ具合に、波も立たないほど東風がかすかに吹いた。その風を受けて船が進む。果もない大河も一時ならず渡られて、四人は穩かに西の岸に著いた。で大喜びに喜ぶと、沙彌は禪杖や畫像をしまつた。と、骸髏はもとの媚陰和尚となつた。

半偈はやさしく、

「今日此の流沙河を渡つたのも、沙羅漢佛が、沙彌を遣はされた御蔭だが、媚陰が筏となつてくれた御蔭もある。この御蔭は並大抵ではない。媚陰、御前は、自分の熱い血を欲しがつた。わしは身を殺してまで御前に血をやらうとは思はないが、御前の願をかなへてくれよう。」

媚陰は急いで、半偈の膝の前に跪いた。

「私は惡い事をしました。あなたの御許しで、骨で居られるのも有難いのです。どうして、それ以上の事が願はれませう。」

半偈は諭して、

「惡い考はいかんが、本當の修行は大事だ。御前の惡い考はもう云はない。本當の修行の方を念

うてかうするのだ。」
と云つて、左の手で、媚陰の頭を撫でつゝ、右の無名指を咬み破つて、數滴の血を出して、頭の上に酒ぎかけて、

蓮花善結胎　　堂草能成體、
充滿百肢骸　　願將一滴血

と、祝る。すぐ媚陰は頭の尖から、一筋の熱氣が、心の底まで透ると、次いで足の尖、手の尖まで行き渡つて全身が熱くなり、顏も紅に輝いた。大喜びに喜んで、頭をしきりに下げて、
「どうも有難うございます。辱うございます。この大恩は、いつになつても御報しすることは出來ません。」
と云ふ。半偈も喜んだ。
「眞の修行はむづかしいものだ。また墮落してはいかんぞ。」
と云ふと、媚陰は二度も三度も禮をし、また小行者たち三人に禮をして、河の中に飛び込んでしまつた。
半偈はそれを見て、改めて沙彌に、
「御前は、金身羅漢の云ひつけで、こゝに來たのだが、こゝで歸るのか。もしまた西天まで一處

に行く積りか。」
と問ふと、
「さやうでございます。師匠は以前の功績が十分でない。それを補ひたいから、『御前は老師の御伴をして、外の御弟子と一處に、西天に行つて眞解を求めて來い。それで十分になる譯だ。』と云はれましたから、私は何處までも御伴を致します。」
と答へるので、半偈は、
「さうか。以前、玄奘法師が、西天に行かれた御伴は三人だつた。自分は勅命を受けてから、一人で行くのかと思つたところ、佛師の御蔭で、この履眞に逢へた。履眞が探がしてくれたので、馬も手に入つた。これだけでも仕合はせであるのに、五行餘氣山で猪守拙に逢へた。今また金身羅漢の御蔭で、御前に逢へた。これでは全く、玄奘佛師の時と同じ樣になつたのだ。自分大願が、かやうな具合にみんなに逢へたのは、全く佛恩だ。有難い事だ。」
と、喜ぶと、小行者は云ふ。
「路は違ひますが、かやうに逢へたのは、自然と云はれませう。」
「どうして、さう云へる。」
「そりやあ、かうです。たとへば、人には心もあり、手足もある。これがなくては何も出來ませ

ん。みんな集まつたのは、これと同じではありませんか。これでこを事が出來上るのです。」
と云ふ。牛偶はしきりに點頭いて、
「さうだ、さうだ。」
と云つて、沙彌に向いた。
「御前は法名は何と云ふ?」
「沙彌と申します。外に何もありません。」
「兄弟子が、孫悟眞、次のが猪守拙、御前に法名が無いのだから、『沙致和』としようか。」
沙彌は喜んで、
「結構でございます。結構でございます。私は人と喧嘩しはしないかと、いつも心配して居ます。
『和を致す。』と云ふ御教訓は、まことに有り難うございます。」
と、四遍禮をした。小行者は、
「『致和』はよろしいが、あまり和に流れ過ぎてはどうかな。」
と云ふと、猪一戒は、
「もう流れると云ふ流沙は通つた。また流れる事もあるまい。」
と、戯れる。牛偶は、

「餘計な事を云ふな。はやく行かう。」
と云ふので、小行者は牛偶を馬に乘せた。猪一戒は荷物を挑いだ。沙彌は慌てゝ云ふ。
「荷物はおれが挑ぐ。」
「では、二人で別々にしよう。」
「さうしよう。」
「いや、分けるのはむづかしい。交代にしよう。」
「ではさうしよう。今日は自分が挑ぐ。」
と云ひあつて、猪一戒が挑ぐ。で、大道を四人で喜びながら進んで行つた。
時は春と夏との境であつた。若葉は暗い程繁つて、花はもう少なかつた。そこを佛法の話、過去の話などを云ひ交はしながら、覺えず知らず、よほどの里數を行つた。
暫くすると、山の氣が迫つて、一つの大山が前に現はれた。峯は天に屆くほど高い。烟や雲が、麓を廻つて、その中に岡や谷が見え隱れして居る。牛偶は云ふ。
「今まで山はあつたが、こんなのはなかつたな。えらい山だ。氣をつけて行かう。」
「氣をつけるのはいゝですが、大膽で行かなければいけません。」
「氣はつけなくてはいかん。どんな妖怪が居らうかも知れん。」

「妖怪が居ても居なくても、通らなければなりません。大膽で入らつしやい。」
と小行者は云つて金箍棒を取り出して、掛聲をして、前に立つて行く。牛偈はそれを見て喜びつつ馬を進めた。

牛偈の前面の山は解脫山と云ふ。牛偈の云つた通りに、妖怪が一人居た。『解脫大王』と名乘つて、手下の小妖怪は千人餘りもあつて、人に逢へば人を殺し、獸を見れば獸を殺す。そのために山の上、山の下のものは殺し盡くされて、山の中には人の聲もしない。山の入口が方々にあるから、山巡の妖怪が巡つて居るが、何事もないので、これらは土手の草の上に寢たり、起きたりして遊んで居た。小行者が掛聲をして、棒を振りつゝやつて來たので、

「こりやあ、不思議だ。こゝを通らうとするのは、何といふ大膽な奴だ?」

と云つて、山の上に走せ上つて、樹の間から見て居る。が、來るものはみんな平氣な顏であるし、また小行者が鐵棒を下げて前に立つて行く。威風が強い。驚いて、容易に顏が出せない。で、急いで洞に歸つた。

「東口の番の者でございます。大王に申し上げます。」

「何と云ふのだ?」

小妖怪が云ふ。

「變な事がございます。あなたが、何でも御殺しになるので、こゝを通る人はありません。しかたなく通る者は、夜中か曉方か、それもこそ〳〵と足音を偸んで參ります。ところが今日何處から來たか、四人の坊主がえらい勢で、掛聲をしながらやつて參ります。あまり不思議ですから、御知らせ申し上げます。」

解脫大王が聞いて、

「全く不思議だ。が、たつた四人ではないか。貴樣たち大勢居りながら、どうして一人だけでも捕へて來て、おれに見せないのか。」

と聞くと、小妖怪が云ふ。

「そりやあ、捕へられゝば、捕へますが、どうも捕へにくい樣子が見えますから、申し上げるのです。」

「一體、四人はどんな樣子だ?」

「四人の中、一人は馬に乘つて居ます。この者は色が白くて樣態も立派です。これは眞面目な奴ですから、捕へれば、捕へられます。外の三人ですが、口の長い耳の大きい、猪の樣な奴が荷物を挑いで頭を振つて歩いて居ます。もう一人、色が黑くつて、こはい顏の奴が、禪杖を提げて、馬の傍にくつついて來ます。この二人とも、とても强さうで捕へられるとは思へません。

ところが、も一人、雷の様な口の奴は、一層強さうで、鐵棒を使ひながら、前に立つて、掛聲をかけて、あたりのものをなぐりつけさうな様子をして居ります。その鐵棒が、大變長くつて太くつて、どの位重みがあるか考へもつきません。それを、風を切つて音を立てながら來るのですから、逃げられるだけでも幸です。とても捕へなんか出來るものですか。」

と云ふと、解脱大王は怒り立つた。

「馬鹿も大體にしろ。この解脱山はな。澤山の坑も、塹もあるのだ。神でも仙人でも通れはしない。どこの坊主だ。そんなに大膽にやつて來る奴は……、貴様たちは、ほんとに役に立たない奴だ。そんな下らない事を知らせて來る。おい、誰かその坊主どもを捕へて來い。」

と云ひも終らないのに、一人の妖怪が、

「私が捕へて來ます。捕へて來ます。」

と續けて云つた。

一七

解脱大王が、四人の和尚が山を通るのを怒ると、一人の妖怪が出て來て、大聲で、

「私が捕へます。」

と云ふ。頭の尖つた、眼の圓い。丈が高くつて痩せて居る蛇丈八と云ふ一方の大將だ。

解脱大王は喜んで、

「よし、よし、よし、早く捕へて來い。殺してはいかんぞ。縛つて來い。どこから來た坊主か聞いた上で、散々苦しませて、おれの法門のいゝ處を見せてやらう。」

と云ひつける。蛇丈八は喜んで、

「活きたまゝですか。何でもありません。」

と云つて、手下を大勢連れて、長柄の鎗を提げて、東の山の辻に出て待つて居ると、小妖怪が云つた通り、雷のやうな口の和尚が、鐵棒を持つて、掛聲しながらやつて來る。その後に白い顔の馬に乘つた和尚、猪の形をして、荷物を挑いだ和尚、黒い顔で禪杖を持つた和尚が一處にやつて來る。蛇丈八は敵の様子は分らないが、取り敢へず、子分を一列にならばせ、自分は鎗をさし出

して、路を遮つた。
「死にたい和尚等ゆつくり來い。大王は活きながら捕へようとして居られる。快く武器を捨てゝみんな捕まれ。此方から手を出させるな。怪我をすると、大王の思召にかなはんぞ。」
小行者はから〳〵と笑つた。
「活きたまゝと云ふのなら、何でもないぞ。おれたち四人は、一萬年も生きるのだ。安心しろ。お前の頭領の注文通りになるぞ。が、貴樣妖怪たちまたおれの注文通りになれ。」
蛇丈八は云ひ返す。
「この蕨坊主、をかしな事を云ふ。おれたちの御頭領の解脫大王は此山の王樣だぞ。だから、御注文もあるのだ。貴樣たち、何處から來たか分らない坊主、何の身依もない奴らだ。どんな注文があるか、快く云へ。」
小行者が云ふ。
「貴樣たちの注文は『活きたまゝ。』と云ふ。おれの注文は『死んでしまへ。』と云ふのだ。貴樣の注文に從はうか、おれの注文に從つて、年寄から若いものまで、上のものから下のものまで、みんな一處に死んでしまふか。」
蛇丈八はまだ返事もしないのに、手下どもの氣の小さい奴、力の弱い奴、膽のすわらない奴は、

きよろ〳〵あたりを見廻はして、早、逃腰になつた。蛇丈八は慌てゝ止めて、
「あの坊主どもの大法螺を聞くな。彼奴らを捕へて見せるぞ。」
と云つて、長鎗をしごいて、小行者の正面から衝きかゝつた。
「王樣は、貴樣たちの活きたのが御注文だ。が、貴樣はとても活きては居られんぞ。」
小行者は鐵棒を振り上げて、
「妖怪奴、死ぬか活きるか、この棒を食へ。」
と云つて打つてかゝる。
兩人は盛んに戰ふ。鎗が來れば棒が打ち、棒が行けば鎗が迎へる。六七合も戰ふと、小行者は、はや妖怪の手並の程を知つた。で、棒で鎗を支へながら、
「おい。一體こゝは何と云ふのだ。貴樣は何と云ふ名だ。快く云へ。棒で殺してしまつては何だかちつとも分らない。おれの師匠に、手柄を云ふにも都合がわるいぞ。」
「何だ、坊主、死にかゝつて、おれの名なんか聞いたつて何になる。はゝあ、多分物知りの鬼になる積りかな。知らんのは困らうから聞かしてやらう。よく聞け。この山は解脫山と云つて、まはりは八百里もある。それで、山の上には、澤山の坑、山の下には澤山の塹がある。だから、人間でも、神でも、仙人でも、通れるものではない。」

小行者は笑つた。
「大層な事を云ふな。昔から山があれば、路がある。路があれば、人が通る。それがきまりだ。通れん事があるものか。」
「貴様は知らんからそんな事を云ふ。この解脱山には、解脱大王が居られる。この方が天に大願を立てゝ、『天下の衆生を解脱させて、みな佛としてやる。』と仰つしやつて、この山を守つて、人を見ると、すぐ殺してしまはれる。だから、通るものは一人もないのだ。」
「貴様たちの大王が人を殺せば、また人にも殺されるだらう。」
「馬鹿を云ふな。おれの大王は身體が大きい。萬斤でも擧げられる。一本の寶刀で筋を切れば、骨も斬る、枯木を折る様だ。それで三十六の坑、七十二の塹と云ふ天嶮を控えて居るのだ。どんな英雄でも、豪傑でも、こゝに來ると、骨も筋もぐにやぐにやになり、心もすつかり亂れて、たゞ頸を延ばして大王の斬るのを待つばかりとなるのだ。その大王をどうされるものか。」
小行者は云ふ。
「貴様の大王の事は分つた。山の上の坑、山の下の塹と云ふのは何んなのだ？」
妖怪が云ふ。
「坑と塹の様子は見なければ分らん。たゞその名前をこゝで云つて聞かしてやらうか。聞けば怖

くて貴様立つては居られまいぞ。」
「まあ云つて見ろ。聞いてやらう。」
と小行者が云ふと、妖怪は指を屈めて、第一から三十六まで云ふ。
「此等の坑に這入つたが最期、萬年經つても人の身にはなれないのだ。この外にまだ七十二の塹があるのだ。これよりも猶怖ろしいのだ。聞かしてやらうか。」
小行者は云ふ。
「聞いて居てうんざりした。もう澤山だ。おれたちは早く西へ行きたいのだ。そんな下らないことを聞いて居る閑はないぞ。しかし、貴様の名だけは、聞かなければならぬ。一體何と云ふ？」
「おれの名か。おれは、截腰坑の首の蛇丈八先鋒と云ふのだ。」
「腰を截ると云ふのか。では、此方から貴様の腰を截つてやらう。」
と云つて打つと、妖怪は鎗でやつと受けたが、小行者がまた打つと、鐵棒の重みで、もう支へ切れない。逃げようとするが、小行者の手は快い。腰を目がけて打つと、妖怪は交はし兼ねて、腰から斬られて二つとなつた。小行者は笑つた。
「丈八が二つになつた。丁度九尺だ。」
手下どもは早くから逃げようとして居たが、これを見て、一所懸命に駈け散つた。その中、頭分

の奴は急いで洞に逃げ込んで、大王に、
「大變でございます。蛇先鋒が打ち殺されました。」
と云ふと、大王は、
「『擒にして來い。』と云ひつけたのになんで打ち殺した。はゝあ、坊主は堪らずに死んだのだな。」
「さうぢやあありません。」
「それぢやあどうして死んだ。」
「坊主は死にはしません。」
「坊主が死なければ、何んで『大變だ。』などゝ云ふのだ?」
「まあ御待ち下さい。私の申し上げるのは、蛇先鋒が、坊主に殺されたのです。」
大王は眉を上げ、牙を噛んで、怒り立つた。
「飛んだ事だ。何處の坊主が、そんな事をするか。快く刀を持つて來い。その坊主を殺してしまふ。」
と云ふと、手下どもは、刀を急いで持つて來る。大王はそれを取つて、
「三十五坑の頭領はみんなついて來い。おれが捕へたら、頭を斬るものは斬れ。皮を剝ぐものは剝げ。筋を抽くものは抽け。心を抉るものは抉れ。蛇丈八の仇討をきつとやれ。」

と云ふと、妖怪どもは一齊に刀、鎗、劍、戟をひらめかし、大王を中に圍んで、飛びながら進んで來る。小行者は喜び勇んで、山の途中まで來て居つた。ところが、喊の聲が雷の樣に響いて、山の凹地から一隊の妖怪が襲ひかゝつた。
小行者が見ると、妖怪の頭領は、頭は大きく、口が濶く、眼が大きく、髭は半分黄で半分赤い。腮は藍でまた紫だ。兩臂の筋は荒くて蔬蔓の樣、一身の肉は包んだ鐵の樣である。が、小行者はすこしも恐れず、棒を舞はして打つて來るので、妖怪は怒りに怒つて、大刀を擧げて、上から打つ。それを小行者は棒で受け留めて、
「妖怪奴、無禮をすな。貴樣は解脱大王と云ふ奴か。」
と云ふと、妖怪は、
「死にそこないの坊主奴、おれの名を知つて居るなら、素直に降參すべきだ。それが何としておれの蛇先鋒を殺した。逃げるな。おれの一刀を食へ。蛇先鋒の仇を討つぞ。」
と云つてまた打つてかゝる。小行者は大笑ひに笑つた。
「貴樣は解脱大王と云ふのだから、佛性があつて、教典も知つて居る奴かと思つたら、たゞ名前ばかりよくつて、實は惡を働いて居る濟妖怪だな。今日はいゝ幸におれに出くわしたのだ。おれの一棒で、本當の解脱を知れ。」

と云つて、「阿彌陀佛」と唱へて、また打ち込むと、妖怪は刀を擧げて切り返す。

強い和尙と勁い妖怪、法力の無窮をあらはし、神通の無限を示して、刀と棒と打ち合ふ有樣は凄まじい限であつたが、四十合ばかり戰ふと、妖怪は力が盡きかゝつて、支へきれなくなつた。

小行者はいよ〳〵強く、前に三、後に四、左に五、右に六と、遊ぶ樣に棒を振るので、妖怪はいよ〳〵堪らず、手を擧げて一招きすると、三十五坑の頭領ども、刀、鎗、劍、戟を一齊に振りかぶつて、小行者を眞中に取り圍んで打ち立てる。小行者は、にこ〳〵笑つて、

「やつて來い。やつて來い。人數は多いほどいゝぞ。何處かに棒が當るから。」

と云つて、縱橫無盡に振り廻す。大王は助が來たので、また盛り返して、刀を振り上げる。猪一戒と沙彌とは、牛偈を守つて見て居たが、あまり大勢が一處に來たので、

「あれでは、兄貴も大變です。こゝに御出下さい。助けに行きます。」

「行け、行け。援け合ふのが當然だ。こゝで見て居る。」

と牛偈は云ふ。猪一戒、沙彌は釘鈀と禪杖とで、

「援けに來たぞ。」

と云ひつゝ、飛び込んで行く。釘鈀と禪杖と、兩方の光が輝き渡りつゝ、風の如く、電の如く、雜ぎ立てる勢の强さに、妖怪どもはとても敵はず、東に押され、西になだれて、支へも出來ず遁

げ迷ふ。大王も力が盡きて、止むを得ず刀を抱きながら逃げて行く。手下どもゝ一處になつて、聲を擧げつゝ散り散りになつた。猪一戒は面白くなつて、逐つて行かうとすると、小行者は、

「兄弟、逃げる奴は逃がして置け。はやく山を通つてしまはう。この方が大事だ。」

と云ふと、沙彌は、

「さうだ、さうだ、その通りだ。」

と云つて　三人喜んで、牛偈の處に歸つて、一處に山を越して行かうとした。

解脫大王は洞に逃げて歸つたが、檢べて見ると、三十六坑の頭領の中で、七人が死に、外の二十九人が傷を受けて居る。雷の樣に大聲を上げて、

「殘念だ。おれはこの山に來てから、人一人も通しはしなかつた。それに四人の坊主どもが無理に通つて、こんな目に合はせた。どうしてくれよう。」

と叫ぶと、

「御怒は御道理、しかし、仇の討ちやうはありますぞ。」

と云ふものがある。大王は振りかへつて見ると、鉗口坑先鋒の閉不住と云ふのだ。

「何と云ふ。仇討が出來ると云ふのか。御前は平素默つて居るが、今日は何と云ふのだ？」

閉不住が答へて、

「今日は默つて居られません。昔から『主辱しめらるれば、臣死す。』と云ふではありませんか。坊主が強くつて、此方が負けて、大勢の頭領が逆に頭を割られたり、血を流したりして、飛んだ目に合つて居ます。今私が默つて居たのでは、誰があなたを御助けしませう？」

と云ふと、大王は手を拍つて喜んだ。

「忠臣、忠臣。有難い、辱ない。しかし、どうしたら、仇が討てる？」

閉不住は云ふ。

「力では勝てませんから、弱々とやりませう。あの三個の坊主にはとても叶ひませんが、あの色の白い坊主、あれは力が無ささうですが、ちやんと馬に乘つて居ます樣態は、主人で、貴人に相違ない。あれを捕へたらどうでせう。『菩薩を捕へれば、仁王は降參する。』と云ふではありませんか。」

と云ふと、大王は一層喜んだ。

「うまい、うまい。それがいゝ。しかしだ。三十六人の七人も死んで居る。殘つたのは傷だらけだ。もう戰ふ氣力は無い。あの馬に乘つた坊主を、どうして捕へる？」

「さう仰しやるな。七十二塹の頭領が居ますぞ。」

「さうは行かん。三十六坑の頭領でも駄目だつた。七十二塹のは、小利口で、人をどかして、見

せかけで、實力のない連中だ。これらに、どうしてあれが捕へられるか。」

「さうは行きません。弱いものは強いものには勝てませんが、強いものは弱いものに負けるものです。小利口でも、をどかしでも、見せかけでも、ちやんと英雄豪傑に勝つことが出來るんです。あの坊主ぐらゐ捕へるのは、何でもありません。あなたは、二十九人の坑の頭領を連れて、あの三人を誘ひ出して御覽なさい。その後から七十二塹の頭領どもが、襲ひかゝつたらあんな弱い坊主は、何十人でも捕へられますぞ。『虎を誘つて、山から出させる。』と云ふ計策、百發百中と云ふ處です。」

大王は、

「好し、好し。さうする。さうする。」

と幾遍も云つて、急いで七十二塹の頭領を呼び寄せた。大王に呼ばれたので、頭領はみんなやつて來た。大王は、

「『軍を養ふは千日、用ひるは一朝。』と云ふ。今日は一つ奮發して貰ひたい。此の解脫山の七十二塹、その塹の大將の御前たちが、おれを主人と仰いでくれて、人を通さないので、誰も來るものがなかつた。ところが、量らずも四人の坊主がやつて來た。その中の色の白い馬に乘つて居るのは弱さうだ。どうだ、おれが、三人の奴らを遠方まで誘ひ出すから、お前たちは後か

ら廻つて、あの白い坊主を捕へてくれ。さうすれば大手柄だ。」
と云ふと、みんな喜んだ。が、疑塹、盧塹の頭領二人は考へて、
「さやうでございますか。それは捕へられませうが、その三人の上に立つて居るのですから、中中手並がありさうですが……。」
と疑ふと、大王は云ふ。
「大丈夫、大丈夫、あれは何も持つて居ない。何が出來るものか。命が惜しい位のものだ。怖いことはないぞ。」
外の妖怪どもゝ、
「それならよろしい。おれたち、七情六慾で攻め立てたら何でもない。」
と云ひ合つて、山の後に群がつて行つた。

一八

解脱大王は閉不住の策で半偈を捕へようとして、また前から攻めて行つた。が、一度負けたので、怖氣がついて居るから、攻め寄せはしたが、小行者等の様子を窺ひながら、遠方から喊の聲を擧げて居る。小行者はそれと見て、鐵棒を擧げて打つて來る。大王は暫く支へはしたが、後へ後へと下がつて行く。手下どもゝ、たゞ掛聲だけで、進んで出るものもない。で、小行者は二里ばかり逐うて行つたが、沙彌は猪一戒に云ふ。
「妖怪どもがまたやつて來ながら、だん〳〵引き退つて行くのはどうだ？　何か計策があつて、兄貴を誘ふのではないか。」
「そんな事はない。どうだ、二人で追つかけて饜にしようではないか。誘ひをかけたつて何うなるものか。」
「ではさうしよう。」
と二人が相談して、半偈に、
「馬の上で御待ち下さい。駈けて行つて、妖怪どもを、みんな打ち殺して來ます。」

と云つて、釘鈀と禪杖とを持つて風の様に飛んで行く。

二人の姿が見えなくなると同時に、山の後から七十二塹の妖怪どもが一齊に喚ひかゝつた。半偈はすぐと取り巻かれた。

「いゝ具合だ。捕へろ。」

半偈は計に陷つたのを知つたが、今更どうする事も出來ぬ。たゞ心を鎭めて、馬の上で何も見ず聞かん様にして居ると、妖怪どもは飛んだり舞つたり、喚いたり、騷いだりして、

「馬から引き下せ。」

「早く連れて行かう。」

と云ふが、誰も半偈の傍に寄ることが出來ない。たゞぐるりを取り圍んで居るばかりだ。が、はてしがないので、荷物を擔いだり、馬を引つ張たりして、やつと洞の中まで連れ込んだ。

半偈は馬から下りて座つた。慌てもしない、亂れもしないが、弟子たちが一人も居ないので、たよりにするものがない。それに妖怪どもが、嚇かしたり、慰めたり、哄したり、様々にするので、醉うた様な氣持になつたが、言はず、動かず、土の像、木の人形と同じ様子で居た。

妖怪どもは、こつそりと大王にこの事を知らせると、大王は三人を相手にして支へ切れずに居る處へ、この通知があつたので大喜び、受け流して置いて、外の妖怪どもと、一處に山の脇の道

を走つて、洞の中に這入つた。

小行者は妖怪どもが逃げるのを見て、外の二人に、

「どうだ。彼奴の刀法は、初めの時は中々だつたが、今度は馬鹿に弱くつて、あの様に散つて行く。それに二人が來たものだから、一層弱つて逃げるわい。」

猪一戒が云ふ。

「沙彌が、ずん〳〵彼奴らが逃げるので、『計策があるかも知れん。』と云つたが、助けに來たのだ。ちよつと二三度、釘鈀を使ふと逃げてしまふ。何と云ふだらしのない奴等だ？」

「あゝ逃げたからには、もう來られない。快く師匠に話して、山を越すとしよう。」

「その通りだ。さうしよう。」

と云ひ合つて、後返りをして來て見ると半偈の影も見えない。

「師匠が見えないのはどうしたものか。あまり永いので、馬に乘つたまゝ外へ遊びにでも行かれたかな。」

「いや、さうではあるまい。この石の上に荷物をちやんと置いたが、それも見えないぞ。荷物が遊びに行きもしまい。」

小行者がきつとなつて、

「自分たちは彼奴の計にかゝつたのだ。」
と云ふと、猪一戒は、
「どうして？」
と問ふ。小行者は、
「『虎をだまして山から出させる。』と云ふ計だ。彼奴らは、戰つてもかなはないものだから、一寸戰ふ樣子をして、自分たちを誘つて逃げたのだ。それを追つて駈けて居る中に、後に隱れて居た奴等が出て來て、師匠を捕へて行つたのだ。計でなくて何だ？」
と說くと、沙彌は、
「さうだ。兄貴の云ふ通りだ。が、どうしたらよからう。」
と萎れる。小行者は考へて、
「どうもかうもあるものか。師匠を連れて行つた穴があるだらう。手分けをしてそいつを探がしてみよう。それで師匠の居る處も分るだらう。」
と云ふ。猪一戒は、
「さうだ。さうだ。前の方へ行つて見よう。」
と云ふや否や、釘鈀を提げて妖怪の逃げた方へ駈けて行く。と、沙彌も禪杖を持つて、山の後へ

走つて行く。
小行者は二人の行つたのを見て、空中に上つてあちこちと見廻はした。
大王は手下どもと洞に逃げ込んで、
「馬に騎つた坊主は何處に居る？」
と問ふと、手下どもは云ふ。
「その坊主は仰せによつて捕へて來ましたが　洞の後の方で圍んで居ます。まだ縛つてはありません。」
「どうして縛らない？」
「それがどうしても縛れないのです。御頭領たちが、腕を奮つて、刀を向けられるのですが、あの坊主、佛門の力ですか、近寄れもしないのです。どうして〳〵縛れるものですか。どうか、御自身で、後へ行つて始末して戴きたいので……。」
と云ふ。大王は怒つて、
「四人の坊主、變つた奴らだ。三人の奴らの惡いのは云ふまでもないが、この善かりさうな奴も、そんなに面倒なのか。」
と云つて、手に刀を提げて洞の後に行きつゝ、

「おれが解脱させてやるぞ。」
と、つぶやいて來て見ると、大勢の手下どもが、一人の和尚を圍んで居る。和尚はその眞中にきちんと座つて、目を閉ぢて動きもしない。大王は一打ちにしようと思つて來たのだが、それを見ると、びつくりして、手下どもを分けて前に出て、大聲で、
「貴樣は何處から來た奴だ？　死ぬ前に名を云へ。」
と云ふ。牛偈は眼を開けて合掌して、「阿彌陀佛」と唱へて、
「愚僧の名は大顚、東の大唐國から來たのだ。」
と云ふ。大王はすぐ、
「あの三人は何と云ふ。してまた、貴樣の何だ？」
と問ふので、牛偈は、
「一人は一番弟子で、孫履眞、またの名は小行者。もう一人は二番弟子で猪守拙、またの名を猪一戒。もう一人は三番弟子で沙致和、またの名は沙彌だ。」
と答へる。と大王は、
「さうか。大唐國から來たのか。その國で、身體を隱して居たらよかりさうなものだ。それに拘らず、萬里も遠方のこの解脱山までやつて來て、何をしようと云ふのだ。おれ樣の刀の御藤で

解脱しようと云ふのか。」
と云ふ。牛偈はすぐ、
「愚僧の來たのはさうではない。以前大唐の太宗皇帝が、佛道を好まれて、陳玄奘法師を靈鷲山まで遣つて、三藏眞經を持ち來らせて、世を救はう、人を救けようとなされた。ところが、眞解がないものだから、後になると、俗僧どもが、都合のいゝ樣に說き散らして、小乘にしてしまつて、世を誤り、人を迷はして居る。今、憲宗皇帝が、又佛道を好まれるので、愚僧を使として、また『靈鷲山に行つて佛の御目にかゝつて眞解を戴いて來い。』と云ひつけられた。それで、愚僧は辭退もせず、遠い路をやつて來て、量らず此方に通りかゝつたのだ。今、大王が愚僧をこゝに迎へられて『解脱してやらう。』と云はれるが、解脱は佛門では第一の大事だが、一體、大王の解脱とはどう云ふ事だ？」
と云ふと、大王は笑つた。
「解脱と云ふのは何でもない。ごく手近な事だ。おれの刀で斬れば、貴樣の浮世の緣がみな無くなる。これがおれの解脱と云ふのだ。」
牛偈は云ふ。
「そんなことが解脱なれば、いよ〳〵罪障が纏ひつく。だから大王は何時までも魔物で居られる

のだ。」
大王は怒つた。
「糞坊主何を云ふ。おれを魔物と云ふか。」
半偈は云ふ。
「愚僧は大王を悪口で、魔物と云ふのではない。佛道で云ふ解脱とあまり懸け離れて居るからさう云ふのだ。佛はちやんと佛である、大王はまだ魔物の境界に居られる。愚僧が虚言を云ふのではない。本當の事を云ふのだ。」
大王はそれを聞いて、
「それでは、佛の解脱と云ふのは何だ。」
と問ふと、半偈は、
「佛の解脱か。それは大王のよりも手近い事だ。大王が心を入れ換へ、刀を投げ捨てさへすれば、それが解脱で、坑も塹も一時に消えてしまふ。さうすれば、大王の永久の罪障は、ふりかへる間もなくみんな解けてしまふ。」
と云ふ。
「坊主いゝかげんな事を云ふ。貴様がおれに『刀を捨てろ。』と云ふ。それならば、どうして貴

様の弟子の、鐵棒も、釘鈀も、禪杖も一度に捨てさせないのだ？」
半偈は答へて、
「あれ等は、佛敎のために妖怪どもを平げようとして、めい〳〵武器を持つて居るのだ。だから、捨てないのが捨てた事と同様になるのだ。大王は魔道のために佛を滅さうとして刀を持つて居られるのだ。すぐ捨てゝも、捨てたと同様にはなるまい。兩方一様には云はれない。」
と云ふと、大王は怒つた。
「馬鹿な事、馬鹿な事。そんな馬鹿な事を誰が信じるものか。」
「愚僧の云ふ事を信じなければ、こゝに居ても無益だ。早く愚僧を出して、西に行かせて貰ひたい。さうすれば大王の解脱にもなる。」
と云ふので、大王は默つて考へ込んだ。と閉不住は、
「この坊主、うまい事ばかり云ふ。こんな奴の云ふ事を、信用なさるな。佛家に解脱と云ふ事があれば、大王は、これを殺すよりも、縛り上げて御置きなさい。自分で、それをうまく解脱して行つたなら、そこで私どもは、大きい力だと信じませうよ。もし、解脱が出來なかつたら、こんな口先ばかりの坊主に、大勢を欺させてはなりません。」
と云ふと、大王は喜んだ。

「閉先鋒の考へはいゝぞ。理屈にあつて居る。」
と賞めて、手下に云ひつけて、粗縄を持つて來て、半傷を引き倒して、手も足も一處に縛つて、洞の後の高い石の上から吊り下げさせて、笑ひながら、
「こりや坊主、貴樣の云ふ解脱はどうだ。」
と云ふ。半傷は心を少しも亂さず。すぐ答へて、
「解脱云何。縛束因レ魔。
魔消縛解。妙義無レ多。」
と云ふ。大王が問ひ返さうとする時、小妖怪が慌てゝ走つて來て、
「大王樣、大變です。三人の坊主が尋ねて、門まで來ました。」
と云ふ。大王は驚いて、
「さうか。そりやあ大變だ。こゝは深くつて、分らん筈なんだが……。」
と訝ると、小妖怪が、
「前に戰つた時、傷を受けたのが、山の陰に倒れて居た。それが彼奴に捕へられました。それを案内にしてやつて來たのです。」
と云ふ。大王は急き込んで、

「閉先鋒、御前は『菩薩を捕へれば、仁王は何でもない。』と云つたが、どうだ。菩薩は捕へたが、仁王は降參せんで攻めて來たではないか。」
と詰ると、閉不住は、
「そんなに御慌てなさるな。何と云つたつて、彼奴は三人ぎりですぞ。洞中の手下どもは、まだ千人あまりもあります。それで、眞中に圍んで攻め立てたら、三人位何でもないではありませんか。」
大王は氣が強くなつて、
「道理だ。さうしろ。」
と云つて、洞中の手下をみんな出して、自分は勢をつけて、大刀を引つ提げて洞から出て、大聲を擧げた。
「こりや、三人の死生知らずの坊主ども。おれはちよとくたびれたからこゝで休んで、貴樣たちが通れる樣にしてやつたのだ。それを幸にして通ればいゝものを、何で、また門に來てやかましく云ふ？」
小行者が眞先に、
「妖怪奴。負けて死なうとして居ながら、何だつて、計をして、おれの師匠を捕へたのだ？

おれは貴様を殺さうとするのではない。貴様が、譯が分つて、師匠を送り返して山を越させれば、貴様と和睦もしようし、西天に行つて、貴様の成佛もさせてもやらう。もし迷つて悟らなければ、一棒で、貴様の命を叩き切つてやるぞ。」

と叫ぶ。

「何を云ふ。虚言つき坊主。おれは山の前で貴様と戰つたのだぞ。あとの二人の坊主が、後に氣を付けないものだから、師匠坊主を見失つたのだ。ちつともおれの知つた事ではないぞ。」

と云ふので、猪一戒と沙彌とは、怒り立つて〻釘鈀と禪杖で目茶苦茶にうちかゝる。

「おれたちが氣をつけんとは何の事だ。この妖怪を打ち殺して、師匠を取りかへせ。」

と叫ぶ。大王は刀を擧げて支へるが、支へ兼ねて、急いで手を上げて呼ぶ、大勢の手下が一齊に打ちかゝる。小行者はそれを見て二人に過があつてはと、金箍棒を振り廻はして、

「二人とも急くな。おれが來たぞ。」

と云ふと、二人は一層勇氣が出て、釘鈀は雨の樣、禪杖は梭の如く、暇もなく、隙間もなく、衝き立て、振り立てる。手下どもは千人あまりだが、三人の勢に敵はず、東西に逃げ走る。大王も騷ぎ立つた中に紛れて、たうとう洞の中に逃げ込んだ。閉不住も溜らなくなつて、同じやうに逃げ込んだ。手下どもはなほ殘つて、散々に戰つたが、三人の腕前と兵器とには敵はない。みんな

ばら〳〵になつて、また洞の中に駈け込んだ。三人の徒弟は、それと見て、

「どうしたのだ。出て來い。出て來い。」

と云ふが、誰も出て對手になるものはない。洞の中では、大王が、閉不住に、

「飛んだ事をした。和尚を捕へたのはいゝが、外のえらい和尚を引き出して來た。一體どうしたらいゝのだ。貴樣がまずい計をやるものだから……。」

と恨めしげに云ふと、閉不住は、

「あなたはこゝで、大王となつて、解脫させようといふ大願を持つて入らつしやるのに、一寸負けたからと云つて、弱り切つてしまはれるとは、どうしたものです。」

「さうは云ふな。あの和尚どもの武器はえらいものだぞ。あれで打ちかゝられると、やつと支へられる位のものだ。ことに、あの鐵棒の重さは泰山が倒れかゝる樣だ。おれだからいゝやうなもの。それでも、やつとの事で逃げ出したのだ。他人を解脫するどころか、此方が解脫させられる處だつた。大願も何もあつたものではないぞ。」

「さうだと大王、貴方は『生命が惜しい。面子はどうでもいゝ。』と仰しやるのですか。」

「いや、さうでもないが、かうなつては面子などはどうでもいゝ。」

閉不住が云ふ。

「それならば、いゝ考があります。洞門を開けて、あの和尚を御出しなさい。さうすると、三人の弟子どもゝ、みんな行つてしまひます。それで萬事解決ですから、私どもも大王から怨まれる事もなくなります。が、大王、あなたの御威光もそれつ限りになりますぞ。」

と云ふと、大王は顔を眞赤にして、

「そんな事が出來るものか。飛んでもない……。」

と云つたが、思ひかへして、

「何とか外に計はないものか？」

と云ふと、閉不住は、

「一擧兩得と云ふ計もありますが、どうも大王には、いゝか惡いか分かりません……。また御恨みになると困りますから。」

大王は笑つた。

「急いたから、語の調子で……。兩得の計といふのがあれば、早く云つて聞かせろ。」

閉不住は勿體らしく、

「戰つても勝てない。和尚を送り出すも面子を失ふ。どちらにしてもむづかしい場合ですから、戰ひもせず、送り出しもせず、口上手な奴を出して、うまく云つて、あれらと仲直りをするんです。で、あなたは澤山の繩を持つて、洞の奥に御隱れなさい。で、仲直りをして、武器を持たせず、三人を一人づゝ洞の中に誘ひ込むのです。武器がありせんから、捕へるのは容易です。それを御持ちの繩で縛り上げる。四人みんな縛り上げれば、もう此方のもの。大王の御威光に、すこしの傷もつきません。どうです。この計はいゝではありませんか。」

「よからう。おれは繩を持つて奥へ行かう。が、誰が出て仲直りをすると云ふのか。こゝの連中は口不調法だ。……さうだ。御前が出てやつてくれ。」

と大王は大喜びで云ふ。閉不住は云ひ出したものだから、せん方なく、門を開いて、出て來ながら大聲を揚げて、

「三人の方たち。一寸御待ち下さい。本洞の大王が、『皆様と仲直りをしたい。』と申します。」

と云ふ。

「何、『仲直りする。』と云ふのか。それなら快く出て來て話をつけろ。」

「はい〳〵。すぐ御話を致します。御覽の通、この山は西方へ通ふ路で、何の差支もないところでございますから、旅人の通行が日々多くなつて參りました。それはようございますが、人が殖えれば、事が殖えて、いろ〳〵な煩はしい事、うるさい事が出來て、罪障が一日一日と多くなつて參りました。それで、私共の頭は、大願を起して、獸に出逢へば獸を殺し、人を見れば

人を殺して、業障から解脱させ、此の山の面目を清浮にしようとしました。それで此山を解脱山と名づけ、自づから解脱大王と名乗つて、日々此の所業を行つて参りました。ところが、此度計らずも、あなた方四人の神僧に御目にかゝりました。それを間違へて俗僧だと思ひ、その御一人を捕へて、後の洞に御連れして、解脱させようと致しました。が、御三方の御法力は御盛んで、『とても俗僧どもの出來るところではない。』と曉りました。で、『至急に、仲直りをして戴きたい。この事を申し上げろ。』と私に云附けましたので出て参りました。どうかこの事を御聞入れ下さい。御願ひ申し上げます。御聞入れ下さいますれば、御一人何も持たずに洞の中に御這入り下さい。さうすれば、馬も、行李も、皆御返し致します。御手向ひは決して致しません。また西方へ御出になる御邪魔は一切致しません。」

「解脱とか、何とかはどうでもいゝ。師匠を返し、行李も馬も返せば、それでいゝ。よし、おれが洞に這入つて取り返して來る。」

と小行者が云ふと、沙彌は止めて、

「兄貴、さう輕々しく這入つてはいかん。どんな計略を考へて居るか分らん。自分が行かう。もし間違があつたら、兄貴、例の棒で、奴等を打ち殺してくれ。」

「そりやいかん。たゞ一人で何も持たずに這入つたら、多勢に無勢で、どうなるか分らん。」

「それなら、おれが行かう。大丈夫だ。」

と猪一戒が云つて、釘鈀を捨てゝ這入り込んで行く。閉不住も一所に行かうとすると、小行者は留めて離さない。

猪一戒は洞の中に這入るとすぐ、大聲を上げて、

「御師匠様は何處に入らつしやる。早く御連れ申して來い。」

と云ひつゝ、奥深く行かうとすると、妖怪どもが群がつて、這入らせまいとするが、猪一戒は押し除け押し除け這入つて見ると、半偈は高く吊り上げられて丁度一つの石の上に下つて居る。猪一戒は慌てゝ近寄つて、

「御師匠様、私が参りました。」

と云ふが、長老はもう茫然として、耳も聞えず、眼も見えぬと見えて、何の答もしない。

「御師匠様、どうなすつたのです？」

と云つて、繩を解かうとすると、妖怪どもは寄つて來て、

「あゝ猪一戒様ではございませんか。」

「猪一戒様だ。よく御出で下さいました。」

と歡迎の聲を上げる。猪一戒は思はず喜んで、

「どうして、おれと云ふことが分る。」
「あなたの兩方の御耳は風に吹かれた蒲の葉、御口は水から出た蓮。どうして分らん事があろものですか。」
猪一戒は得意になつた。
「御前たち、それでおれを知つたのか。では、おれの釘鈀の手並を知つて居るだらう。」
「よく存じて居ます。御振り廻はしになつたのを拜見して、怖くて怖くてたまりませんでした。」
「さう云ふならば、早く師匠の繩を解け。」
「それは何でもありません。切角御出で下さつたのですから、御悠りして下さい。こゝには好い酒もあります。一杯召し上れ。美人も居ます。御取持も致させます。金も銀もございます。御持ちになれば、御道中の御費用にもなります。」
「いや、そりや忝ないが、自分らには、酒と、色と、金とは禁物だ。精進物だけ食はしてくれゝば、それで澤山だ。」
「そりや、すぐ用意致します。」
「では、師匠と一所に馳走にならう。早く繩を解け。」
「はい〳〵承知いたしました。」

と云ふが、動かうともしないで、
「いや、御慈悲深い御様子だ。」
「御威勢のいゝ事。恐れ入つた。」
「變つた御面相、眞の佛様だ。」
と口々に持ち上げるので、猪一戒は嬉しいが、極まりが惡くなつて小さくなつて居るのを見て、
解脱はこつそりと、
「もういゝぞ、今だぞ。」
と云ふと、妖怪どもは、一齊に手を出した。頭を捕へるものは頭、脚を引くものは脚、手を取るものは手で、猪一戒を押へつけた。と、一條の麻繩で、見る間にくる〳〵と縛り上げた。
「どうだ和尚、この精進料理をたらふく食へ。」
と云ふ。猪一戒は脱けようとあせるが、凡情が湧き上つて居るので、どうする事も出來ない。半偈と一所に吊り上げられた。
小行者と沙彌とは、表で待つて居たが、中から何の報知もない。
「どうも變だた。師匠を御連れするのに、さう手數もかゝるまいに。」
「始めから變だと思つた。行つて見よう。」

と沙彌が禪杖を提げて行かうとすると、閉不住は遮つた。
「さう御急きなさるな。仲直りしたのですから、武器は御離し下さい。私が困りますから。」
「仲直りしたと云ふのに、兄貴はどうして出て來ない？」
「大方、あの方は澤山召し上るから、ゆつくりして入らつしやるのでせう。」
「そんな事があるものか。」
と押し除けて、洞の中に這入ると、中には誰も居ない。
「師匠と兄貴とは、何處かでゆつくり食つて居るのではないか。」
と思つたが、また、
「禪杖を持つて居ると、彼奴らは、自分らを恐がつて居ると思ふかも知れん。」
と考へて、禪杖を門に倚せかけて置いて、奥に這入つて、あちこちと見廻はすと、丁度猪一戒を吊り上げて喜んで居る妖怪どもが目敏く見つけた。一齊に駈け出して來て、捕へるものは捕へ、引張るものは引張つて、
「又一人御出になつた。早く御連れ申せ。」
と云ひ立てる。沙彌は、「こりや、おれをも招待するのだな。」と思つて、
「行くよ、行くよ。そんなにするには及ばん。」

と云ふが、無闇に引つ張つて行くと、解脫は頭から麻繩を投げかける。妖怪どもは寄つてたかつて、縛りつける。沙彌は驚いて、
「なにしなくつて行くよ、行くよ。」
妖怪どもは笑つて、
「みんなあんまり御待ち兼ねですから、急かねばいけません。」
と云ひながら洞の後に引き込んで、猪一戒等と一所に吊り上げた。沙彌は大聲を上げた。
「飛んだ馬鹿を見た。何でおれを欺した？」
と云ふと、解脫は、
「死にかゝつて居て、何をぐず〳〵云ふのだ。」
と嘲けるが、沙彌は負けず。
「はゝあ、安心して居ると見えるな。もう一人兄貴が居るぞ。金箍棒を振り廻すと、人でも山でも粉々になるぞ。糠喜びをしたつて駄目だぞ。」
と云ふと、覺えずぞつとして、「なるほど、あの雷和尚の鐵棒は大變だ。」と思つたが、また考へ直して、「何、彼奴も齋でもつて欺してやれ。」と手下の氣の利いた奴を呼んで、こつそりと云ひ付けた。手下はすぐ門から出て、小行者に呼びかけた。

「頭からの云ひつけでございます。失禮ばかり致しましたから、その御詫びに、些か精進料理を用意しました。長老様も、猪一戒様も、沙彌様も席に著いて御出になります。どうかあなた様も早く御出で下さい。御願ひ致します。」

「何、おれに來いと云ふのか。それならば頭が呼びに來さうなものだ。何故來ない？」

「仰の通り、參るべきでございますが、三人の御方の御相手がありませんので、失禮でございますが、私どもが代りに參つたのでございます。」

閼不住も傍から、

「入らつしやい〳〵。頭が心からの馳走ですから、心持を受けてやつて下さい。」

と云ふ。小行者は、「誠か虛言か、行かんと譯が分らん。行つて見よう。」と思つて、

「よろしい。行つてやらう。案内しろ。」

と云ふと、妖怪どもは先に立つて走り込む。それと見て小行者は、こつそりと門の前の大石を指して「變れ。」と云ふと、すつかり小行者の姿となつた。それを見て、自分は一疋の蒼蠅に化けて、妖怪の一人の頭の上に留まつて、それと一所に這入り込んだ。

解脫は小行者が空手で來たと見たので、「うまく行つた。計にかゝつたのだ。」と思つて、忙いで聲をかけると、洞中の妖怪は殘らず出て來て、麻繩を繰り出して小行者を捉へた。が、不思

議な事には、小行者は一切抵抗もせず、動きもしない。で、樂々と縛り上げた。解脫は大悅びで、やつて來た閼不住に、

「たうとう、うまくやつた。此奴を引つ立てゝ行け。細々と、解脫させてやるから。」

と云ひつゝ、手下どもに命ずると、手下らは扛かうとするもの、持ち上げ樣とするもの、力を合はせて、懸聲をかけるが、どうした事か少しも動かない。

小行者はこの樣子を見て喜びつゝ飛んで半偈の懷中に飛び込んで、

「御師匠樣、私が參りました。」

と云ふ。半偈はすつかり疲れてうつら〳〵して居たが、この聲を聞いて、はつと驚いて、

「來たか。」

と云つてあたりを見ると、猪一戒も、沙彌も、皆吊るされて居る。

「あゝ二人とも此處に居るのか。」

と吃驚した。

小行者は半偈の繩を解くのは何でもないが、それよりも妖怪どもをやつつけるのが大事だと思つたので、飛んで前の處へ歸つて見ると、妖怪どもは大騷ぎして動かさうとすると、石の小行者は小揺れもしない。解脫は腹を立てた。

「仕様のない奴等だ。こんなものが動かせないのか。よしおれがやる。」
と云つて、腰を曲げて、引き出さうとする。小行者はそれと見ると、蝿から變じて、今度は本當の石となつた。解脱が石を抱いて腰を起さうとする處に伸しかゝつた。石は千萬斤の重さがある。それが倒れかゝつたのだ。どうして押しかへされよう。すつかり押しつけられて、身動も出來ない。閉不住はそれと見て「これは大變だ。」と、一所懸命に石にかじりついて持ち上げようとすると、小行者は本身を現はして、耳の中から金箍棒を取り出して、その頭を目がけてはつしと打ち下す。この一擊には誰れも堪へられない。閉不住は一口も開かずに死んでしまつた。
小行者は飛び出して、半偈の繩を解く。また他の二人のをも解く。半偈はすつかり氣が付いて、小行者に、
「御前の御蔭で助かつた。御前が居なかつたら、佛の光もなくなるところだつた。」
猪一戒も、沙彌も、
「兄貴の御力はまことに不可思議だ。」
と賞めそやすと、小行者は、
「法力といふものをおれは持たない。たゞ魔の魔で魔を伏したばつかりだ。」
と云つて、みんなで石の處へ來て見ると、解脱頭は、すつかり石で壓されて、解脱してしまつて

居る。外の妖怪どもはどうかと見ると、頭が死んだので、もう散り散りばら〳〵となつて影も形も見えない。「よくも早く逃げたものだな。」と驚いたが、妖氣が消えて、山が清淨に歸つたので、師匠も弟子も安心して、洞の中に一泊した。
夜が明けると、洞の中を探がして、貯へてある食糧を取り出して、十分に食べ、釘鈀、禪杖、白馬、行李を整へて大道を西へ向つた。

一九

半偈の一行は、大道を何の故障もなく、西へ西へと行つたが、數千里も行つたと思ふと、一座の高い山が行方に見え出した。半偈は馬上で、

「前にどうして高い山があるのか。」

小行者は答へて、

「大唐から靈山まで十萬八千里もあるのですから、高い山は數知れずあります。吠驚なさるには當りますまい。」

「吠驚はしないが、また妖怪が居るかも知れない。」

「大丈夫です。あの山はよく繁つて、いゝ光があります。妖怪ではなくて、えらい方が居られるでせう。怖がるには及びません。」

と云はれて、半偈が見ると、まことにいゝ山だ。山の雲には溫和な樣子があらはれて居る。

「御前の云ふ通りだ。どんな處か人に聞いて見よう。」

と云ひつゝ四五里行くと、高く獸の頭の著いた屋根が見える。確かに道敎の御寺だ。道について

廻つて行くと、山門の前に出た。それを這入つて第二の門まで行くと、石に、

「萬壽山洞天、五庄觀福地。」

と彫つてある。半偈は忽ち悟つた。

「あゝ、これは聖賢の住居だ。」

猪一戒は笑つた。

「何だか一度入らつしやつた樣ですな。」

「いや、一度も來たことはないのは勿論だ。」

「それで、どうして御存じなのです?」

「それはかうだ。いつか人の話に、この山は鎭元大仙の修行の處だ。三藏法師が通られた時、孫悟空が亂暴をして人參果を打ち仆した。大仙は我慢がならず、遂に大爭ひとなつた。そこへ觀世音菩薩が來られて、人參果の樹を活されたので、爭は解かれたと聞いて居る。今、其處へ來たのだ。這入つて行つて參拜してみよう。」

小行者は喜んだ。

「私の祖は、大仙と知合となつたと聞いて居ます。這入つて御目にかゝりませう。」

みんな進んで大殿まで行くと、中から兩人の童子が出て來た。

二人の童子は、人が來たので迎へに出たのであつたが、四人を見て、けゞんな顏をして、見上げ見下ろして、何とも云はない、半偈は聲をかけて、

「御二人さん。何で、私どもを不思議さうに御覽になる？」

二人はやつと返事をした。

「どうも不思議です。何だか御目にかゝつた事があるやうでもあり、無いやうでもあり、……。」

小行者は笑つた。

「どうしてさうなのです。」

「いや、をかしい事は、『三百年前に御出になつた三藏法師と御弟子の方とが、また御出になつたか。』と思つたのです。が　何だか、御顏付が違つたところがあり、また御語も同じではありません。だから考へて居るところなのです。」

半偈は笑つた。

「まさにその通りです。あなたは、明月さん、清風さんではありませんか。」

「確かにさうです。」

「では、御話しますが、あの四人はもはや成佛されました。我ども四人は、今度新たに大唐の天子の勅命で、靈山に參詣する途中で、こゝに參つたのです。ですから、似て居て、しかも違つて居るのですから、御疑念は御道理です。」

「それでは、御新客なのですね。が、三藏法師が經を持つて歸られたらば、それでよかりさうなもの、あなた方は、どうして又靈山に入らつしやるのです？」

半偈が、「眞解を得るために行くのだ。」と說明すると、二人は咲つて、

「經があればそれで十分なのに、どうして眞解などが入るのです？　中國人は怜悧ではありませんね。あなた方は、飛んだ御苦勞樣な事ですね。」

猪一戒が怒つた。

「何でくど〳〵云はれる。客が來れば、それだけの待遇があるべきです。」

半偈はそれを叱つて、

「いや、道が違へば、考の違ふのは當然です。それはそれとして、私は大仙の御高名を承つて居ます。切角來たのですから、御目にかゝらせて戴きたいものです。御取次ぎ下さらんか。」

「承知しました。師匠は火雲樓で修行中ですから、何人にも御目にかゝりません。が、一度聞いて見ます。」

二人は、四人を殿上に入れて置いて、內に這入つて鎭元大仙に話すと、大仙は云ふ。

「あの三藏は自分と舊い知り合だ。孫行者は仲直りした後に親友となつた。が、今來た四人は何

の關係もないものだ。出て逢ふ譯には行かない。さつと待遇して歸らせてやれ。」
それを聞いて二人は出て來て、
「師匠に申しましたが、今修行中ですから御目にかゝられません。御歸りにまた御寄り下さい。まだ御飯前でせうから、まあ召上つて御歸り下さい。」
と云ふ。半偈は聞いて何とも云はない。が、小行者は怒つた。
「何て威張つた事だ。出て來て逢つたらよかりさうなもの。」
清風は笑つた。
「こりや可笑しい。私共は道教、あなた方は釋教、何の關係もない、あなた方は偶然こゝに來られたのだ。逢うても逢はなくてもいゝではありませんか。」
「さうは行かない。先年、三藏の時にはよく待遇て、人參果まで出されたのだ。それに自分らをかやうに取扱はれるのは、その意を得ない。」
「いや、三藏法師は師匠と舊い知り合ひ、孫行者は親友ですから、御留めしたのです。あなた方とはそんな關係がありませんから、しかたがありません。」
小行者は笑つた。
「さう云はれゝば、こちらにも云ふ事がある。實は自分は孫行者の直系です。それが親友ならば、

自分も關係なしではありません。」
清風が云ふ。
「さうすれば、孫行者は一條の萬斤もある金箍棒を使はれました。その直系と云ふからには、あなたは、その何分の一かは御使ひになれますか。」
明月はそれにつれて、
「孫行者にえらい手並があつたばかりではありません。二人の弟子の猪八戒さんの釘鈀、沙和尚さんの禪杖もまた大變なものでしたぞ。」
小行者はまた笑つて、耳の中から繊花針を取り出して金箍棒とし、殿上から下りて振り廻はし衝つ立てゝ、
「どうです?、どうです?。」
と云ふと、猪一戒も、沙彌も、釘鈀と、禪杖とを取り出して、衝つ立つて、
「どうです。昔と違ひますか。」
と云ふ。二人は驚いて、
「あゝ、あなた方は凡人でない。」
清風は明月に、

「急いで御馳走をこしらへさせろ。自分は師匠にこの事を申し上げよう。」
と云つて、火雲樓に行つて大仙に話す。と大仙は、
「さう云ふ譯ならば關係のある者だ。しかし、氣の暴い奴らしいから、我仙家の手並を知らせてやらう。まあ長老を呼んで來い。」
清風は出て來て見ると、みんな齋を喫べてしまつて居る。
「老師から御出で下さい。」
と云つて案内する。猪一戒が行かうとするが、清風が、
「師匠を先に、弟子を後にするのが禮です。」
と止めた。牛偈は一戒を叱つて置いて、案内に連れて火雲樓に來て、簾をくぐつて大仙の前に出た。
大仙は高座の上に居る。牛偈が恭しく禮をすると、大仙は急いで下りて、
「さう御叮寧になさらなくつても。」
と止める。
「いや、私は凡僧に過ぎません。あなたは當代の祖師であらせられる。御目にかゝつたのが、幸のいたりです。」

と云つて聞かない。たうとう弟子の禮をして參拜した。大仙は童子に茶を出させて、
「前に唐三藏が經を求められたのは、前世の因緣があつたからです。あなたはそれが御ありにならないから、家に居て御修行なされゝばよかりさうなもの、それにどうして、苦勞して西に行かれるのです？」
牛偈は恭しく、
「佛は前世の因緣で佛になられます。凡夫はいつまで經つても凡夫を出ません。私が西に參りますのは、佛にならうと申すのではありません。たゞ凡夫から脫け出たいと思ふからです。」
と答へると、大仙は、
「仰は御道理、聖人と凡夫との境をよく言はれた。感服。感服。」
と云ふ時、童子がいろ〳〵の仙果を持ち出して供へた。
「どうか、召し上つて御話し下さい。」
と云つて、大仙は牛偈を留めた。
三人の弟子は表で待つて居たが、牛偈が出て來ないので、
「こんないゝ天氣に、こゝでぐず〳〵する事があるものか。」
と云つたが、まだ出て來ないので、明月に催促すると、明月は這入つたが、暫くして出て來た。

「師匠が申しますには、こゝから西の方の路々には、妖怪がことに澤山居る。靈山に行きつくまでには長老の命もあるまい。長老も『こゝに居て修行をする方がいゝ。』と云はれます。で、老師は『あなた方はあなた方だけで、靈山まで行つて入らつしやい。』と申します。」

小行者は大いに怒つた。

「そんな馬鹿な事があるものか。」

「でも、さう申されたのです。では御自分で行つて聞いて入らつしやい。」

「よし行かう。」

と明月について火雲樓の下に行くと、長老は大仙と話し込んで居る。小行者は大聲を上げて、

「御逢ひになつたら、それでいゝでせう。いつまで何の御話ですか。」

半偈が答へるを待たず、大仙は、

「あれは誰です。喧しいではないですか。」

半偈は恐れ入つて、

「徒弟の孫履眞と申すものです。私に『早く行け。』と催促するのですが、田舍者で、禮儀を知りませんので、申譯がございません。」

「それならば、こゝへ呼んで貰ひませう。」

と云つて明月に呼ばせると、小行者は進んで來たが、大仙に禮もしない。眼を張つて、睨みつけて居る。

「御前は誰だ。」

「童子にすでに申して置いた、あなたの親友の孫悟空の後の孫履眞です。」

「佛家の弟子ならば、法式は知つて居さうなものだ。」

「法式などは表面の事、何の意味もありません。」

「それはそれでいゝが、長老は畢竟凡人だ。これから西には妖怪が多い。とても行かれたものではない。だから、こゝに留めて修行をして貰はうと思ふ。御前達は御前達で西へ行つたらいゝだらう。こゝで何時までも待つには及ぶまい。」

小行者は聲を高くして、

「あなたは仙氣があつても德行がない。大唐の天子の勅命で西へ行くものを中途で留めて、行かせないやうにするとは怪しからぬ。見損つた方だ。よし、この五庄觀に火をつけて灰にしてしまつて、師匠を連れて西方へ行かう。こゝでぐず〳〵するのは、飛んだ事だ。」

「さう云ふなら留めもしないが、全體、さういふ御前には、妖怪を降すだけの手並があるのか。」

小行者は笑つた。

「はゝあ、その事か。祖からの金箍棒、どんな妖怪でも、こつぱ微塵だ。弟の猪一戒の釘鈀、沙彌の禪杖、これらも妖怪の怖がるものだ。御心配は餘計な事だ。」

大仙は笑つた。

「何んだ。蠅が燈心を舞はすやうな事が何にならうか。まあこゝから、長老を連れ出されるものなら、連れ出して見ろ。それが出來たら、人參果の馳走をしてやらう。」

小行者も笑つた。

「そんな事、何であるものか。二人の兄弟を連れて來て、手並の程を御目にかけよう。」

と云つて、二人に譯を話すと、猪一戒は喜んで、

「人參果とはどんな味なものか。早く食ひたいな。早く行かう。」

と云つて一緒に火雲樓に行つて見ると、驚いた。樓は、檐も、柱も、門も、壁も、簾も、一切殘らず火になつて居る。烈しい炎が、金の蛇の樣に伸び上り、赤い煙が眞紅の龍の如くに捲きついて居る。小行者はすつかり驚いて、魂が身に附かない。師匠も燒け死なれたかも知れんと、氣が氣でなく、避火の呪をして這入らうとするが、普通の火と違つて、近よることも出來ない。ふりかへると、明月は口を蒙つて笑つて立つて居る。

「どうした火だ。誰が放けたのだ。師匠と大仙はどうされた?」

明月は笑つた。

「誰も放けはしません。」

「誰も放けないのに、どうして燒ける?」

「こゝは火雲樓ですから、自然に火があります。誰も放けたのではありません。長老も師匠もこ何處に隱れもされません。」

小行者は、「變な事だ。」と思つて、

「危いぞ。どうしよう。」

「大仙は兄貴と賭をしたのだ。だから火を放けたのだ。どうかして消してやりたいものだ。」

「火を消すのは水に限る。」

「さうだ。水だ。水に限る。が、少しばかりでは駄目だ。龍王を賴んでどつさりかけて貰はう。」

「兄貴早いがいゝ。早く師匠を助けろ。」

小行者は空に跳び上つて呪を念ずると、西海龍王がすぐやつて來た。

「何か御用ですか。」

と禮をする。

「あの火です。あれを水で消して下さい。師匠が危ないのです。」

「よろしい。やりませうが、風神も雷神も居ませんから、一寸困ります。」
「樗はない。雨ばかりでよろしい。」
と云ふ處へ、東海龍王も來た。
「早くやつて下さい。」
すぐ黒雲が滿ち渡つて、大雨が盆を傾ける樣に降つて來る。小行者は大喜びで、「こんな雨なら、どんな火だつて消えるだらう。」と思つて、龍王に、
「どうも有難う。」
と禮を云ふと、龍王は雲を停めて雨を止めた。
「もう御歸り下さつて結構。御禮にはその中に參ります。私は師匠を助け出さねばならない。」
龍王は歸つて行つた。小行者は「もう大丈夫。」と思つて、火雲樓めがけて落ちて來ると、意外にも火は盛んに燃えて居る。そこへ落ち込んだので、「あつ」と云つたが、もう毛に火はついて居る。大狼狽に狼狽てゝ飛び出したが、毛はすつかり燃えた。猪一戒と沙彌とが駈けつけて消してくれたので助かつた。
「何だつて、こんな火の中に飛び込んだのだ?」
「大雨で、すつかり消えたと思つたのだ。」

「飛んだ事だ。雨がかゝると、油の樣に一層燃え上つたのだ。あの火は水では到底駄目だ。」
「火は木から燃えるのだ。おれたちの釘鈀や、禪杖で、この二階家を引き倒したら、自然に消えるだらう。」
「それよりか、外に火を放けたらどうだ。驚いて中から消しに出て來るだらう。そこで師匠を助け出すと云ふのは。」
小行者は考へた。
「そんな事は駄目だ。元來おれが爭つたのが惡かつた。が、今の處、おれの祖は大仙と親交があつたのだし、また『急な時には云つて來い。』と云つて居たから、探がし當てゝ助けを賴んで見よう。」
「が、その祖は何處に居るのか、分つて居るのか。」
「いや、それはおれの一體だから、分らぬことはない。すぐ行つて來る。」
と、空中に跳ね上つて、見當をつけて西の方へ飛んで行く。
間もなく樓閣が見え出した。小行者は喜んで、自分の家のやうにずん〳〵這入つて行く。頭を擧げて見ると、孫大聖はちやんと臺の上に座つて居る。小行者は床に這つて、
「孫履眞が參上しました。」

と云ふと、大聖は、

「來たか。御前は師匠について、西方へ行つた筈だつたが、何で、方角違ひの此處へやつて來た？」

と問ふ。小行者は火雲樓の次第を逐一述べる。

「鎭元大仙は地仙の祖で、法力が廣大だ。自分の力で天一眞水で消せんこともないが　あれと爭を起してはいかん。それよりは、南海に行つて觀世音菩薩に御願ひ申せ。何とか御助け下さるだらう。」

「觀世音はまだ存じ上げませんが、如何でせう？」

「識る識らぬに拘らず、助けてくれるのが佛の慈悲だ。若しいけなければ、よく事情を申し上げろ。」

小行者は喜んで、拜して其處を起つて、南海普陀山を目がけて行つた。

普陀山はすぐ見えて來た。で、雲から下りて洞を尋ねようとすると、紫竹の林から黑熊大神が現れた。

「來たのは孫履眞ではないか。」

小行者は名を呼ばれて驚いた。

「さうです。さうです。まさに孫履眞です。菩薩に御願があつて參つたのです。御導きを願ひます。」

「御前の願は『火雲樓の火を消さう。』と云ふのだらう。」

「さうです、さうです。よく御存じで。」

「それならば、菩薩に御目にかゝるには及ばない。ちやんと仰が出て居るのだ。」

と云つて、五六寸ばかりの一條の柳の枝を出した。それに、二三點水珠がついて居る。それを遞して、

「菩薩は『この甘露水を火の上に落とせ。自然に消える。』と仰せられた。」

小行者は受け取つて、不審が晴れず、「これでどうして、あの大火が消えるだらう。」と思つたが、大神は、

「早く行け。師匠の身の上に事があつてはいかん。柳の枝を還す時に菩薩に御目にかゝれ。」

と云ふ。小行者はまた雲に乘つて五庄觀に來ると、火はまだ盛んに燃えて居る。小行者は「何だか黑熊大神に欺されたらしい。」と疑ひながら、火の上に一滴洒ぎかけると、意外にも火炎は半分ばかり靜まりかけた。「これは旨い。」とまた洒ぐと、一寸の間に火はすつかり光を失つてしまつた。殘りの滴を力まかせに振りかけると、火の氣は全くなくなつて、火雲樓はもとのまゝに清

らかに現はれた。
猪一戒と沙彌とは吃驚した。が、大喜びで居る處へ、小行者が空から降りて來た。
「えらい法力だな。一體どうしたのだ？」
「一寸は云へない。早く師匠を連れ出せ。」
と云つて、三人で駈け込んだ。ところが、内は何の事もなくつて、大仙と半偈とは、ちやんと座つて動きもして居ない。猪一戒は大仙を指して、
「大仙、あなたは負けですぞ。」
と云ふ。大仙は小行者が火を消したので、
「この小猴はえらい。祖を辱しめない腕前があるぞ。一體どうしたと云ふのだ？」
小行者は得意になつた。
「こんな火なんか消すに譯はありませんよ。」
「さうではあるまい。本當を云はぬと、また火を出して、御前もこゝから出られんやうにしてやるぞ。」
小行者は「また何かあつては。」と怖がりながら、
「助けてくれたのは祖です。また觀世音菩薩が御通りがゝりになつて、兄弟が家を打ち毀さうとすろのを見られて、『こりや大變。』と勸められて、甘露水で消されたのです。別に頼んだのではありません。」
と云ふと、大仙は、
「あゝさうか。菩薩の慈悲だつたのか。菩薩が中に這ひられたのならそれでいゝ。御前たちを行かせてやらう。」
と云ふので、半偈は禮をして、
「辱うございます。先を急ぎますから、御暇を……。」
と云つて起たうとすると、猪一戒が留めた。
「まあ御待ち下さい。先生が賭に負けられたのです。『負けたら人參果を喫はせる。』と云ふ約束があつたではありませんか。どうか御馳走して下さい。喫つて元氣をつけて西へ行きませう。」
大仙は笑つた。
「よし／＼馳走しよう。」
明月と清風とに、五つ人參果を取つて來させる。それを四人に喫べさせ、自分も殘りの半分喫べ、その餘を童子らに喫べさせる。旨いのでみんなそれで大喜びだ。
半偈等は喫べ終つて、挨拶をして、行李を挑げ、龍馬を率いて大道に出て行かうとする。小行

者は、

「ゆつくり行つて下さい。」

と云つて、雲に乘つて、南海に飛んで、觀世音菩薩の御前に出て、柳の枝を返納して、禮を述べた。

「どうして二三滴で、あの大火が消えたのでございます？」

「それは何でもない事だ。甘露の慈悲に敵ふものはないからだ。」

小行者は「成程」と思つて、しきりに頭を下げた。また雲に乘つて、一行に追ひ著いて、事の次第を話すと、みんな感服しつゝ西に向つた。

二〇

半偈等は大仙の法力や、觀世音菩薩の慈悲を喜んだり、感じたりして、覺えず月日を過しつゝ行く中に、時は冬になつた。日が極く短いので、數十里行く中に俄かに闇くなつた。

半偈は馬上で、小行者に、

「急に夕方になつた。早く宿を取りたいものだ。」

小行者は見廻した。

「こんな荒野原で、家は一軒もないではありませんか。村のある處まで、ずん〳〵行くより仕方がありません。」

「さうだな、さうしよう。」

猪一戒と沙彌とはすこし後れて居た。半偈は云ふ。

「急がないか。暗くなつてしまふ。」

「そりや御非道い。あなたは馬で兩手は御樂ですが、私は荷物を挑いで中々苦しいのです。夜になつたつて、さう急ぐ譯には參りませんよ。」

「まあさう怒るな。先が長いから、さう云つたのだ。」
「緩くりするものはさせて置きませう。早く行けるものは早く行きませう。」
と云つて、小行者は手を擧げて、馬の尻を打つた。と馬は痛いので飛ぶ樣に走り出す。小行者はその跡を追うて駈けて行く。暫く行くと、路の向ふに大河が見えて來た。半偈は馬を駐めた。
「履眞、あれはどうだ。どうして越さうか。」
「船を探がして、それで越すより外はないでせう。」
「船があるだらうか。此の邊に、家も何もないではないか。」
「ともかくも、河まで行つて樣子を見ませう。」
小行者が岸まで來て見ると、まことに大河だ。あたりはたゞ茫として、何處が岸だか、堤だか全く分らない。「どうしたものだらう。」と考へて居ると、眼の前を一艘の小船が通るのが見える。
「こりやうまい。」と思つて、
「その船を賴みます。」
と云ふが答へるものもない。また呼びまた呼ぶが、その返事もない。で、身を飛ばして船の中に落ちて見ると、船には人は居ない。全くの空船だ。それに棹もなければ、櫓もなければ、舵もなく、たゞ帆が一つある。それが風を受けるので動くのであるが、今は風が無いから、一つ處に居一

るのだつた。小行者は耳から金箍棒を取り出して、それを棹にして、船を漕ぎ寄せた。半偈はそれと見て、馬を牽いて乘らうとする處へ、猪一戒と沙彌とが一所懸命に駈けて追ひ著いた。で、四人船に這入ると、小行者は鐵棒で船を出す。流が早いので、すぐ中流に出た。
はじめは淺かつたが、中流になると、水は急に深くなつて、小行者の鐵棒は全く底に著かなくなつた。それと見て、沙彌も禪杖を出して水をかき廻すが、櫓も舵もない船は、たゞ一つ處をくるくると廻るばかりだ。猪一戒は嘲笑つた。
「日が暮れるのに何でぐず〳〵するのだ。」
半偈は船の進まないので焦つて居る處なので、
「何で餘計な事を云ふ。」
と云ひも了らず、空中から風が吹き落ちた。ひゆう〳〵と鋭い聲を上げて、船の帆に吹き立てる。と、船は飛ぶ樣に走り出した。あたりは眞暗になつてしまつた。その中を船はましくらに走る。方角はすつかり分らない。半偈は「恐ろしくはない。」と口では云つたが、實は怖くつてしやうがない。が、徒弟が傍にしつかりと附いて居るので、些か安心した。猪一戒は「觀世音、觀世音。」と念じ續けた。
幾里流されたか分らない中に、やつと風が靜まつた。と、船はちやんと岸に著いて居る。

「一體此處は何處なのだらう。」
「聞かなければ分りません。が、この闇さでは、しやうがありません。まあ岸に上つて人家を探しませう。」
みんな船から上つた。幸に大道があるので、それについて探して見るが、家は一つもない。それでも進んで行くと、微かに城廓らしいものが見えるが、はつきりしない。
半里ばかり行く中に、大勢の人が牛車に乘つて通るのがある。半偈は喜んで馬を飛ばして追ひついて問はうとすると、俄かにそれらは見えなくなつた。
「變だな。今まで見えて居たのに。」
「本當にさうです。どうしたのでせう。」
云ひ合つて居る中に、また車が見えて來た。「こりやいゝ具合だ。」と追ひかけると、また消えてしまつた。
「どうも變だ。何かありはしないか。」
と云ひながら進むと、行手に城が見える。高くて大きいが、どうしたことが、荒れに荒れて、さつぱり整つて居ない。城の門の扉は、半分開き、半分しまつて居る。出たり這入つたりする人はあるが、何だか、うすぼんやりした樣子だ。門から這入ると街はちやんと道々に分れて、人が大

勢往來して居て、城外の荒れたのとは大違ひだ。たゞ一體に薄暗くて、じつとりとして陰氣が漲つて居る處へ、そこへ四人が勢よく這入つて來たのを見て、それらの人々が集まつて取り圍んだ。
「何處から來た人だ？」
「よゝこの國内に這入つたものだ。」
「何と云ふ和尙だ。」
と口々に云ふ。小行者は、
「天下の道は多い。しかし通れん處はない。誰が來ない、といふ事はありますまい。」
と云ふ。
「しかし、この和尙たちは、活きて居るのだらうか、死んで居るのだらうか。」
小行者は笑つた。
「をかしな事を云はれる。活きて居なければ來られんではないか。」
「活きて居るのなら、此處に來て、何をされる？」
「何もしに來はしない。舟で風に吹かれて、來たのです。今晩何處かの寺へ泊めて貰つて、明日はすぐ立ちます。寺があれば敎へて下さい。」
「此處には寺はない。たゞ一つ慈恩街に刹女の行宮がある。其處へ泊つたらいゝでせう。」

「泊る處があればそれで十分。早速そこへ行きませう。」
「あなた方外國人を見ると、騒ぐものがあるかも知れない。怖がらずに入らつしやい。」
「承知、承知。」
と云つて、慈恩街に來て見る。紅い塀の中に松が群立つて居る。丹い陛の傍に五色の花が咲いて居る。眞中の正殿は、高々と立つて、彫つた檻干、高い樓、前に後に續いて何れも立派なものだ。
四人は一所に這入つて行くが、人は一人も見えない。たゞ一つの厨子があつて、中に、女人の像がある。正殿の後まで來ると、老婆が一人居る。四人を見て驚いた樣な喜んだ樣な樣子をして、
「あ、あなた方は何處から御出でゝ？」
半偈は口早に「唐天子の命令で西方に行く。途中で、風に吹かれて此處へ來たのだ。」と云ふことを述べる。更に「こゝに一夜泊めて貰ひたい。」と云ふと、老婆は微笑んで、
「あなた方が、外國の人だと云ふことはすぐ分りました。こゝまで入らつしやるのは大變でしたな。こゝは手狹で、いゝ部屋もありません。裏の二階に上つて御休みなさい。御案内します。」
と云つて前に立つ。四人はついて行くが、梯子が高くて長い。猪一戒はそれを見て、
「恐ろしく高いな。おれはこゝで草を布いて寢る。その方が馬の番にもなる。」

「そりや隨意だ。」
と云ふ中に、老婆は、
「御腹が御空きでせう。何もありませんが、御粥でも。」
と云つて、臺所に行つて用意する。暫く經つて薄い粥だけ四碗持つて來た。で、みんな喫べると、猪一戒は、口の中で、
「こんな大きな寺で、何もないとはどうした事だ？」
ぶつ〳〵云ふと、老婆は聞いて、
「この米でも山から持つて來るのです。これで御凌ぎ下さい。」
「でも、道々店にはいろ〳〵のものがあつたではないか。」
半偈は叱つた。
「この粥でも有り難い。餘計な事を云ふな。」
猪一戒は默つたが、暫くして、
「いゝ粥だ。まるで湯のやうだ。」
と云ひつゝみんな喫つてしまつた。老婆は笑ひながら片付けて臺所へ行つた。半偈等は二階に上つた。見ると、そこには厨子に女仙の像が祭つてある。その前に燈火がともつて居る。半偈は、

「この燈火の下に居よう。こゝに蒲團を布いてくれ。」
と云ふ。沙彌はその通りにする。半偈はその上に行儀よく座つた。
猪一戒は臺所に行つて、老婆に一束の草を貰つて馬に食はせ、残りを敷いて二階の下で一睡した。が、ふと腹痛がするので、便に起きた。まだ宵の口なので、街には燈火がきらきらとついて居る。それに釣られて出て見ると、茶店、酒店が續いて、食ふ人、飲む人が出たり入つたりして大賑だ。猶行くと一軒の饅頭屋がある。丁度、蒸籠から出して饅頭が蒸氣を盛んに立て、並んで居る。それを買つて行くものあり、そこですぐ喫べるのもある。猪一戒は涎が流れてとまらない。
「二つ下さい。」
と云ふと、店番は、「買ふのだ。」と思つて、「はい」と云つて二つ渡す。猪一戒は、旨い、不味いもなく、すぐ喫べてしまつたが、足りないので、
「また二つ。」
と云ふと、二つよこす。喫べてしまつたが、まだ足りないので、帳場に立つて行つた。店番は「勘定を拂ひに來たのだ。」と思つた。
「饅頭はどうです。」
「うまいか不味いか、まだ分らない。もうすこし施して下さい。」

店番は喫驚した。
「冗談云つてはいけない。饅頭は賣り物ですぞ。施しなんか出來るものですか。」
「こりや可笑しい。坊主は錢がない。施しをすると極まつたものだ。」
店番は怒つた。
「永年店を開いて居るのに、御前のやうな坊主に逢つた事がない。人の饅頭をたゞ喫つて施しだなんと云ふ。こゝの法度を知らないのか。縛つて役所に衝き出すぞ。」
猪一戒は云ふ。
「出家人には、皇帝にでも施しを願ふ。こゝの國王はおれたちの國王ではない。おれをどうする事が出るものか。」
店番はいよ〳〵怒つた。起ち上つて引き止めた。
「錢を拂へ。」
「和尚が拂ふものか。」
「和尚でも何でも拂へ。」
「それならもう二つよこせ。明日一所に拂つてやる。」
「外國人の御前だ。何處で拂ふ?」

「刹女行宮内に居る。明日拂ふ。」
「御前は『和尚は錢がない。』と云つたではないか。それがどうして拂へる？　拂ふなら今拂へ。」
「さう云ふな。來る道々、善人から施して貰うたのがある。が、みんな師匠が持つて居る。だから、明日拂ふと云ふのだ。」
店番は信用しない。引つ張つてどうしても離さない。焦つて猪一戒が手で拂ふと、思はず力が入つたので、店番は衝き飛ばされて、地上にへたばつた。
「ひどい奴だ。衝き仆しやがつて。」
と大聲を上げる。猪一戒は離されたので、大急ぎで脫け出して、行宮に歸つて、草にもぐつて寢てしまつた。
店番が大聲を上げて居る處に通りかゝつたのは、國王の御子の黑孩兒太子であつた。大勢の家來を連れ、燈籠や松火をともし連れて遊びに出られたのであつたが、聲を聞いて立ち留まつて、
「どうして、大聲を上げる？」
店番は起き上つて、饅頭の始末を述べると、太子は、
「この國の法度を話したらうな。」

「申しましたとも。處が彼奴が申しますには、『自分は外國人だ。違つた國王はどうとも出來ない。』と。」
太子は怒つた。
「この國に來た以上は、こゝの民だ。どうとも出來ない事があるものか。一體彼奴は今何處に居る？」
「刹女行宮に居ます。」
「よし。」
家來に、
「早く行つて、その和尚を捕へて來い。この人を案内にして……。」
家來が十人あまり、店番を先に立てゝ行宮に來て探して奥に這入ると、鼾の聲がする。燈火で照らすと、猪一戒は草を被つて、頭を抱き腰を曲げて狗の樣に寢て居る。
「あれです。」
と店番が云ふので、頭を抱き、脚を引いて起さうとする。猪一戒は饅頭で腹がいゝので、よく眠つて居るところを揉まれて、煩さいので腰と足と一度に伸ばした。その勢にはね飛ばされ、押しつけられて、ころがつたり、仆れたりしたところへ、頭を上げて、兩方の團扇のやうな耳を振り

立てたので、みんな喫驚して、思はず表へ駈け出した。
猪一戒は目を醒ましたが、誰も居ないので、「變だな。夢を見たのかな。」と起き上つて小用に出て、歸つてまた寢てしまつた。
家來どもは逃げ出して、
「どうも。和尚は野猪の様な奴で、手がつけられません。」
と云ふと太子は、
「馬鹿を云ふな。おれが行く。」
「御待ち下さい。御身の上に何か起ると、娘々様に相濟みませんから。」
「そつと行つて見るだけはいゝだらう。」
みんな太子に隨いてまた行く。猪一戒はすつかり眠つて居る。太子はその前まで行つて、
「繩を二筋持つて來い。眠つて居る中に縛つてやらう。」
持つて來た繩でわなを作らせ、一條は頭にかけ、一條は脚にかけて、次第々々に締め上げて置いて、またがんじがらみに縛りつけた。猪一戒はまだ醒めない。
「宮中へ挑いで行け。」
よく縛つてあるので、もう恐くはない。四條の棒で挑ぎ上げて、八人がゝりで太子に隨いて潛龍

殿に連れて行つた。
猪一戒は階段の下まで挑がれたが、まだ目が醒めない。太子は牛の皮の鞭を出させて、尻のところを七八邊打たせた。やつと醒めて、
「誰だ。冗談するな。」
と云ふが、構はずまた五六邊打たせた。痛いので手で摩らうとすると、利かない。驚いて眼を開けて見ると、縛られて貴人の前に居る。
「誰だ。若いの、何だつて縛つたのだ。」
「何處の奴だ。人の饅頭を騙つて喫つた奴は。」
猪一戒は云ふ。
「和尚は人の御蔭で日を過す者だ。饅頭は布施と思つて喫つたのだ。騙つたのではない。」
「そりや、それでいゝが、『こゝの國王がどうも出來ない。』と云つたではないか。」
「出家人は三界を出た者だ。世に何の拘もないのだ。神だつて仙人だつて、何とも出來ない。況んや、こゝの國王など手が出せるものか。」
太子は怒つた。
「この糞坊主、この國王の威勢を知らないか。一遍怒ると、天下の人がふるへ上るのだぞ。」

『へへん。何とでも云へ。おれを何とも出來るものか。」
「こんな奴、なぐりつけろ。」
家來に大きな棒で、無闇になぐりつけさせる。猪一戒は繩を脫けようとするが、しつかりして居るので、切ることも出來ない。たゞ頭の方だけ切つて、頭を出して、大聲に叫び立てる。
國王の妃の玉面娘々は、
「變な聲がする。あれは何です。」
官女が、
「あれは太子殿下が、和尙を捕へて、潛龍殿で御叩かせになつて居るためでございます。」
と申し上げる。
「王樣の御嫌ひな和尙が、何處から來たのか。行つて見よう。」
と云つて燈籠をつけさせて、潛龍殿に來られた。太子は、忙いで出迎へられると、
「何だつて、和尙を御叩かせになる？」
太子がその譯を話されると、
「それは和尙が物を知らないからです。罰すべきでせうが、まあ許して御遣りなさい。しかし、何處から來たか聞かせて見ませう。」

と官女に云ひつける。と、官女は下りて來て尋ねる。と猪一戒は許されると思つて、
「私はたゞの廻國和尙と見えますが、實は私の父は西方の淨壇活佛　師匠は東方の大禪師、兄は花果山天乙の後、弟は流沙河の羅漢の門人です。今、經を求めに西方へ行く途中です。」
と云ふと、娘々は「經を求める。」と聞いて急に顏色を變へた。
「よく見ませう。」
と云つて下りて來る。燈籠松火であたりは晝の樣。猪一戒は「助けてくれる。」と思つて、頭を上げ、耳を立てゝ、
「どうか御許し下さい。痛くて堪りません。」
と云ふのを見て、娘々は喫驚して仆れかゝつた。それを官女が支へたので仆れずに濟んだが、
「一體何と云ふ名なの。」
「『猪』と申します。」
「では、『猪八戒』ではないか。」
猪一戒は好意で聞くのだと思つて、
「さやうでございます。」
と云ふと、娘々は柳の眉を逆さに立て、星の眼を丸くして、

「いゝ具合だ。よく〳〵縛り上げて、逃がしてはいけませんぞ。仇です。」
太子は却つて驚いて、
「御母様、どうしてこれが仇なのです？」
娘々は泣き出した。
「御前は昔の事を知らないが、わたしが積雷山の摩雲洞と云ふ處に居た時、唐の坊主が火焔山が通れないので、父王の芭蕉扇を借りて火を消さうとしました。父王がそれを御許しにならない。その弟子の孫行者と毎度戰つて洞に歸られません。ところが外の弟子の猪八戒と云ふのが、その隙を伺つて、這入つて來て、わたしたちを塵にしました。この御蔭で、わたしは冥途で何十年も苦勞をしました。父王は佛の恩で王の位に登られ、わたしも仙道を修行が出來たので、やつと苦界を出て、今の身分になつたのです。この恨みがどうして忘れられるものですか。どうして許されるものですか。明日は父王に申し上げて、ずた〳〵に切つてやりませう。」
猪一戒は驚いた。
「私は『猪一戒』です。『猪八戒』ではありません。」
「今『八戒』と云つたではないか。長い口で大きな耳は八戒でなくつて誰だらう。よく〳〵覺えて忘れはしない。」

「いや違ひます。似て居りますが、私はその子です。」
「親の債は子が拂ふ。許されるものか。」
猪一戒は大聲で、
「あなたは、私を縛つていゝ氣持で入らせられるが、兄貴の孫小行者は、孫行者の直系で、鐵棒を振り廻はすと敵ふものはない。こんな小さな國などは、あの棒で粉微塵になつてしまふ。今に御覽なさい。この事を知るとすぐ遣つて來ますぞ。」
娘々は思はず頭を低れると、太子は慰めた。
「御心配なさいますな。この和尚は法螺吹です。」
「いや、孫行者と云ふ奴は、大した手並の奴です。父王でも持て餘された程なのです。それの後だとすると、用心しなければなりません。」
「御心配に及びません。どうか致します。」
「どうすると云ふのです。」
「外ではありません。今夜、彼奴の寢て居る處へ、陰兵を大勢出して、みんな一所に縛り上げて、殺してしまへば事なしです。」
娘々は、

「いゝ考です。早く御遣りなさい。」

と云つて喜んだ。

玉面娘々は、もと牛魔王の妾であつた。牛魔王は火焔山の火を消す芭蕉扇を持つて居た。火焔山は全山火で、それを消さなければ西方へは通られない。それで孫行者は借りに行つたのだが、貸してくれない。怒つた孫行者は、牛魔王と戰つて遂に勝つて、芭蕉扇を得て火を消して山を越したのであつた。その間に、猪八戒は妾の家に這入つて、玉面娘々を殺してしまつた。この恨みが今に殘つて、猪一戒は許されなかつたのであつた。

二一

黑孩兒太子は母の玉面娘々の仇が、孫小行者であることを知つたが、しかし、彼奴らは手並がある。退治するのは容易でない。父の王の手下の陰兵を使ふより方法がない。が、それを使ふには兵符がなくてはならない。で、母に賴んで、こつそりとそれを盜み出して貰つて、陰兵に命令した。

「早く刹女行宮に行つて、三人の和尙を捕へて來い。靜かに行け。彼奴に知られるな。」

陰兵は命を奉じて、隊長に率ゐられて出かけた。隊長は、

「對手はたゞの三人だが、東方から來た奴らだ。きつと何か道法と云ふものがあるだらう。馬鹿にして行つてはいかん。おい、先に行つて樣子を探つて來い。」

と二人の氣の利いた兵に云ひ附ける。二人は先に立つて二階屋まで行く。そこには燈火がたゞ一つともつて居て、その下に一人の和尙が行儀よく座つて居る。光に照らされた顏は溫和やかであるが、何だか畏ろしい處がある。「外の二人は。」と見ると、東側の一間ですつかり睡つて居るが、これも何處か强いところがあつて、近づけさうもない。で、そつと下りて隊長にその趣を告げて、

「あれらは、法で迷はして捕へるより外に仕方はありますまい。」
と云ふ。隊長は、
「さうだ。さうしよう。」
と云つて計を廻らす。

半偈は心を凝らして居るが、二人の妖怪が、こつそり窺つたと知つて、「何かあるな。」と思ふ處へ、一群の美人が忽ち面前に現はれた。桃の口、柳の腰、艶々しい顔色、ふくよかな頰、梨花よりも美しく、牡丹よりもあでやかだ。みんなにこ〳〵して、
「何處から入らつしやいました？　何と仰つしやいます？　こんな冷い處で御困りでせう。」
と云ふが、半偈は知らん顔をして居る。
「下に煖かい部屋があります。蒲團もふつくりして居ます。枕も軟らかです。どうかあちらへ御出で下さい。」
と口々に云ふが、半偈は、やはり即かん顔をして居るので、たうとう怒り出した。
「こんなに勧めても來ないとは、馬鹿もの、馬鹿もの、今に飛んだ目に逢ふぞ。」
と云ひながら下りて行つた。すぐまた階段に響があつて、幾人かゞ上つて來る。見ると、今度は青い顔、赤い髪、黄な鬚、丸い眼、いづれも奇怪な樣子をした一群が、一齊に近づいて來る。前

になると、飛んだり、跳つたり、はねたりして、
「和尚奴、國に這入つたら、國の法に從ふべきだ。どうして宮殿に出て來ない。貴樣の弟子の口の長い耳の大きい奴は捕へられて、明日は殺されようとして居るぞ。貴樣が出て御詫びをすればば救けられるか知らんが、……みんな飛んだ奴どもだ。」
半偈は彫物の樣に少しも動かない。
「聾や、啞の眞似をしたつて駄目だぞ。今に縛り上げるぞ。」
と、口々に云ふが、近よる事は出來ない。暫く喚きあつて居たが　仕方がないので、また下りて行つた。と、入れ違ひに人聲が湧く樣にして、大勢の兵士が上つて來た。劍を持つもの、刀を取るもの、牙を咬んだり、目を怒らしたり、罵つたり、喚いたりする。陰氣で黑々として居る處へ、冷氣が寒々と通つて來る。まことに魔王の世界と云ふものだ。
小行者はふと大勢の兵士が半偈を圍んで居るのを見た。「變だな。こりや、人だらうか、鬼だらうか。何だらう。」と驚いたが、取り敢へず金箍棒を取り出して、大聲を上げて、
「こりや妖怪ども、師匠をどうするのだ？」
と云つて振り廻す。と兵士はその勢に僻易して、「わつ」と云つて、狼狽ながら階段をどた〳〵下りて行つた。沙彌も禪杖を提げて出て來た。